

之れに對して其れ以後の形態に就いては僅に簡單なる特徴を數ふるを以て満足せんと欲するのである。かくて先づ第一に手を着けんと欲するは家内仕事である。

家内仕事とは自家産出の原料を用ひ、自家使用の爲めに、家の内にて行ふ工業的生産を稱する。其の本原的にして最も純粹なる形態に於ては、何等の交換の存するなくして、各個別經濟がそれ自らの勞働によりて、其の家族仲間の凡べての欲望を満足せしむることを前提としてゐる。何れの貨財もその生産の全段階を、それが消費されるべき同じ經濟内に於て經過するものなるが故に、從つて生産は常に自家需要の尺度に基きてのみ企てられるのである。此の時代に於ては、尙ほ未だ貨財流通なるものを見ず、又資本なるものも存しない。家の有するものは唯だ享樂可能な状態に對して程度の差ある使用財産のみであり、即ち穀類、麥粉及び麵麩、亞麻、撚絲、織物及び衣服の如き之である。生産の補助手段として、例へば手挽臼、斧、紡錘、機臺等ありと雖、交易の方法を以て他の貨財を獲得し得る如き貨財は一も存し無い。一切のもの凡べて自家勞力に俟たざるを得ずして、家計の作業と生産の作業とは之を分つことが出来ないのである。

家内仕事てふ形式を取つて、工業は農業よりも古しと云ひ得る。新らしい土地の發見者が其處の原始民族に接した場合には、到る處で彼等の間に多種の工業的熟練の存するを發見した。弓箭を製作し、蘆・樹皮・柔かき木根を用ひて蘆及び容器を編み、原始的なる焼物を製造し、革を鞣し、磨石を用ひて澱粉に富む穀類を粉磨し、家を建築する等即ち之であり、鑄鐵の業も已に諸所に行はれてゐた。北アメリカの狩獵民族、南洋の漁撈民族、シベリヤの遊牧民族併びにアフリカの農業黒人族は今日に尙ほ専門の手工業者を有せずして、多種多様な工業的技術を營んでゐるのである。ブラジル内部に住む僻れなる全裸體の森林族すら棍棒、弓箭を製し、家、樹皮舟を作り、獸骨、石類に加工して道具となし、背負籠及び貯藏籠を編み、葫瓢を刳つて容器を作り、紡績を爲し、編織を營み、陶器製作の圖板を知らずして然

も巧妙に修飾せる焼物を製し、修飾を凝らせる開鑿棒、腰掛臺、笛、櫛、假面を刻み、羽根・毛皮等を以て多様の祭典裝飾を作り出してゐる。

斯くて漸く耕耘による農業の状態に進歩するや、温帯寒帯の諸國に於ては、上述の作用はいよゝゝその偶發的性質を失ひ來り、全經濟は確乎たる秩序を具ふるに至る。即ち時候好き季節にありては原料獲得と戶外勞働とに専念しなくてはならず、冬となれば原料精製の爲めに家族の全員は皆爐邊に集ふ。仕事の種類に應じて夫々に確乎たる法則が作り出され、何れの仕事も自ら生ずる經濟性の要求に即應して家庭生活の中に編入され、更らに習俗はこれを紡ぎ包むに善美なる道德的の金線を以てし、人間の生活を豊富にし高尚ならしめるのであつて、それは簡單なる技術と原始的なる形式を以て世代より世代へと相傳されて行くのである。斯く人は自己使用の爲めにのみ勞働するものなるが故に、生産者が自分の腕の仕事に對する興味は、勞働期間を超えて長く繼續する。實に彼は其の仕事の中に自己の最善なる技能と全藝術心とを體現せしめるのである。これやがて國民的家内仕事の製作品も亦、今日の美術工藝時代に對して通俗的なる様式模範の極めて豊饒なる寶庫となり得る所以である。

ノールウェイの農夫はインメルマン作御伽噺「ミュンヒハウゼン」の中に現はれて來るウェストファーレンの莊園村長の如く、自ら鍛冶屋となり、指物師となるのみならず、また木造家屋を己が手にて建て、農具を作り、車、櫛を製し、革を鞣し、各種の木具を刻み、金屬の家具を鍛へるのである。アイスランドにては、農夫は更に極めて巧みなる銀鍛冶匠である。高地スコットランドにては、アダム・スミス時代に於て尙ほ、各人は自ら機を織り、布を搗き晒し、革を鞣し、靴を作つてゐた。ガリシア、ブコヰイナ、ハンガリー及びジューベンブルグの大部分、ルーマニヤに於て、又南部スラヴ族の間にては、最近に至るまで、手工業者として別に獨立して存するものなく、たゞ一つ鍛冶匠の存したるの

1) Immermanns „Münchhausen”

みであるが、それと尙ほ多くはチゴイネル(譯者註)であつた。ギリシヤ及びその他のバルカン半島諸國にては、その他に旅稼ぎをする大工があるわけである。尙ほこれに類した例は、他の民族より之を無數に取り來り得るものにして、殊にロシア及びスウェーデンの農民の驚歎すべき程の器用と機巧とは、これ取りも直さず、その自家經濟に於て多種多方面の技術的作業に従ふが故に依らずんば非ず。況んやかの紡績、機織、麵麩燒等の如き婦人の工業的勞作に至つては古往今來何人も熟知する所、茲に贅言を費すの要があるまいと思ふ。

〔一〕 アイレント・メント著『ノルウェー家内仕事論』(Eilert Sundt, Om Husfliden i Norge)一八六七年クリスチアニア版。ブルム著『ノルウェー王國』(Blom, Das König. Norwegen)一八四三年ライプツィヒ版。二二七頁。リンダウ譯、フオレスト著『ノルウェーとその民族』(Th. Forester, Norwegen und sein Volk, übersetzt von M. B. Lindau)七四頁。『ノルウェー』(Norway)一九〇〇年、クリスチアニア版、三九一頁。ジードンブラット著『スウェーデン』(E. Sidenbladh, Schweden)一八七三年版。

〔三〕 オーストリア家内工業をも参照せよ。エックスマン(W. Exner)編纂『一千八百九十年ウィーン農林博覽會家内工業部案内』。なほ『オーストリア社會學月報』(Österreichische Monatschrift für Gesellschaftswissenschaften)第四卷、九〇頁以下。第八卷、二二頁。第九卷、九八頁、三三頁。『オーストリア王立博物館報告』(Mitteilungen des k. k. österreichischen Museums)第四卷、四一頁以下のリーゲル筆『オーストリア家内纖維工業』(A. Riegl, Textile Hausindustrie in Österreich)。ブラウン、グライクシー共著『ハンガリーの家内仕事』(Braun und Krejci, Der Hausfleiss in Ungarn)一八八六年ライプツィヒ版。シュウイマケル著『ハンガリー王國の統計』(Schwicker, Statistik des Königreiches Ungarn)四〇三頁以下、四一一、四二六頁以下。マゲート著『ハンガリー及びマイーンブルゲン』(J. Páger, Ungarn und Siebenbürgen)一八四二年ライプツィヒ版、第二卷、一六三、一七三、二六四、二六九頁。——イヅマンチック著『ブルガリヤに於ける工業經營の原始的形式』(Twantschoff, Primitive Formen des Gewerbetriebs in Bulgarien)一八九六年ライプツィヒ版。バルカン半

島の其他の諸國に就きては『外國に於ける工業階級事情に關する帝國在外公使領事館報告』(Reports from her Majesty's diplomatic and consular agents abroad, respecting the condition of the industrial classes in foreign countries)一八七〇—七二年ロンドン版。——タラヤンツ著『アルメニア人の工業』(Tarnjanz, Das Gewerbe bei den Armeniern)一八九七年ライプツィヒ版。ゴギチャイシユウイリ著『ゲオルギヤに於ける工業』(Gogitschyschwili, Das Gewerbe in Georgien)一九〇一年チューボンゲン版。ツール筆『ニンギョー市の工業經營形式』(Tsur, Die gewerbl. Betriebsformen der Stadt Ningpo)一九〇九年、チューボンゲン版(Zeitschrift f. d. Ges. Statistw. 誌、増刊號、第一卷及び第三〇卷)。
(譯者註) チゴイネル(Zigeuner)は印度種族の分派なるヒンドスタン族であり、十四五世紀の頃歐洲に入り、今日各地方に馬車を家として遊牧しつゝある族である。盜賊、卜占、鍛冶を行つて生活す。英語の Gypsy 之れに當る。

文明の程度低き民族の生活の特徴付けてゐる此の家内經濟的熟練が、如何程まで廣く行はれつゝあるかを知らんと欲せば、此の生活そのものに就きての詳細なる記述を必要とする。然れども悲しい哉、吾人は此處に其の爲めの餘地を有してゐない。かくして吾人はプロヴィナに於ける家内仕事の記事より、次の數節を此處に轉載して、以て満足するの止むを得ざるに至つてゐる。

〔四〕 ロムストルフエル著『オーストリア家内工業』(C. A. Romstorfer bei Exner, Die Hausindustrie Österreichs)一五九頁以下。ウィグリツキ著『プロヴィナの家内工業』(Wiglizky, Die Bukowiner Hausindustrie)一八八八年ケルノウイツ版。Zschr. f. österr. Volkskunde 誌、第二卷、六二頁。第五卷、一四五頁以下。第一卷、一〇六頁以下。——ハトリ著『エーストランド及びエーストランド人』(Pétri, Eistland und die Eisten)〔一八〇二年、エタ版〕第二卷、二三〇頁以下。

『プロヴィナの地方民は家族の小さい範圍で、いやそれ程までではなくとも狭い村の境界の内部に於てだけで、一切の己が生活必需品を調べてゐる。家を建つるに當つては、男子は普通、大工、屋根屋等の仕事をなし、女子は或は木舞(木舞)の

壁、木指の壁を塗り、或は木を組み立てる壁の隙間を苔にて塞ぎ、或は床を敲き固め、其他これに關係のある多くの仕事を引請ける。其の上に紡織用植物の栽培をなし、羊の飼養をなすことより、麻布・羊毛及び毛皮・皮革・毛氈・麥稈眞田を以て寝具及び被服類を製作するに至るまで、プロヴィナの田舎人は何れも凡べてを自己の手にて營むのであり、自ら栽培せる植物より染料を採り、極めて原始的なりとはいへ、しかも必要缺くべからざる手工業用具の製作をなしてゐる。食料として一般にまた然りである。即ち可なりに激しき辛勞をなして玉蜀黍畑を耘し、手挽臼にて玉蜀黍粉を製し、それを以て彼等の主要食物（ポレンタ）^(譯者註)に似た「マリガ」¹⁾を調理してゐる。又簡單なる農具、家事用及び庖厨用の容器、器具をも自ら作ることを心得、少くも一村に一人の獨習者があつて、之を心得てゐる。此の土着の民は鐵材を消費すること極めて少量なるが、その加工のみは一般に此の國に散在して住むチゴイネルの手に委ねてゐる。

（譯者註）ポレンタ（Polenta）とは玉蜀黍や粟や其の他の糯つた穀粉に、牛酪又は豕脂及びバルマ製乾酪を混じて作つた濃い粥で、イタリヤ人の好むものである。

然りと雖、自足的なる家族の工業的熟練が、極めて豊富な發達を遂げるとしても、その家族にして吾人の今日呼ぶる「家族」の夫れの如き、血族關係に立つ狭小なる協同體をだけ頼りとしてゐるものならんには、斯の種の貨財供給は結局不充分なるを免れ得なかつたであらう。尤もかの古き家族團體は之を今日の家族に比すれば、その範圍遙かに廣大なるものありしは疑ふべからずとは云へ、需要の額漸く大に、その質いよ／＼繊細になりもて行く時代に方つては、多くの民族の間に、氏族は遂に解弛するのである。而して此の事が家族より、その構成分子の間の廣汎に渉る分業を營ましむる可能を奪ひ去るに至るのである。此の際に、もし奴隸を使用し又は家人を採用して、人爲的にその家族の範圍を擴大する手段に訴ふることが出来なかつたならば、其處には到底、職業に依る生産の形成と交易經濟とへの遷移は不可避

1) Mamaliga

であつたであらう。然るにこの奴隸或は家人を採用してそれ等の數が漸く増せば増す程、其等の間に多方面なる分業を生ぜしめ、各人をして一定の工業的技術の習熟を完成せしめ得ることがいよ／＼容易になるであらう。

故にギリシャ、ローマの富者の家奴の間には、已に各種の工業労働者があつた。又カール大帝はその領地行政に關する有名なる命令中に、何れの別墅に於ても幾種類かの不自由労働者を備へ置くべきことを嚴に規定して曰く、『奉行はそれぞれ善き職人を抱へ置かるべきこと、即ち鍛冶職、金銀匠、靴匠、輻輳工、大工、楯職、漁夫、鳥刺、石鹼製造人、蜜柑水製造人、麵粉焼人、網結き人、之れなりとす』と。尙ほ之れに類したることは、他の大名の莊園又は寺領に就いて傳へられてゐる所が極めて多い。而して其處に抱へ置かれし職人達は唯その領主の仕事にのみ従事するものにして、或はその莊園の建物中にて住居と食餌とを得る家丁となり、或は自家所有の土地に移住して、其處に己が生計の資を得るのであるが、その代償として己が専門の技術を賦役に供するのである。彼等はその技術を以て宮廷に仕へてゐると云ふ意味を表はすべく *officialis, officiai* なる名もて呼ばれつゝあつた。これ蓋し「役人」てふ意味である。

〔五〕フランコット著『古代ギリシャの工業』(H. Francoite, L'Industrie dans la Grèce ancienne) 全二卷、一九〇一年ブッシュセル版。ギロー著『古代ギリシャに於ける工業的労働』(P. Guiraud, La main-d'oeuvre industrielle dans l'ancienne Grèce) 一九〇〇年、パリ版。ワロン著『古代奴隸制度史』(Walton, Histoire de l'Esclavage dans l'antiquité) 第二版、一八七九年、パリ版。

家内仕事が此處に廣汎なる組織を取るに至れるは、世人の殆く知悉する所にして、據つて以て莊園の主人は比較的豊富にして多方面なる消費、しかも工業生産物のそれをすら享受することが出来るやうになつたのである。

然れども此の家内仕事は純然たる需要生産に止つてゐないのである。已に古き發展段階に於てさへ、天然資源の不平

等が土地毎に異れる技術的機巧の完成を促したのであつて、或る民族には、その隣接民族の間には製出せられざる焼物又は石器又は弓等を製して居るが、斯かる工業生産物は賓客贈與或は戦利品の如き道程を経て他の民族の間に弘まつて行くのであり、後には交換の道筋を経て又それが行はれるのである(六三頁以下参照)。古代ギリシャ人の間には、富裕なる奴隷所有者は自家經濟に使用せざる奴隷の多數に一定の工業を習練せしめ、市場の需要を目安として生産を行はしめてゐた。それにも増して屢々行はれたことは、百姓の家族が其の工業的・家内仕事の餘剩物を、その農業及び牧畜の餘剩を取扱ふと全く同様の方法にて交換に供してゐたことである。舊譯全書にては一家の主婦がその手づから作れる布を小賣商人に賣ることは淑徳ある主婦といふ賞讃を贏ち得る事柄となつて居るやうに、今日にても尚ほ、中央アフリの黒人^{ネグロ}族婦人は手づから作れる壺又は樹皮布を週市に携へ行き、これを鹽又は眞珠に換へてゐる。ドイツの多數地方にても、田舎の住民は中世以來、麻布を町の市場若くは歲市に携へ行きて金に換ふる風がある。重商主義時代には、シユレジア及びウエストフアーレンにては、この家内生産に成る麻布を輸出せしめ得る如き國家的設備が設けられてゐたのである。而してバルチック沿岸地方にては、今日尚ほエストニアの百姓婦人の間にその織製の術が傳はつてゐる粗羅紗布^{ヴァトマール}が、中世に於ては最も販路の廣き商品にして、貨幣にさへ使用されつゝあつたのである。同じくアメリカの多數民族の間には、相隣種族の許に製作せらるゝ家内仕事の生産物が普遍的交換資料であり、日本の村落にては毎戸殆んど己が畑より得たる綿花を以て撚絲を作り、布を織り、其の一部を交換に宛てゝゐる。スウェーデンにてはウエストゴット人及びスマラント人は殆んど全國を遍歴して、各家庭にて製作せる布を賣りに出させるやうに勤めて居り、ハンガリー、ガリシア、ルーマニヤ及び南スラヴ族の諸州にては、到る處の町の週市に於て、焼物、木具を携へたる農夫と、野菜、卵の外に手製前掛、繡を施せる紐又はレースを賣ぐ百姓女を見掛けざる無き有様である。

1) Vadhmál

然るに土地所有が細分せられて、最早一家の家計を支へ行くを得ざるに至れば、田舎の住民の一部は家内仕事の或る特殊の部門を抽出して専念之に従事し、恰も今日わが南部ドイツの小農が葡萄酒、^{カッパ}葡萄酒、烟草又は煙草を産出すると同様の方法で市場を目指して生産するに至るのである。それに必要な原料は、始めの間は自家の畑地若くは共有林より得居れども、後には他より之を買入るゝまでになる。斯くて各種の類似せる生産が相互に相結び合つて、遂にはロシアの多數地方に見るが如く、その家内仕事より無際限に形式の豊富なる農民的小工業が生まれ出づるに至るのである。

然れども發展は又、別様の過程を取ることが出来るのである。即ち其處に工業を職とする獨立せる職業労働者階級を生じ、斯くて我々の第二の工業制度なる賃仕事^{ワグネル}が成立するに至るのである。從來凡ての工業的技術は土地所有及び原始生産と密接に關係して行はれしもの、今や熟練せる家内仕事の労働者は此の結合より離脱して、自己獨得の此の技術的熟練の上に土地より漸次獨立して行く獨自の生活を築き上ぐるに至るのである。さりながら彼が有する物、それは單に簡單なる道具に過ぎずして、經營資本なるものを有してゐない。従つて彼れの任務たる、常に他人の原料に自己の技術を加ふるてふこと^(六)であつて、此の原料を提供する人は其の原料の生産者にして、同時に又、完成されし生産物の消費者^(六)なのである。

〔六〕工業的労働者が其の時まで隷屬關係にありし所にては、その解放が從來の主人の利害關係に基いて要求されたことが珍らしくない。而して、其の主人はその代りに尙ほ暫らくの間は、公衆に對して材料横領に對する保證に任じてゐたのである。アルゲン^{アルゲン}ト法^{アルゲン}第廿一條第二項に曰く、『金鍛冶にせよ、銀鍛冶にせよ、又鐵鍛冶にせよ、黃銅鍛冶にせよ、又裁縫匠にせよ、靴工にせよ、己が奴隷を其等の業務に公然従事するを許したる人は、其の奴隷が其の仕事の料として他より受けたる材料を浪費せし場合には、奴隷に代りて其の賠償の責に任ずるか、其の奴隷を廢棄せよ』(Lex Burgund. 21, 2: Quicumque vero servum suum aurificem, argentarium, ferrarium, fabrum aeriarium, sartorem vel sutorem in publico attributum artificium exercere

permissit, et id, quod ad faciendū opera a quocunque susceptū, fortasse evertit, dominus eius aut pro eodem satisfaciens aut servi ipsius, si maluerit, faciat cessionem) とあるを参照せよ。

此の際に更に此の關係の二つの異つた形式が可能である。其の一は賃仕事人が一時その仕事のある家に抱へられて賄ひを得、又その地に居所を有せざる場合には住居をも給され、其の外に日給を貰ひ、其の顧客の欲望が満足されるまでの間だけ其處に留まるのである。此の事を南ドイツでは、「出職する」と稱してゐる。故に吾人はそれに倣つて此の全經營形式を出職と呼び、それに従事する者を出職人と呼ぼうと思ふ。此の有様は各所にて家婦の手に一般に抱へられてゐるお針女を見れば、直ちに解し得るであらう。

其の二は賃仕事人が己が住居に事業場を所有してゐて、原料が宛行はれるのである。そして其の原料の加工に對して個數賃銀を得ることになつてゐる。田舎の麻布織工、磨者及び賃取麵麩焼人など其の例であつて、吾人は此の形式を稱して居職と呼ばんと欲する。そは主に固定してゐて運搬に困難なる生産手段（磨車、麵麩焼籠、機織臺、爐等の如き）を必要とする工業に行はれる所である。

賃仕事の此の二形式は、今日も尙ほ盛んに世界の各地に行はれてゐるのであつて、インド、支那及び日本、モロッコ、スーダン及び歐洲の殆んど凡べての國々に其の例が示されたのである。此の經營法は古くバビロンの寺院記録、古代エジプトに已に其の存在を證し得るのであつて、ホーマー時代より古代、中世の全時代を経て、近世に至る迄、文獻中に追及し得るものである。ギリシャ、ローマの法源に表はれてゐる顧客と獨立せる（人格的には自由なるにせよ、隸屬的なるにせよ）手工業者との關係に就きての全解釋は、この賃仕事に根柢してゐるのであり、中世の同業組合法の數多の規定もたゞこれに據つてのみ説明され得るのである。

1) auf die Stör gehen 2) Stör 3) Störer 4) Heimwerk

〔七〕三〇一年のダイオクレシアン帝の詔勅、de pretiis rerum venalium には、それが最も主な經營形式となつてゐる。Zschr. f. d. Ges. Staatswissenschaft, 第五〇卷（一八九四年）に掲げたる拙稿、殊に六七三頁以下を参照。

今日に於ても尙ほアルプス地方にては、それが田舎において最も勢力ある經營方法となつてゐる。シュタイエルマルクの作家 P. K. ローゼッゲル¹⁾は其の興趣豊かな書中に、彼が農場の間を廻り歩く仕立屋の弟子としての體驗を敘べてゐるのであるが、彼は其の序文中に次の様なことを云つてゐる。「靴匠、仕立師、機織工、桶匠(他の地方にては又、鞍工、車匠、經師屋、總じて凡べての建築手工業者)としての農民手工業者は、アルプスの多くの地方に於ては一種の遊牧民である。彼等には或る一定の住居があることはある。即ち或は自分の小屋に、或はある百姓家の間を借り受けて、其處には其の家族が住み、其の家産を藏し、日曜、祭日を此處に送つては居れど、月曜の朝となれば、彼等は道具を肩にし若しくはそれを衣囊に入れて出職へと赴く。即ち仕事へと出掛けるのであつて、依頼を受けたる百姓家に一定の仕事、つまりその家の需要が終るまで寄宿するのであつて、仕事終りて初めて他の百姓家へと赴くのである。この職人はその出職を爲す家にありて、家族のものと同様に考へられて居り、何れの百姓家にも「職人寢床」を備へた特殊の部屋があつて、彼等出職人の夜を過ごすの用にあてゝゐる。かくて一週間の仕事を終れば、日曜日には其の家の主人の饗應を受けるのである」。

〔八〕『わが職人生活より』(Aus meinem Handwerkerleben) 一八八〇年、ライプチヒ版。——尙ほハンスヤコブ著『雪球』(Hansjakob, Schneeballen) 〔通俗版〕一二頁以下、二一九、二二四頁、『野櫻』(Wilde Kirschen) 三四七頁を参照せよ。

スウェーデンとノルウェーの大部分との田舎に於ける工業状態は、殆ど夫れと等しい表現を以て敘述される。ロシア及び南スラヴ諸國に於ては數十萬の賃仕事人ありて、殊に建築及び被服の工業に従事し、常に通歴の生活を送る。その

1) P. K. Rosegger

餘りに遠隔の土地に赴くに方りては、半歳乃至それ以上遙かに郷關を去つて旅に放浪するを珍らしとしない。支那に於ける状態は一種獨得であつて、此處では賃仕事人の多くは修繕工なのである。

〔八イ〕 ツール著前掲書、四一頁以降。

進化史上より論ずれば、賃仕事の此の二様の形式は夫々相異なる起源を有するものにして、即ち出職は特殊なる勞働熟練の獨占てふ上に成り、居職は固定生産手段の獨占てふ上に根據を有するものである。而して此の基礎の上に、先づ第一に、家内仕事と賃仕事との間に各種の雜種形式を發生せしむるに至るのである。

出職人は其の初めは經驗ある隣人にして、或る重要な仕事をなすに方りその指圖人及び相談役として其の家より手傳を依頼された人であつた。其の時にありては仕事その物は尙ほ、その一家の家族の者の手によつて營まれてゐたのである。顧客の家族員が親方及びその職人に必要な手傳をなすといふ習慣は永く後世にまで存続してゐたのである。而して今日尙ほ田舎にありて、例へば家を建てる場合に、其の遺風に接することが出来るのである。

〔九〕 フアロエール群島に於て家を建てる時にも矢張其の通りである、Zschr. d. Ver. f. Volkskunde 第三卷(一八九三年)、一六三頁。カロリン群島にては Takelbay 即ち大工なるもの、役は、新築に仇をなす惡魔を逐ひ拂ふ厄拂ひの役を勤めるに過ぎずと云ひ得るのである。クバリー著『人種學論考』(Kuhary, Ethnogr. Beitrage) 二七頁以下。然れどもアルメニアに於て車を作るに當つては、それと様子を異にし、その顧客の家族の者等が先づ車の各小部分を作り上げ、而して後に、經驗ある隣人に贈物をなし、其の指圖を乞うてその車の組み立てをなすのである。メラヤンツ著前掲書、二七頁。尙ほゴギチャイシウイリー著前掲書、六一頁以下参照。

居職に就きて考ふるに、後世の工業經營者はその始めは單に經營設備の所有者であり、生産の技術上の指圖人たるに過ぎずして、本來の仕事は顧客自らが之を行ふこととなつてゐた。今日に於ても田舎に赴かば、その油搾場、亞麻磨場、

大麥及び燕麥の搗上げ場、果實酒醸造設備等に於て屢々之に接するのである。北ドイツの多數の都市に於ては、中世には麥芽製造人及び醸造者は唯だ麥芽乾燥場及び醸造場の所有者たるに過ぎざりしものにして、報酬を得て市民にそれ等を貸與し、市民は自ら自己所有の大麥にて麥芽を作り、麥酒を醸したのであつた。粉磨場に於ては顧客は少くも船頭を頼んで、これに粉を篩はせてゐたのである。今日に於ても尙ほ多數の地方にては、豫め捏粉を捏ねてこれを自分の家で麵麩の形に作り上げるのは百姓の主婦の仕事であり、麵麩焼人の役目といはゞ、唯だ麵麩焼竈を處理し、これを暖め、麵麩の焼け上りの番をなすのみであると云ふ如き風習が遺存してゐる。フランス又は西部スキエスの都市に於ける公設洗濯所の状況はこれに類するものであつて、即ち顧客に洗濯の器具を貸與し、湯を給し、時によりては物干場をも提供するが、洗濯は顧客の家僕若くは女子家族員の手に行はれることとなつてゐる。斯くして洗ひ乾したる洗濯物は、其の後にてその家僕又は女子家族員の手によりて壓搾所へ運ばれ、其處にて滑澤を付せらるゝが、此の際に此の壓搾器所有者の仕事と云へば、それは唯だ其の機械の把手を廻はす手傳を爲すのみである。而して其の支拂は使用時間の長短に應じて行はれるのである。ボーゼン及び西プロイセンに於ては近頃に至るまでも尙、鍛冶場の所有者は單に火と道具併びに鐵を供給するのみであつて、仕事その物は顧客自身に任ずる習慣が残つてゐた。

〔一〇〕 Tägliche Rundschau 誌一八九七年第二五八號の娛樂附録に掲載しある『東都國境地方に於ける一僧侶の見聞録』。此處にて興味ある事は經營者が鐵を供給するてふ其の事にして、其の爲め此の經營方法は手工業に移り行かんとしてゐる。又、出職と居職との雜種ありて、これに屬するはかのロシアの旅仕立屋である。彼は顧客あらば如何なる寒村僻地にありても家を借り其れに居住して賃仕事をする。それに似たるは(メラヤンツに據れば)アルメニアの鋸職であるといふ。又、アルメニアに於ては油搾場の所有者はその器械の運轉に必要な勞働者及び水牛を顧客の乞に應じて世話してやる經營の組織を有し居れども、顧客は會にそれ等と協同して働くのみならず、その勞働者に給料を支拂ひ、或は食料を給し、牛には糞を與へなくてはならぬの

今これを國民經濟的に觀察し來らんか、賃仕事の特徴は實にそれが經營資本なるものを知らざることに存する。原料も、精製したる工業生産物も、その生産者に對して何時も營利の手段とはならないのである。生産の種類と範圍とを決定する人は、尙ほ依然として原料を生産する土地所有者であつて、彼は生産の全過程をも指導してゐるのである。農夫は己が畑より裸麥を得、これを打禾し精白して、磨者に渡し、實物賃銀 (Molter) を與へて磨粉せしむ。斯くて生じたる穀粉は麵麩焼人これを得て、麵麩焼賃と燃料の補給とを受け若干の麵麩塊を作り出すのである。かるが故に、種を播く時より麵麩として之を享樂する瞬間に至るまで、生産物は決して資本ではなくして、唯だく享樂に供し得らるゝまでの道程にある使用財たるに過ぎない。完成せる製造品には企業利潤及び利息割増又は交換利潤が結び付いてはゐないのであつて、附きゐるものは唯だ勞銀のみである。

上述の事は實に單純なる文化狀態の下にありて需要の尙ほ未だ大いに起らざりし時代に當りては、家内仕事と等しく、生産物の質の善良と、需要供給の合致とを確證する眞に經濟的なる生産方法なりと許し得べきものである。斯かる生産方法は交換を回避する。蓋し交換にして行はれんか、それは甚しき迂路を経てのみ、原料生産者にその手に成れる生産物より作らるゝ製造品を供給すると云ふ事になるであらうからである。然りと雖も斯種の生産方法に伴ふ不都合なきに非ず。即ちそれは消費者にも工業的生産に伴ふ危険を課するものである。それによりては豫定し得べき需要に對しては適當にして適時なる供給を爲し得るとするも、突然生じたる需要の充され得ざる場合が屢々あることである。蓋し賃仕事人は其の場合他に仕事を要求されてゐるからである。若しそれ居職に至りては、加ふるに原料一部の窃取と偽騙とを蒙るの危険を伴ふものがある。酷つて賃仕事人に取つても、此の經營組織は多數の不利益を伴ふものである。即ち仕事の不

規則なりてふことは其の第一であつて、其の結果、或る時は勞力を餘計に使ひ過ぎ、或る時は全く手を空しうしてゐるといふ不都合を生じ來るのである。出職に至りては、加ふるに遍歴の爲めに生ずる時間の損失と道中の困難とを以てするるのである。

斯くの如くなるが故に、賃仕事の二形式は今日の經濟にありては、何等爲すなくして徒らに過ぎしてゐる時間を農業的副業に利用し得る如き場合に於てのみ、十分その存在を維持するものである。印度に於ては最近に至る迄、その形式が國民的工業を支配してゐた。即ち『職人は道具以外何の資本をも所有し居ざるを通例とし、註文に應じてのみ業を營む。村落工業に見るが如く、彼等の孤立して住みゐる場合には、顧客は彼等を尋ねて金、銀、象牙、木材を托する。又顧客の家に連れ來りて日給を支拂ひて働かしめることも珍らしとしない。都市に於ては、その職人の多數は商人の爲めに仕事を營みつゝあり、商人は或は彼等に材料の前渡をなし或は前貸金をなして、彼等を隷屬させてゐる。職人は多くの場合に仕事をする爲めの道具以外には何物をも所有してゐない。彼等の勞働に成る生産物は彼等自身の所有に屬せざるが故に、それを購はんと欲する人は近くの商人の許に赴かなくてはならぬのである。』

〔一〕メタン著『社會的記録博物館』(A. Méhin, Musée social. Mem. et Docum.) 一九〇二年版、四二七頁。

此の賃仕事が中世に於て手工業者を隷屬關係及び宮廷法より解放せしめることを限りなく容易ならしめた。蓋し獨立的工業經營の初期に方つては、賃仕事は特に數へ立てねばならぬ程の巨額の自己財産を必要としないからである。故に中世の同業組合的手工業者階級を小資本家の階級と見做さんとするは大なる誤謬なりと云はなくてはならぬ。それは寧ろ實際上は工業勞働者階級と稱すべきであつて、然もこの工業勞働者階級たるその各人は多數消費者の爲めに勞働するものにして、決して單なる二三企業家の爲めに働かざるものに非ずてふ點に於て今日の勞働者と峻別さるべきものである。

かの註文主が原料の供給をなすてふことは、殆ど中世の凡べの手工業に於て行はれるのみか、實に註文主が原料を最早自己經濟内にて産出し得ざるに至り、それを他より購入せざるべからざる状態に及びても、尙ほ且つ幾世紀の長き、なほ多數の手工業の間に存続したりしことは、靴屋に對して革を、仕立屋に對して布を供給した如くであつたのである。職人の親方の手にて材料を調達することが、極めて徐々ではあるが何時の間にか行はれ初めて、その初めは唯だ貧しき顧客の爲めに行はれしもの、後には富裕なる顧客の爲めにも行はるゝことゝなつた。此處に於てか、今日普通に云はれてゐる如き意味の手工業が生れ出づるに至るのである。さりながら賃仕事もそれと相併んで行はれてゐたのであつて、手工業の補助をなしてゐたことが屢々であつた。即ち鞣皮匠は靴屋や鞍工の賃仕事人となり、磨者は麵麩焼人の賃仕事人となり、羊毛打工、染色工、晒布者は製絨者の賃仕事人となるの有様であつた。

〔11〕 ロガース著『仕事及び貨銀の六世紀』(Therold Rogers, Six centuries of work and wages) 一八九一年、ロンドン版、一四四、一七九、三三八頁は米國に於けるそれと同様のことを敘べてゐる。尙ほオッペンハイム譯、アッシュレー著『英國經濟史』(Ashley, Engl. Wirtschaftsgeschichte) 第二卷、一〇三頁参照。——本文に述べたる余の解釋に對する反對論を、マロウ(G. v. Below) は Ztschr. f. Sozial- und Wirtschaftsgeschichte 第五卷、一二四—一六四頁及び二二五—二四七頁のべてあるけれども、これは第三版、四五〇頁以下に論じて置いた様な主眼の點に於て余の所論を論駁しては居ない。尙ほマロウの反對論は Hist. Ztschr. 五四卷、一〇二頁以下に出てゐる。

扱て賃仕事の二形式の中、都市に於て先づ没落したものは出職にして、此の没落を促進せしめたるものは實に同業組合の干渉である。抑々出職なるものは餘りに古き隷屬關係を想起せしむるものがあつて、その營業者は謂はゞ特種なる日傭人たるに過ぎずして、然かも一時とは云へ、兎に角他人の家憲に従はなくてはならないのである。かるが故に十四世紀以降、親方の他の家に就きて仕事を爲すことを禁ずる多數の禁令が同業組合規則中に表はれてゐる。これと同一の

原因よりして都市手工業者の田舎手工業者に對する憎惡の感情が生ずるに至るのであるが、蓋し田舎工業者にありては之に全然出職を禁止せしめるを得なかつたからである。斯くて遂には「出職人」又は「潜り職人」なる名が同業組合の營業權を有せずして仕事を爲す人間に對する一般の罵言となつた。北ドイツの都市にては、同業組合の親方はその顧客の家に居る出職人を探ね出して、其の辨明を求むる(所謂「潜り職人狩り」をなす)權利を請求してゐたのであつて、公權は多くの場合極めて薄弱であつた爲めに、彼等組合親方が此の市民の家安を毀損するの行爲を見て見ぬふりをしてゐなければならなかつたのである。

〔13〕 此處に、組合工業權に限界を附することによつて、古き家内仕事も同様の苦痛を嘗めることゝなつたことを指摘せねばならぬ。多數組合規定中には、組合以外の者も手工業的生産物を製作し得てふ規定あれど、それは自家消費物にのみ限られて、賣買の爲めには許されてゐなかつた。従つて一七七頁以下に記した家庭の餘剰生産を市場に搬出することは不可能となつた。
〔譯者註〕「潜り職人」(Knecht)とは親方の權利を有せず、又同業組合にも屬せずして内密に工業を營む職人を云ふのである。

さりながら一經營式を他の經營式によりて驅逐し去るといふことに於て、同業組合は到る處容易にその成功を收め得たりしかと云ふに然らず。已に十四世紀の中葉頃、オーストリア公國にては、その君主的高權は同業組合に激しく反對してゐる。また一四八二年のザクセン選帝侯國法にては、靴匠、仕立職、皮革匠、指物師、硝子細工人及び其の他の手工業者にして十分なる理由の存するなくて、顧客の家に就きて仕事を爲すを拒む場合には、當時の世態よりしては高價なる三グルデンの罰金を課せらるゝことゝなつてゐた。パーゼルにては、一五二六年に所謂「賞讃すべき古風」維持の爲めに、家庭仕立匠を保護する精細な規定が設けられ、又多數のドイツ領土に於ては、各種賃仕事人の爲めに徹に入り細を穿つた價格公定を樹てたのである。斯くの如くにして多數工業の中、特に建築手工業者の間に賃仕事が現今に至る

まで維持さるゝに至つたのである。

然れども多數から云へば、この賃仕事に代つて表はれて来たものは、今日手工業の名の下に解されて居り、而して已に此の章の頭首に其の特徴を示して置いたやうな經營式である、これとかの賃仕事との對立を一層明らかと言ひ表さんが爲め、これを又、代金仕事と呼んでもよいと思ふ。蓋し手工業者が賃仕事人より區別せられる點は、彼が全生産手段を所有し、自ら給せる原料とそれに加へたる労働とより作り出されたる生産物を、一定の價格を以て賣却すると云ふことだけに存し、之に反し賃仕事人は單に自己の労働に對する報償を得るにすぎぬからである。

〔一四〕 さればとて、賃仕事なる中間段階を経ずして、直接、家内仕事より出て来る手工業なしとは決して言ひ得ないのである。手工業の重要な特徴の一切は顧客生産¹⁾で一語に盡されてゐる。即ち此の經營式が後世現はれ来る一切の經營式と區別せらるゝ所以のものは實にその販賣方法にある。手工業者は常にその生産物の消費者の爲めに働くものであつて、それは消費者が各個々の品物を注文して手工業者にそれを作る氣を起させるのと、生産者消費者が週市又は歲市に相會して有無相通ずるとを問はぬのである。而して「無駄な時」を無からしめんとせば、その注文に基く労働と市場の需要の爲めの労働とを互に相補はさせる様にせねばならぬ。その販賣區域は通常局地的にして、即ち都市及びその近郷である。顧客は第一人者より購ひ、手工業者は最終者に供給するのである。この事はやがて需要への適合を確保し、全關係に道徳的特徴を附與せしむるに至る。即ち生産者は消費者に對して自己の仕事に就きての責任を感じるのである。

手工業の出現と共に、國民經濟的生產過程に謂はゞ一大溝渠が穿たれることとなつた。在來はよし他の賃銀労働者の助力に俟つことあるにせよ、土地所有者は此の全過程を指導して來たのであるが、今や此處に二種の經濟を生じ、其の各が生産過程の唯だ一部のみ實行することとなつた。即ち其の一は原料の生産に任じ、他の一は製造品の製出に當つ

1) Preiswerk 2) Kundenproduktion

てゐる。而して手工業には出来る事なら實現させようと思つた原則がある。それは即ち一貨財をしてその精製の全過程を一つの事業場内にて経過せしむべしとすることである。それによつて資本の要求は減少し、價格への頻度の利益割當が避けられる。斯くて自己の經營資本を獲得することによつて、手工業者階級は單に賃銀を得るに過ぎざりし労働者階級より有産的生產者階級となり、土地所有權の手より解放されて今や彼等の手に集めらるゝに至れる動産は獨自の社會的併に政治的權能の基礎となるのであり、此の權能が市民階級の中に具現されてゐるのである。

手工業者と己が生産物の消費者との直接關係は工業の小規模維持の條件となつてゐる。手工業的經營にして餘りに其の範圍を廣めんとする恐れある時は、其處に新しき手工業の分裂を見、これがその生産範圍の一部を引受けるに至る。これ即ち中世に於ける分業にして、依つて以て常に新しき獨立的存在を創成しつゝあつたのであり、其の極遂には労働範圍の限界に嫉妬心を惹起せしむるに至り、それが同業組合制度の精力の大部分をこの内部鬭争の爲めに消盡せしむるまでに至つたのである。

〔一五〕 尙ほ此の詳細に就きては、拙著『第十四五世紀に於けるフランクフルト・アム・マインの人口』(Die Bevölkerung von Frankfurt a. M. in XIV. und XV. Jahrhundert) 第一卷、二二八頁に於て置いた。又、本書第三講及び第八講をも参照。

手工業は都市獨得の現象である。従つてロシア人の如き本來の都市制を完成せざりし國民は、亦國民的手工業なるものを知らぬのである。然かも亦一方、一層大なる中央集權的國家制度と統一的交易範圍との完成と共に、手工業は遂に衰頽せざるを得ざるに至りしことも亦、此の點にその原因が存するのである。十七、八世紀に於て絶えざる人口増加の影響を蒙りて其處に新しき經營式が構成された。こは最早、一地方的の市場を其の根據とするものには非ずして、國民的併びに國際的市場に其の基礎を有してゐる。吾人の先輩はこれを呼ぶにマヌファクトール¹⁾とファブリーク²⁾といふ二

1) Manufaktur 2) Fabrik

重の名稱を以てしたのであるけれども、然かもその間何等の差別をも附して居なかつた。然れども精細に觀察し來れば、これ等は元來相異なる二個の經營式を意味するものであつて、即ち其の一は從來世人が一に家内工業¹⁾てふ誤解せる言葉もて呼び來りしものであるが、吾人はこれを改めて問屋制度²⁾と云はんと欲する所のものであり、其の二は吾人の所謂工場制工業³⁾之れである。然り而して此の二經營式の課題は工業生産物を廣き市場範圍に供給せんとするにあつて、その爲めには多數の労働者を要する。而してこの兩者の相異なる點は唯だ如何にこの課題を解き、如何に労働者を編成するかの方法にのみ存するのである。

中に就きて最も簡單に行動するものは問屋制度である。それは先づ最初には在來の生産方法には一指だも觸れず、たゞ其の販賣を組織することに局限するのである。問屋⁴⁾とは即ち商人的企業家にして、多數労働者を自己の經營場外に、彼等の自宅に於て規則的に使役するものである。此等労働者中には、或は以前手工業者たりしものもあるべし、しかも今や彼等は多數の消費者の爲めに生産するに非ずして、一人の商人の爲めに生産してゐる。或は曾て賃仕事人たりしものもあるべし、しかも今や彼等の加工する原料は最早消費者より受くるに非ずして、商人より得るのである。或は又農民家族もあるべし、しかも以前作れるその家内仕事の生産物は今やこれを市場商品として生産し、これは問屋の手によりて世界商業場裡に提供せらるゝに至るのである。

「問屋」(Verleger)なる語は Verlag (支出)、即ち Vorlage, Vorschuss (前拂)に由來せるものである。問屋は初期に於ては尙ほ可なり獨立的地位を有し居たる小生産者に、或はたゞ其の生産物の買價を前拂し、或は原料を供給して後に箇數貨銀を支拂つたのであるが、又或は其の上に主要なる道具(機械臺、刺繡臺など)を所有してゐたのであつた。然るにかの小生産者がたゞ一人の買取人をのみ有するに過ぎないと云ふことが彼等をして何時の間にか其の問屋に對する隷屬關係を深からしめ、遂には問屋は彼等の雇主となり、彼等は形式上は原料を自ら供給する時でさへ、労働者と化し終るに至つた。

この問屋制度及びその労働關係、即ち家内工業なるものに關して此處に其の詳細を説明するの要なきを思ふ。ドイツの山岳地方には十分に澤山の實例がある。シュワルツワルトに於ける麥稈眞田、時計及び刷子の製造、上部バイエルン地方の彫刻細工、マイニンゲン高地に於ける玩具製造、フォクトラントの縫箔、エールツ山嶽地方のレース編等、即ち其の適例である。斯種の工業の歴史併びに現状は近時幾度か討究された所であつて、余は此處に此等の方面にも、又この經營組織の示してゐる豊富なる形式にも立ち入つて論じては居られないのである。

抑々此の組織の精髓と稱すべきは、その工業生産物が消費に達する以前に商品資本となることである。換言すれば一人もしくは多數の商人的中間人の營利手段となるてふこと、即ち之れである。問屋がその生産物を世界市場に送致するにせよ、彼れが都市に於て販賣を經營するにせよ、彼れがその生産物を小賣の出來る状態になつたまゝ家内仕事人から受取るにせよ、これを最後の仕上げに廻すにせよ、労働者自ら親方なりと稱して弟子を抱へてゐるにせよ、又労働者が農業をも副業とせるにせよ、何れの場合にありても家内工業者は自己の生産したるものゝ賣捌かるゝ市場より遠ざかり、その販賣狀況の知識から遙かに遠ざけられてゐるのであつて、此の點にこそ、實に彼等の慰めなき弱點の主なる原因の横たはりつゝあるものなのである。

問屋制度にありては、資本は單に生産物の配給を支配するに止まつたのであるけれども、工場制工業となれば、それは生産の全過程を統御するに至るものである。問屋制度に於ては、其の前に横たはる生産課題を果さんが爲め、同種類の多數の労働力を緩く掻き集めて、夫々の労働力には殆んど同じであるその生産の方向を定めるのである。而して出來上れ

1) Hausindustrie 2) Verlagssystem 3) Fabrik 4) Verleger

る労働生産物を世間に送り出す前に、大なる貯水槽に流し込むやうに、其等の生産物を一所に集める。然るに工場制工業に於ては、之と異り、それは全生産過程を組織するのである。即ち各種相異なる労働者を相関的なる上向秩序及び下向秩序に編成して、これを統一ありよき規律ある一個の團體となし、其等を自己の経営場に結合し、機械的生産手段の極めて多くの分岐を示す大規模なる設備を此の経営場に装備し、以て著しく其の給付能力を増大せしめるものである。かるが故に、工場制工業と問屋制度との別は、統一的に武装せる規律ある戦闘軍隊と、雑然集合せる百姓一揆との差に等しと云ひ得るであらう。

かるが故に、生産的設備として工場制工業に強みありてふ事の秘密は、實に目的なる労働使用に存すと云はざるを得ない。此の目的的なる労働の使用てふことを所期せんが爲め、工場制工業は一個獨得の道程を取るものであり、それは一見迂路の觀がある。即ちそれは生産過程に必要な全労働を出來得る丈極めて簡單なる要素に分解し、困難なる労働を容易なるものより分離し、機械的の仕事に精神的のと分割し、精練労働を無精練労働より離脱せしめる。斯くて初めて繼承的に遂行する組織に到達し、各種の人力、即ち習練労働者と無習練労働者、男子と婦人と小兒、肉體的労働者と精神的労働者、技術上に習熟せる人と藝術的に習練せる人と商業的に教育ある人とを併立的併びに後續的に使用し得るに至るのである。斯くの如く各労働者を労働過程の一小部分に局限することは總生産物の驚くべき増大を來さしめるものであつて、百人の工場労働者の生産する額は、同一の生産手續に於ては百人の獨立せる手工業の親方が營むに比して優るものがある。假令手工業の親方銘々が全生産過程を自由になし得、工場労働者の銘々は唯だその一小部分を扱ひ得るにしても然りである。斯くの如くなるが故に、手工業と工場制工業との争を工業の範圍にのみ局限して之を觀察すれば、それは弱者なりと雖、之を指導するに優秀なる頭腦を以てするならば、能く強者をも凌ぐものなりてふ事の有力なる一證

左たり得るものなのである。

機械は工場制工業に於ける本質的のものなりとは云ひ得ざるも、上述の労働分割が労働給付を單純なる運動に分解したが爲めに、その結果として機械の使用を無限に促進し、複雑化せしむるに至つたのである。然り、古來機械を工業に使用し來れることなきに非ず。作業機械及び動力機械、即ち之れである。然しながら、不斷に一樣に活動して何處にも應用し得る原動力なる蒸氣を捉へ込むことに成功した時に、工場制工業にとつて機械の使用は初めて今日の如く、かくも重要な意義に到達するに至つたのである。然し此處に於ても、此の工場制工業の獨特の労働組織と結合した時にだけ、然りであり得たのである。

次の一例は余の所論を明らかにし得よう。一七八七年にはスイスのチューリヒ州には木綿撚絲の製出に従事する手工績男女の數三萬四千を算したのであるが、英國式の紡績機械輸入されてよりは少數の工場に於て、以前と同量、否それよりも多量の撚絲を生産することゝなつた。然かも其れに要する労働者(その大部分は婦人及び小兒であるが)の數は以前の三分の一にも達しなかつた。抑々この現象は如何にして起つたのであらうか? 機械によつてであらうか? されどかの紡車も同じく機械ではなかつたであらうか? 然り機械であつた。然かも極めて精巧なる機械であつた。かるが故に此の現象は機械が機械より驅逐されたるものなりといふべきである。否寧ろ從來一人の手工績婦が紡車を使用して營んで居た仕事、此處に至つて一列の各種労働者と種々異なる機械との繼起的労働によつて行はれるに至つたのである。かくて紡績の全過程は最も簡單なる要素に分解せられ、此處に全然新しき操作を生じ、その遂行には一部分は未熟なる労働力をも使用するを得せしむるに至つたのである。

此の労働分割よりしてそれ以外の工場制工業の特性が生ずる。大經營の必須性、著しき資本の要求及び労働者の經濟

的隷屬、即ち之である。

此の後二者の點と關聯して、工場制度と問屋制度との間に横たはる重要な差異が容易に吾人の眼前に顯示される。即ち大なる固定資本は工場制工業をして恒久的經營たるを確保せしむるものである。而して問屋は需要減少の場合には、資本損失を危惧せざらんが爲め、己が家内工業者を解雇することが出来る。然るに工場主にありては、斯かる場合に際會するも、尙ほその生産を繼續せねばならぬのである。これ蓋し利息損失と固定資本の價值減少とを懼れ、又己が使用してゐる習練労働者を失ふことを憎むが故である。故に需要の改變速かにして商品の種類極めて多様な工業部門に於ては、問屋制度なるものは恐らくなほ永く工場制工業と相並んでその存立を主張し得るであらう。

終りに臨んで今此の五個の工業經營式の特徴を數語を以て表さんとせば、次の如くに云ひ得るであらう。——即ち家内仕事は工業的自己生産であり、賃仕事は顧客労働であり、手工業は顧客生産であり、問屋制度は地方分權的商品生産であり、工場制工業は中央集權的商品生産である、と。而して世には孤立して存立する國民經濟現象なるもの一つも之れなきが如くに、此等の工業的經營式の何れもが亦、大なる經濟制度及び社會制度の一截斷面たるにすぎぬのである。即ち家内仕事は自主的家内經濟の材料變形であり、賃仕事は閉鎖的家内經濟より都市經濟への過渡の時代に屬し、手工業の全盛は完成せる都市經濟の時代に當り、問屋制度は都市經濟より國民經濟(閉鎖的國家經濟)へ跨るものであり、工場制工業は完成せる國民經濟の經營式なのである。

然り而してその各工業經營式が有機的に其の各時代の生産制度に編み込まれるる有様を敘し、原始生産、人的勤務、商業及び運搬の範圍に於て、夫れと類せる多數の現象と交互的に制約しつゝある状態を此處に検討するとせば、それは餘りに行き過ぎとなるであらう。注意深き具眼の士は其等最も重要な段階を以て敘べたる進化の一切の萌芽が社會の原始

細胞たる家族の中に、經濟的に云へば閉鎖的なる家の生産制度の中に横たはるものなることを見通がし得ないであらう。其處では一切の個人的存在が消滅し去つて人生を豊富ならしめる此の最古の協同體より、微分積分と分れ行きて部分部分が絶えず分離し、いよいよ獨立して來たのである。斯くて賃仕事は閉鎖的家内經濟でふ木の荷枝に過ぎず。手工業はそれが繁茂し行く爲には、尙ほ家内經濟の保護を必要とし、かの問屋制度に至りては生産物の配給は之を獨得の企業と爲し居れども、生産は殆んど最初の發展段階に停頓してゐる。然るに之れに反して工場制工業は生産の全過程を企業主義もて透徹せしめてゐる。即ちそれはあらゆる消費的要素より解放されたる獨立的經濟であつて、關係者の家計よりは物的にも場所的にも分離してゐるものである。

而して労働者の地位も亦、それと相似たる變化をする。賃仕事の生ずるや、工業労働者は土地所有權者の閉鎖的家内經濟より人格的に離脱するが、手工業に移り行くや、經營手段の抽出によつて、物的にも亦自由に且つ獨立的になるのである。然るに再轉して問屋制度により、彼は人格的に新らしき隷屬關係に、即ち資本を所有する企業家の保護の下に立つこととなる。而して遂に工場制度となるや、彼は物的にも亦その企業家に隷屬するに至るのである。かくて労働者は發展の四段階を通過して、莊園への隷屬を出でて工場への隷屬に到達したのである。

此の發展の中には一種の平行論がある。古代の地主に對する不自由なる家内仕事人の地位は近世企業家に對する工場労働者のそれと或る類似を有して居り、土地所有權者の需給經濟に對する賃仕事人は問屋の商業經營に對する家内工業者と酷似せる關係を有してゐる。而して此の昇騰する序列と下降する序列との中間に立つて、その基石たり隅石たるものは實に手工業である。家内仕事より手工業に至る迄は、労働者の土地よりの漸次的解放と資本形成とを示せども、手工業より工場制工業に至る迄は、資本の労働よりの漸次的離脱と労働者の資本への服従とを現はすものである。

家内仕事の段階に於ては未だ資本なるものゝ存するなく、在るものは享樂に供せらるゝまでの程度に種々の段階の差こそあれ、何れも使用財のみである。一切のものは家に屬してゐる。原料も道具も製造品も、否、労働者までもがさうであることが珍らしくない。賃仕事にては、道具のみが労働者の手にある資本であり、然かも原料及び補助材料は尙ほ享樂適状に達せざる一家の貯藏物であり、經營場は或は完成せる生産物を消費せんとする家に屬するか(出職)、或は之を作り出す労働者の有となつてゐる(居職)。手工業に於ては、器具、經營場及び原料は労働者の所有にかゝる資本となり、労働者は實に生産物の主人公となる。されど其の生産物は常に直接消費者にのみ販賣されてゐるのである。問屋制度となれば、生産物も亦資本となれども、それは最早労働者に屬するものには非ずして、全然新たに地平線上に出現せる人間、即ち商人的企業家のものとなり、労働者は或は全生産手段を手許に保持したり、或は先づ材料資本を失ひ、次いで工具資本をも喪失するに至るのである。かくて結局は一切の資本成分が其の基礎の上に工業生産の新編成を行へる工場企業家の掌裡に蒐められ終るのである。而して此の工業企業家の手中に於ては、生産物に於ける労働者の分前すら、尙ほ且つ經營資本の一部となり了らざるを得ぬのである。

而して労働者の分前は如何。家内仕事の段階にありては、製出せる生産物の享樂を共にするてふことに成り立ち、賃仕事に於ては、賄ひ併びに時間賃銀又は簡數賃銀によつて之を得てゐたのであるが、此等賃銀には已に工具使用の報酬も含まれてゐる。然るに手工業にては、全生産収益に成立してゐるのである。問屋制度にありては、問屋は生産収益の一部を自己の經營資本の利潤として先取するに至るのである。而して工場制度に於ては、資本化し得べき一切の生産要素は資本利潤の結晶中心點となり、労働者の手に留るものは、僅に契約による労働賃銀のみとなる。

抑々工業上の經營式の史的發展を考へて、その新たに生じ來る經營形式のどれもが、それに先立てる古き形式を驅逐

し、全然贅物たらしむるものなりと云ふ様に見るべきでない。それは例へば新らしき交通手段の生じたりとて、其處に古きものが驅逐せらるゝものに非ざると同一である。鐵道は自由道路に於ける車輛を廢せしめず、舟、駄獸及び人の背による運搬を棄てしめしなかつたのであつて、此等の古き運搬方法の何れをも、その各自が眞に其の本來の面目を最も多く發揮し得る如き地位を取らしめたに過ぎぬのである。同時に國民經濟に必要な運搬の分量も、甚しく増加して行つたが爲め、思ふに今日わが文明諸國家にありては單に絶對數に於てのみならず、相對數に於ても亦、運搬勤務に従事してゐる人馬の數は一八三〇年に於けるそれに優つてゐるであらう。

斯かる交通の驚くべき増高を喚び起すに至れると全く同一の原因が工業上にも働いて、機械的生產手段は絶えず完全に赴きつゝあるにも拘らず、凡ての國々に於て工業に益々増大する人員を要求するに至るのである。而して更に製造品の無際限なる輸出可能性を他に考ふるも、工業の生産範圍は常に新しい増加を示すのであつて、然かもその起因は實に次の二つの側面より生じて來る。即ち、

- (一) 古き家内經濟並に原始生産よりであつて、其等の各部分が、なほ絶えず分離しては、獨立の工業部門となりつゝあることにより、
- (二) 我々の欲望を満足せしめる役に立つ貨財が益々完全に赴き、いよ／＼その數を増し、漸く複雑に赴くことによりて。

擬て此の第一の點に關しては、最近世代に於て、以前は家婦又は奴僕の爲すを常としてゐた労働を遂行する爲めに、幾ダースかの新しき工業的職業種類が生じたのである。野菜の罐詰、果實の罐詰、菓子麵粉、肉製品の製造、婦人小兒の衣裳の仕上げと改良、窓・寢臺彈條・窓帷の掃除、化學洗濯所、床の彩色蠟引、瓦斯水道の引込み等、即ち之である。

最近のドイツ帝國職業統計は「美術園藝及び商業園藝」の部に八十九、「動物飼育」の部に二十七の職業種類を數へ居れるが、これ等の中の多數は最近に生じたものである。

第一の點に就きては、たゞ僅かに自轉車工業を考へて見ただけでも十分であると思ふ。即ち最近に於て舊に該工場多數を生ぜしめたるのみならず、已に特殊の修繕營業及び護謄輪、回轉計、自轉車の車輻等を作る専門事業場をも發生せしめてゐる。而してそれにも増して著しき例證を與ふるものは、かの電氣工業である。一八九五年の職業及び營業調査に於ては、一八八二年には尙ほ未だ存せざりし此の部に屬する二十二の職業名が掲出されてゐる。一九〇七年ドイツ帝國にては、電氣機械、電氣裝置及び電氣設備の製作のみに十萬三千六百九十四人の從屬員及び僕婢を抱へたる八萬九千七百八十一人の有業者が業に従つて居り、従つて合計約二十萬を養つてゐたのである。金屬加工、機械工業、化學工業、製紙業、被服及び洗濯業にありては、其の職業名稱の數は一八八二年より一八九五年に至る間に倍以上になつてゐる。而して尙ほ附け加へて考ふべきは、分職てふことが驚くべき進歩をなしてゐるといふのみに止まらずして、從來はそれを使用する經營の手中にて調へられてゐた生産及び商業の補助手段も亦、屢々獨自の企業によつて作り出されるといふ其の事である。工業は此の範圍に於ては舊にその需要に應ずるといふのみに止つてゐないで、屢々需要に先立つてゐたと云ふことは常に認め得る所である。特許表の中には、貨財界のいよ／＼完全ならんとする努力が意味深長に表はれてゐる。假令新しき發明の多數のものが生き存らへざるにせよ、尙ほ且つ多數の殘餘が残るのであつて、これが永く吾人の生活を豊富ならしめてゐるのである。

〔一六〕一九〇〇年八月各新聞に掲げられたる報告に基きて、ブユルナー博士(Dr. R. Bührer)は當時ドイツに於ける電氣工業の生産會社の資本金は優に八億マルクに達し、電氣鐵道、電氣工場建設を目的としてゐる所謂金融會社の基本金は四億五千萬

マルクの額に上り、電氣鐵道、電氣工場、鐵道信號所は優に十二億五千萬マルクの放資證券を有しあるが故に、ドイツに於ける電氣工業は約二十五億萬マルクの資本金を代表してゐるものなりと云つてゐる。然し此の際注意すべきは、かの金融會社の資本金はその一部を電氣鐵道、電氣工場の放資證券となしてゐるといふ事柄である。——それに似た例は自動車工業の示す所にして、ブユルナー博士によれば一九〇五年ドイツに於て十萬人、フランスにて三十萬人が直接間接にこれに従事しつゝありとのことである。

年々ドイツにて製出せらるゝ工業生産物の總量を、工場制工業にては幾何、家内工業にては幾何、而して更らに手工業、賃仕事、家内仕事によつてはどれ程が生産されてゐるかてふ如く統計的に總括し得たりとせば、工場製作品の大部分は他の經營式よりしては到底生産され得なかつた貨財を包括してゐることゝ、手工業は絶對的に今日に於て以前に比し一層多量の生産を齎らしつゝあるものなることを發見するであらう事に何の疑も存しないのである。固より問屋制度及び工場制度は二三小型の手工業を全然併呑し、多數の他の手工業よりして自己の生産範圍に屬する部分を蠶食したことなきに非ず。然れども十八世紀の末葉に生じたる凡べての大なる同業組合手工業は——多分唯一の例外たる機械業を除きて——今日も尙ほ依然その存在を持續しつゝあるのである。經營式のいよ／＼完全に赴くに伴れて、手工業が益益排斥されて行くといふことは、中世に於て家内仕事や賃仕事が生産の爲めに驅逐されたる有様と相似たるものがあるが、それは自由競争の基底に立つて、中世に於けりし夫れの如く然かく激烈に行はれてゐるものに非ざるを知り得るのである。さりながら此の萬人對萬人の競争は完備せる運搬制度及び交通制度と相俟つて、顧客生産より商品生産への變遷を強要することが珍らしくなく、技術上より云へば顧客生産のなほ永く存続し得る如き場合に於ても亦、然りなのである。斯くて多數の獨立せる親方が問屋又は工場の擁護の下に入る事は、彼等の先蹤者が一千年以前に莊園の擁護を受けられたこと、何等異なる所がないのである。

斯くの如くにして、手工業は經濟上に將た社會上に第二的地位に貶下さるゝに至つたのである。されど翻つて考ふるに、それは假令最早大都會に於て其の繁榮を見得ざるべしとなすも、田舎に於てはその反對に益々展開を見たのであつて、其處に農業と結合せる多數の經營を喚び起すに至つたのであり、此處に世の仁人が以て緩かに心を安んずるを得る點があると思ふ。手工業は、賃仕事や家内仕事が消え失せざりしと同じく、確かに滅び失せては仕舞はないであらう。斯くして手工業が彼の一般的封建化の時代に際して社會に寄與したものの、地權より獨立して其の生存の基礎を人的技能と僅少の動産とに有してゐた人々の反抗力ある階級、公民的訓練と榮譽との郷國は、なほ長へに保持され行くべきであらうし、又行かざるべからざるものである。尤も此等の徳行を支持して行くべき人は、多分、以前とは異なる基礎の上にその生存を維持して行くであらうけれども。

數年前世に珍らしき緊急の態度を以て、古き工業經營式を廢棄すべしとの叫が盛んに起つた。手工業や家内工業や其他凡ての小經營形式は國民的「生産力」を癱痺せしむるものである。「社會の進化を阻害するもの」とまでは云はずとも、しかも落伍せる敗殘の生粗なる生産方法」であつて、これを營みつゝある人々の最も獨自の利益より云ひ、又事實上の國民的生産が技術上可能なる生産に遙かに及ばずにあることを許すべからずとなすならば、「大仕掛なる人間行爲の理性的合目的組織及び規定」を以て、之に代らしめざるべからずといふのであつた。

斯くの如き短見なる經濟政策的研究^{シュワットマン} 室論^{シュワットマン} 理は決して今更ら新しきものには非ず。或る時代には馬鈴薯や甘藷を手づから栽培しむるたる農民靴匠を目して一種の富國の賊なりとなし、彼等をしてよし餓死の危險を嘗めしむるものありとも、警察力を以て彼等が本來の農業にのみ止まるを強制せんことを極めて熱心に希望した時代があつた。蓋し事柄の真相を了解せんよりは、これを非難し去ることの、何時の時代に於ても容易なるものあるが爲めであらう。

今斯かる否認妄斷の見を捨て、それに代ふるに、かの一見生殘せる如き舊き生産方法の生存條件に就いての囚はれざる研究を以てせんと欲せば、其等が今日尙ほその生存を續けつゝあるその所に、多くの場合に於て經濟的併びに社會的に存在の權利を有するものなりとの確信を掴むことであらう。而して進んでは、現存の不都合を除去すべき方法は、正にかの工業形式の根柢を据ゑつゝある地盤の上に求むべきものにして、敢てかのアイゼンバルト博士の説けるが如き治療法を試むるの要なきことを知り得べく、更らに此等經營式の何れもが夫々に疑も無く有してゐる長所は、力めて之を維持し行き、其の短所のみを棄て去るに努力すべきものであらう。

(譯者註) アイゼンバルト博士 (Johann Andreas Eisenbart. 一六六一年—一七二七年)、バムベルクに於ける巡業醫であり眼科醫で當時外科手術の名手として有名で、流行歌「俺はアイゼンバルト先生だ」の中で無智の香具師の典型として取扱はれてゐる。

蓋し一度人間の生活中に導き入れられたる文化要素は決して滅び去るものに非ずして、之が優越權を振ふの時が過ぎ去つた後も尙ほ慎ましき位置に立つて、われ人ともに信する大目的、人類をしていよく完全なる生存形式に向上せしめんと目的の實現に協力し續けるものであるといふ事が窮極に於て一切のヨリ眞面目な歴史觀察の慰めに滿ちた結果であるが故である。

五 手工業の没落

ドイツには今や二個の手工業者問題がある。その一は新聞紙及び議會の問題にして、一八四八年以來極めて活潑に繰り返し、世の公論に訴へつゝあるものである。その取扱ふ問題は即ち「手工業者階級の特権利益は、立法に於て如何なる範圍まで表現すべきであるか」てふことに存し、この問題の解答は政黨の勢力關係によつて決定せられるのである。

而して今一個の手工業者問題は工業經營形式として手工業に果して存在の能力ありや否やと云ふことである。即ちそはハムレットの獨白にある「存すべきか、存すべからざるか」の問題である。故に此の問題に對する解答は事實に基くものでなくてはならぬ。更らに詳しく云へば、「手工業は今日まで如何なる範圍まで生存の能力を有することを示したりしか？ 而してそは工業生産の如何なる領域を尙ほ支配しつゝありや？」てふ問題である。

抑々政策なるものが常に希望と情調とをのみ顧慮するに止まらずして、實際の事實をも考察せざるべからざる以上、第二の問題に答ふる無くして、よく第一の問題に決定を與へんと敢てし得ないであらう。然るに最近までは其の爲めに缺くべからざる事實の確定が缺けてゐた。然るに今や社會政策學會は最も包括的な方法を以て手工業の古い状態に屬してゐる工業部門の状態を調査させたのであるが、此處にその收穫せる材料を一般的概観に示すべき秋に到達したのである。然れども其の際に各個々の工業部門の現状と、その將來の展望とにまで立ち入らんとするは、余の目的に非ずして、余が説かんと欲するは寧ろ約百年來成し遂げ來れる發展の共通的特徴でなくてはならない。然かも此の際に、近世國民經濟に於て、或は破壊的に、或は建設的に活動しつゝある勢力の全強度と各種各様の活動方法を了知することが出来るやうになるであらう。

〔一〕 大工業に對抗し得る能力ありや否やてふことを特別に顧慮して、ドイツの手工業の状態に就き研究したものである。『社會政策學會叢書』(Schriften des Vereins für Sozialpolitik) 六二一七〇卷、一八九四—九七年ライプチヒ版。更らにオースト

リヤのに就きて別に一卷(第七一卷)がある。ドイツ帝國に就きての新巻が本書の著者の指導と助力との下に編輯せられ、更らに一八九五年夏に設置された帝國統計局にて編纂された手工業状態改善の事項が補はれた。三冊、一八九五—九六年ベルリン版。
 [1] 此の方面につきては、「シュモラー立法行政及び經濟年報」(Schmollers Jbh. für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft) 第二一卷(一八九七年)一〇三—一頁以下のグラントケ(H. Grandke)の研究結果に纏められてゐる。

百年以前にありては、手工業は中世より受け継ぎ來り、更に十六、十七世紀に於てそれに附加して贏ち得たる一切のものを他との何等の競争なく自由に支配しつゝあつた。固より其の當時、少數の家内工業及び工場工業の工場なきに非ざりしも、其等は手工業からは離れて發達してゐる、其等が生産するものは決して手工業品ではなかつた。従つて此の新興の經營形式と同業組合的手工業との間には競争の入り得べき餘地がなかつた。而して同業組合其物も亦、國家より掣肘干渉を受くる所がなかつたのである。唯だそれは各州立法の下に隸屬させられてゐたので、爲めにその局部的都市的性質を部分的には失つたわけであつた。否、同業組合は尙ほ一層の擴張を驗せしめられた。即ち營業者の數少かりし爲め、個々の都市では從來地方同業組合の設置を見ることが出來ずにもた手工業も亦、この州立法の制度の下に立たしめられたのによつてある。而して此の「小なる手工業」の爲めに設けられた州同業組合と、凡べての地方同業組合に對する工業法を統一且つ平等に規定せる『一般同業組合法』とによつて、近世國民經濟の要求は少くとも形式上その達成を見たのである。さりながら退いてその實際に見れば、局部的部門的販賣優先權といひ、都市強制といひ、追放權といひ、皆なほ其の勢力を維持しつゝありて、異なる都市の同一手工業の營業者間及び同一都市に於ける異なる手工業の營業者間の競争は到底問題となり得なかつたのであり、多數手工業は地方への移住を禁制せられ、親方の息子若しくはその養子に非ずんば、何れの職人も獨立の業を營むに甚しき困難に遭遇したのである。

抑々斯くの如き權利を手工業者の親方は何によりてか壟斷し得たのであらうか。

今日手工業に就いて述べ又は記してゐる多數の學者は、『手工業の全盛時代の』親方を、『その時代にしては素晴らしい資本を以て』經濟を營み、『自己の居室及び廣き仕事場』を所有し、粒選りの職人弟子と共に働いて、人格的に有能で尊敬すべき人と目された富裕な人として考へてゐる。かくて凡ての敘述者は、その説明の畫筆を染むるに、人が快適な心持を描き出すとする際に使はずにはゐられない濃艶な繪具を以てしてゐるのである。

されど抑々斯かる像を彼等は何處如何なる時より得來つたのであるか？ 余は十八世紀又は十七世紀にそれを發見せんと試みて、しかもそれは空しき徒勞に終つて仕舞つた。且つわがクラシックの詩人でさへ、同じくそれをさうとは思つてゐなかつたに違ひない事は、彼等が歌ふ『仕立屋、手袋屋の小父さん』¹⁾はいちけて見すばらしい姿であるといふ事でも知ることが出來よう。絶對多數の小都會にありては、手工業の親方は猫額大の農業と糊口の資となる醸造權によつて、纔にその活計を立て、行くことが出來る實狀にあり、比較的大きな都會にては、親方の多數が其の仕事場の傍に營んでゐる小い小賣店によつて、漸く渡世をなして行くことが出來る。ライプチヒの如き經濟上極めて優秀なる都會にありてすら、十七八世紀の多數の行政記録には、その地の手工業者階級が平均して富裕なる状態にありしてふ印象を示すものなく、又此の時代の末頃の同業組合制度に關する豊富なる文獻¹⁾と云ふべきユストウス・モエーゼルの「愛國的空想」は彼等が極めて狭められ壓し付けられた状態に存したことを諸所に指摘してゐるのである。

多數の制限ありて、親方たるの權利を得ることは阻止されし儘であつたとは云へ、然かも親方の數の超過するを防ぐことが出來なかつた。通常富裕な者の例として取られてゐる麵麩焼及び屠獸者の間にありても、輪番焼餅、輪番屠獸が殆んど通則となつてゐた。即ち親方の數多かりしが爲め、麵麩焼の夫々が日毎に新たに麵麩を焼くことを得ず、銘々の

1) Justus Möser, Patriotische Phantasien

屠獸者が毎週家畜一頭を屠殺することが出来たと云ふ有様であつたのである。一八一七年に至つても尙ほ、十人の麵麩焼親方を有する一つの町では、毎日三籠の麵麩が消費されるのみなるが故に、各親方には一週二回宛麵麩を焼く順番が廻つて来たといふ事が常態であると云ふ様に、一記述家はバイエルンから報告してゐる。屠獸者が規則的に屠殺し行き得たものは僅に小家畜にのみ限られて、北ドイツの都市にては、五乃至六人の親方の頭に一週一頭の牛が分けられ、甚しい上景氣と目されつゝありし程であつた。

同業組合的手工業の殆んど凡てがその定款中に、一人の親方にして抱へ置き得た職人及び弟子の最高数を規定してあつた。其れは通例二人に限られて居り、十八世紀に至りて其の制限を超越するものが無くはなかつたが、それは極めて稀有のことであつた。斯くて大多數の經營にあつては、常態では、この二人といふ數にすら達することが出来なかつた。従つて今假りに一人の親方が親方の権利を得てより死ぬるまでに三十年が経過したとし、そして二十八歳より三十歳までの間に獨立をなすものと假定すれば、其處に仕事を全く習得したものが凡て親方の権利を得べきものなりとしても、職人及び弟子の數は總計して、親方の精々半數が存し得たにすぎなかつたであらう。

然るに實際に就きて見るに、其の數の更らに僅少なりしことは珍しくなかつた。一七八四年マゲブルク侯國には二萬七千五十人の獨立せる親方ありしが、職人及び弟子は僅に四千二百八十五人を數ふるに過ぎなかつた。其の當時ウエルツブルク公國にては二千七百七十六人の職人及び弟子を抱へた一萬三千七百六十二人の親方を數へた。故に此の二領土に於ては親方百人に就き僅かに一五・八人の職人及び弟子の存したりし割合にして、従つて今も此の手傳人を各親方に平等に分つとせば、六人の親方に對し職人又は弟子一人の割合となるのである。故に經營の六分の五以上は單獨經營であつた。ポツブームの町にては、一七八〇年には十三人の指物師の親方に職人二人、二十六人の靴屋の親方に職人三人、

二十一人の麵麩焼の親方、八人の建具屋の親方、五人の煉瓦積の親方に各一人の職人ありしのみなるが、更らに其他の手工業に至れば弟子職人等を一人も有してゐなかつたのである。

〔三〕 シュモラー著『十九世紀に於けるドイツ小工業史』(Schmoller, Zur Gesch. der deutschen Kleinindustrie im 19. Jahrhundert) 二二頁以下に據る。

プロイセンの二三地方、殊に首都ベルリンに於ては、其等と比すれば、事態遙かに良好なるものありしとは云へ、總觀し來れば、工業の近代的發達が一般的富裕の状態から出發したものであると云ふが如き考は、到底拋棄せざるを得ないであらう。その昔、手工業者に提供されて居た恩澤なるものは慎まじやかに小ぢんまりと渡世し行き得る生活、失業の保證及び他の同業者より壓倒せられざる保護てふことを出でなかつた。彼等は顧客と直接に取引をなし、暇の時は働いて貯藏し、それを携へて市場に赴く。もし新たに親方の権利を得んとするものあらば、それを妨害し、出職者を驅逐し、隣接手工業の側よりの侵害を防ぐ必要ある時は、同業組合に固く結束するのである。されど同一仲間同志また鶴蚌の争をこれ事とし、裁判沙汰に、行政處分に寧日が無い有様である。これ實に古き手工業の真相であつた。

斯かる状態は十九世紀の四十年代まで繼續して餘り多くの變化を示さなかつた。然るにナポレオン時代以降、古き工業制度は幾度か削り行かれて、六十年代に至り初めて、ドイツの大部分の地にその廢止を見るに至つたのである。斯くて夫れに代つて現はれしもの、即ちかの營業の自由である。今や何人も、如何なる營業を、如何なる場所に於て、如何なる範圍に行ふも、全く自由になつた。局地的禁止權能は減じて、何れの工業者も自己の生産物を何れの場所にも供給する事が出来たと共に、己が土地にありながら、しかも他の土地よりの競争に對抗し行かざるべからざるに至つたのである。各工業部類間の制限は失せて、何人たりとも、己れに利益あるものゝ生産に従事し得るの自由を享有することゝなる。

つたのである。

二一〇

此等一切のことは、手工業者それ自身の全體的賛同の下に成立した所の事柄であつて、古き工業制度の到底維持せられ得ざるに至れりとの確信は——少くともドイツの進歩したる諸地方にては——各人の懐ける所、斯くて古き制度が一つ宛全國民の賛成の下に廢止され行きし時、同業組合制度また何んぞその大勢を免れ得べき。唯だ其の際此處彼處に生じたる唯一の心配の種は、徒弟制度が滅びはしまいか、そして職業を正則に習得せざりし者の多數が獨立せる工業者と稱しては入り込んで来はしまいかとのことであつた。さりながら、そが一個の杞憂たるに過ぎざりしは事實の證明する所となつたのである。即ち手工業に關する調査の結果に依れば、一八九五年ドイツ帝國の各地方に屬する調査地區にては、尙ほ手工業中に數ふべき獨立の工業者の九七%は手工業的豫備教育を享けたものであつて、其餘の僅少の殘分とても、其の大部分は教習職場、工手學校、盲啞院、監獄、兵營等にて技術上の教育を受けたものであつた。

此の新しい状態の影響によつて、經營の數、場所的配分及び規模は全然別個の姿を示すに至つた。その初め、多數無資本なる小親方の簇生により零碎なる經營が雜然として出現し來るべしと爲せる懸念は、遂に事實とはならず仕舞つた。そして寧ろ短かき過渡期の後、諸都市に於ては最近世代に、經營は平均して其の數を減じ、資本及び助手の數は之に反して増加した。但し工業立法の範圍外に屬する原因の存するあつて、斯種の工業部門の存立を必要ならしめた場合に於ては、それは全く別問題である。而してそれと同時に田舎に於ける手工業的經營は強力な發達を示し、其處に都會にありしと殆んど同じ強さを以て經營せらるゝに至つたのである。

然しながら斯かる都會と田舎との平衡は、當時に於ては營業自由の禮讚者からは豫想され、且つ其の實現に努力せられたものである。而已ならず手工業者中有能なる者にはこの營業自由によつて技術上の進歩と經濟上の榮達との道が拓

かれるであらうと期待されてゐたが、これも亦、満たされずにはゐなかつたのである。即ち都會の手工業者親方の幾千は、最近二世代間に大製造業者又は小資本主義的企業家となつて、當時の技術進歩に異常なる貢獻を寄與したのである。實に此の營業自由は彼等をしてその生産及び販賣の範圍を擴張せしめ、その人的有能を十分に發揮するの可能を彼等に與へたのであつた。然るに今日の人々は、此等の一切に殊更にその眼を閉ち、顧みて他を言はんとするの傾あるは、抑々何の心であるか。

固より、榮達し得ずして停滯し、或は修繕業の親方及び家内工業の労働者に零落し、或は工場労働者に落魄したりしもの、數又寡からざりしも事實である。かくて以前手工業的に經營されてゐた工業部門は何れも皆没落に瀕し、假令しかく甚しからずとするも、尙ほ經營形式としての手工業には無と擇ぶ所なきものとなり終つたのである。而して他のものは今やその存立の爲め死力を盡しつゝある有様である。概觀し來るに、大仕掛なる分解變形の過程が此處に入り込んで來たのであつて、其の結果は手工業に代つて他の經營形式が現はれて來るのである。而してこれが工場制工業及び問屋制度なるにせよ、過渡期の必ず生み出す混合形式なるにせよ、それは問題ではないのである。

世上一般大衆は此處に行はれつゝある此の現象に被らしむるに、「機械による手工労働の驅逐、工場制工業による手工業の絶滅」てふ簡単な合言葉を以てして満足してゐる。之を要するに其の原因、一に懸つて機械的經營によりて生ずる生産費の減少に存すと爲してゐるのである。

然るに今此處に、手工業に關する最近の研究をして、此の合言葉をその實際的價值に還元し來り、以て行はれたる變遷の大部分は生産技術の進歩に其の原因を有するに非ずして、寧ろ國民經濟的需要形成の範圍内に其の原因があるものなるを明らかにし、更らに進んで事態斯くの如くんば、手工業は機械經營が生じてそれと相頡頏するものなくとも、尙

ほ當然落せざるを得ざるの運命に存するものなるを断じたことは、實に該研究の最大の功績の一に數へざるべからざるものであらう。かるが故に、吾人は先づ以て此の需要形成に於ける此の變遷を簡截に述べべきの要を感じる。蓋しその變遷こそは全發展が行はれたりし條件を示すものであるが故である。

先づ第一着に生じたるは需要の場所的集合であつた。最近半世紀間に構成されたる大都會的人口集積の外に、軍隊、大なる國家的及び公共團體的施設(監獄、病院、各種専門學校等)、擴張されし運輸企業、工場、商業・銀行業・保險業の範圍に於ける大經營、これ等は皆、工業生産物に對する大量的な需要の中心點を形作るのである。然かもそれに加ふるに百貨店、通信販賣業、消費組合を以てす。此等は廣範圍の人口各層の需要を集めて少數の點に集中せしむるものであつて、この需要は個々の手工業者の顧客としては最早到底それを満足せしめ得ざるものなのである。

之に加ふるに、更に第二の要因を以てす。それは即ち近代文化生活は工業に要求するに多くの點に於て極めて大規模の任務を以てすることである。其の結果として假令其等の一つ一つは大いに手工業的労働を要求するを常としてゐるにも拘らず、手工業の手段と經營方法とを以てしては到底之を果し得ざるものである。試みに思へ、機關車・蒸氣起重機・輪轉機の製造、大橋梁又は戰艦の建造、軌道及び作業機械を以てする市街鐵道の敷設は、單なる手工具及び手工業力を以てしては、決してその完成を期待し得ぬものであつて、強大なる給付力ある機械的設備と、極めて多種多様な性質を具へた熟練せる技術家及び手工労働者との俟たざるべからざるものがある。

此等の任務は、技術上では之を手工業の手段に委ぬるも尙ほ果され得る場合に於ても、それを手工業者の手に任かすことは、それに大なる利息損失が結び付いてゐることに依つて、經濟上不可能事に屬し、實際上望み得べからざる事である。中世にありては一堂宇の建設に二代、三代、否な數世紀を費すことも出來得たのであつた。然るに今日もし一停

車場の建設に斯くの如きの時間を費やさんとする者ありとせば、世人果して何の言を爲すべきであらう！ 一八九六年にザクセン・テューリンゲン聯合工業博覽會の本館をライプツヒに建てんとして、先づ其の建築方を、その町の大工棟梁なる當時已に可なりの資本を以て仕事を營み居り常に大きな請負仕事を引受けてゐた企業家に托した。然るに彼等は皆、その建築期限の餘りに短くして、その危険の餘りに大なるに躊躇した。仍てフランクフルト・アム・マインなる一大建築會社に照會せしに、僅々數時間にして其の契約は締結せられ、然かも其の日の暮方には已に電報は各方面に飛んで、一週間後には已に其の建築場には蒸氣槌動き、必要なる木造物を満載した全鐵道列車がガリシヤより到着したのである。

今日に於ては歐洲に於ける僅少の否な恐らくは一二の會社によりてのみ遂行され得るやうな規模の工業上の課題があるときへ云ふ事が出来るのである。そして其れに對しては、かの同種類のものゝ大量生産てふ點に其の強味を有してゐる工場制工業の舊き様式の外に、此處に新らしき様式を出現せしむるに至つたのであり、其の存在の理由は實に生産任務の大規模てふ點に存する。斯かる新しき工業的大企業の種類を呼ぶに已に慣用されてゐる Fabrikationsanstalt てふ語を以てし得るであらう。而して其の組織たる頭首に習練せる技術家より成る幹部ありて、麗大なる機械的補助手段を支配し、樞要なる手工労働を最も效果的なる方法によつて其の下に分岐せしめつゝあるのである。

然れども工業的労働に對する需要は單に場所的に集合され大規模なる生産任務に凝集されたのみに止らず、そは一層同種類のとなり、従つて大量的となつた。現代を通じて畫一化てふ特徴が顯はれ、夫々の人口階層に見る風俗習慣の差別を取り除いて行く。國民服裝は瑣末の點に至るまで其の特色を失ひ、家屋・庖厨の設備は益々豊富に赴けども、同時に又、いよ／＼畫一的に成つて來た。斯くて最も貧しき生計の家にすら洋燈、珈琲製造機、瀬戸引鍋、數個の額入寫眞が備へらるゝに至つたのである。斯くの如く貧窮せる階級にも彼等の欲する商品が行き涉り得よう爲めには、それ等を

手輕に又廉價に製造せざるべからざるに至る。扱て或る品物が激しき流行の渦中に投ぜらるゝに至れば、廉價なる品物に對する需要が社會の上流の層にまでも及び行きて、世人は此處に流行熱に驅らるゝ事によつて生ずる失費に堪へ得るに至るのである。斯くの如くにして廉價なる品物に對する大量需要が発生し、此等の製作に應ずべくかの工場制工業の舊き様式は正に恰好なる生産形式たるの位地を占むるのである。而して手工業労働はその爲めには餘りに高價にして、それが技術上可能であり得る所でも、極度に特殊化するゝを免れ得ず、爲めに到底その顧客生産てふ地歩を失はざるを得ざるに至るのである。

尙ほ最後に述べざるべからざる一要素がある。夫れは家内經濟の範圍に屬する事柄である。家は古き時代より殘留してゐる生産的要素よりいよ／＼益々解放されて行き、遂には單に消費の規定に局限さるゝに至るのである。我々の祖父の時代に於て安樂椅子の必要生ずれば、先づ指物師を備ひ來りて骨組を作らせ、次いで革、馬毛、羽根を購ひ、かくて後に椅子職を備ひ來りしものであつた。而してこの事はたゞ椅子にのみ限れるに非ずして、大きな仕事には何れも皆之れと類した手續を履まなくてはならなかつた。然るに今日にありては、各人は職業に各自の精力を傾倒し盡してなほ足らざるを悲しみつゝあるが故に、斯種の生産への關與は、最早到底許されざるに至るのである。此處に於てか、吾人の要する物は何にても、之を使用適狀で購はんことを欲し、又購はざるを得ないのである。即ち欲するものは直ちにこれを手にせんことを望み、個人的趣味の愛翫を犠牲に供するも、尙ほ且つ各種異なる生産者に就きて一々注文をなすの煩はしさを避けんとしてゐる。事態已に斯くの如し、工業の設備のそれに應じて改變せられざるべからざる、蓋し當然の勢である。

如上の發展の特徴は、之を昔から通常個々の手工業者が完成品の供給をなしるる範圍に於てさへ行はれてゐる。即ち此の方面に於ても、近世の都市消費者は彼が要する個々の品物を注文して、最早や手工業者との直接取引を行ふを欲せ

ざるに至るのである。出來上りを待つといふことは、彼等の堪へ得ざる所であり、その出來上りが己が希望に應ずる能はざる場合が屢々あることを知りゐるが故に、寧ろ多數の出來上り品中より選擇し、彼此比較して而して後にこれを購入せんと欲するのである。

斯くの如く已に然り、手工業者は技術上よりして生産の任務を遺憾なく果し得る如き範圍に於てさへ、最早顧客生産者たる位置に止まりゐるを得ざるに至る。彼は最早箇數注文によりて働かずして、以前には止むを得ざる場合にのみ行つて居た『作り溜めの仕事』を専ら營むこととなり、消費者に達する爲めには倉庫の仲介を要することとなつた。然れども思ふ、抑々此の生産者消費者間の對人取引の停止せらるゝに至りしてふことは、これやがて手工業の本體の工業上より消滅し去りたるを語るものに非ずや。かくてそれは遂に資本主義的となり、商業上の取扱を望むに至れるものゝに非ずやと。斯くの如くにして問題の一切萬事は、大經營と小經營、その何れが果して能く大なる利益を齎らすものありやてふことに懸ることとなつたのである。即ちもし大經營にして利益あらんか、手工業の以前の労働範圍は工場制工業に歸し、小經營よく利ありとせば、それは家内工業に歸することとなるのである。

近世の需要が尙ほ未だ集中的大量需要として現はれ來らず、又は大なる生産任務に凝集して發生するに至らざる方面に於ても、需要はその同種性を大いに増して家内經濟より解放せらるゝことに依つて、到る處需要を二三少數の點に集中せしめ得ることとなるのである。近世に於ける交通機關の完成、郵便電信料の低廉、貨物信書輸送の迅速及び正確、大廣告の無數の方法等は此の傾向を促進するに有力なる助力をなしてゐる。かるが故に營業自由てふことは、それが現出し來れる時には已にすつかりと均らされた地盤を有してゐたものであつて、それは唯だ近世國民經濟に於ける需要形成に適應する法律形式を作り上げた迄である。斯くて今やかの永い間相互人爲的に閉鎖されてゐた場所的なる手工業者の

顧客範圍は商業の仲介によつて大なる工場制工業及び家内工業の顧客に統合され得たのであつて、此の顧客は其の眼中國境なきに至つたのである。

二一六

集中的需要は分散的生産を以てしては到底満足せしめ得ざるものである。此處にこの需要の集中過程と相併んで、工業生産の範圍に於ける集中過程が生ぜざるを得なくなつた。而してこれぞ手工業に致命的重傷を負はしめたものなのである。

さりながら此の過程は極めて複雑せる性質のものであつて、之を組み立て、るる個々の経過を夫々分離するは到底容易の業に非ず。然かも尙ほ吾人は此の難きを敢てせんとするものであつて、然かもその區別の標準を手工業の運命といふ點に置くといふ方法に於てある。かくて此處に次の五つの場合に到達する。

- 一、同種類の工場生産による手工業の驅逐
- 二、工場制工業若くは家内工業による手工業生産範圍の縮小
- 三、手工業の大企業への併合
- 四、需要推移による手工業の衰微
- 五、倉庫による家内仕事及び苦汗労働への手工業の壓下

此等の過程の三四が協力してゐる場合が屢々である。されど吾人は此の研究に際しては、出來得る限りそれ等を分離して考へようと欲するのである。

(一) 資本主義的大生産が、手工業をその全生産範圍より驅逐せんが爲めに、その全戦線に殺到する場合は比較的稀である。それに屬するものとしては、古き時代のものにありては機械織業、時計及び鐵砲の製造業、併びに針工・鉗工・鐵

1) Schwitzarbeit

器具鍛冶・骨牌工・靴下編工の小工業にして、近時のものに於ては製帽業、製靴業、染色業、石鹼製造業、製繩業、釘及び刀身鍛冶業、製桶業等である。また麥酒醸造業及び製桶業も或る程度まで之に數へることが出來よう。

此の驅逐過程にも、或は比較的早きものあり、或は遅きものがある。そは一に該手工業が從來已に市場販賣及び商店販賣を有する貯蔵生産を營み居たるか、或は單に箇數注文にのみ應じ來りしかによつて分れるのである。例へばかの市場を目安とせる製靴業は、餘程以前よりして出來合ひ靴を買ふ習慣に或る國民階級を慣らし來れることによりて、機械的靴製造業の爲めに其の販路を開拓し遣りたるものと爲し得るのである。

斯かる發展が手工業に及ぼす結果は、該工場生産物の使ひ古されし場合に、その修繕を許すか否かによつて差異を生ずるものである。もしその修繕を許さざるあらんか、手工業は全然消滅せざるを得ざるに至れども、これの許さるゝ場合に於ては、手工業は修繕業となつて、或は商店營業に伴ひて營まれ、或は單獨にして行はれるのである。かく同一部門の手工業者の手によつて工場製品が商店營業として取扱はれることは、これ決して不幸なる變態と稱すべきものでない。然りと雖、能くこれを行つて遣り遂げ得るものは、たゞ手工業者中比較的資本力あるものゝみに限られてゐる。之に反して工場商品が全然商人の手による小賣商業に委ねらるゝ場合には、純然たる修繕業は手工業の地盤を全然失ふ危険が甚だ大である。蓋し大多數の消費者は新らしき商品を購入せる商店に就いて、その修繕を托せんとすることを好むが故である。然る時には該商店主は己が許に職人を抱へるか、又はその修繕を小さき手工業の親方に與へるのであつて、然もその何れにするも、手工業者の利得を甚だしく縮小せしめ、彼等をして全然商店主に隷屬せしむるに至る。而已ならず更らに修繕そのものが大規模に經營せらるゝに至る事は、多額の資本と自營の集荷所とを擁して營まるゝ所謂襪襪染色業に於て其の適例を見得らるゝのである。もしそれ新製品が極めて廉價に製出せらるゝこと、時計、靴に於けるが如

くならば、修繕は徹頭徹尾餘計な事柄と化して、新しき代償物を得るよりも却つて多くの失費を要するであらう場合があり得るのである。

(二) 前の場合よりもその現はれる度數多きは實に此の發展過程の第二類にして、其處では工場制工業又は家内工業によつて新たな製造が全然無くなるといふのではなくて、其等によつて手工業がその生産範圍を縮小せしめられるといふ事が問題となるのである。然かも此の過程の生ずる原因は極めて多種多様たり得るものであつて、吾人はよしその一切を網羅し盡し得たりとは云ひ得ずとするも、これを次の四つに分つことが出来ると思ふ。

(a) 相異なる手工業が一個の單一的生産設備に融合される。例へば指物師、木彫師、轆轤師、蒲團師、畫工、塗物師が集まつて家具工場となり、車匠、鍛冶職、鞍工、硝子職が寄つて製車工場となり、籠職、指物師、車匠、鞍工、鍛冶職、錠匠、塗物師相合して一乳母車工場の生ずる如き即ち其の好例である。その外、更に各種の機械製造工場、汽罐車工場、鐵道車輛工場、ピアノ工場、トランク工場、球突臺工場、併びに全工場設備(蒸餾所、醸造所、製糖所等)の製作をなす事業をも數へようと思ふ。而して斯かる併合によりて各手工業中より抽出せられたる生産部分は、其の手工業在來の労働範圍及び販賣範圍の極く一小部分を形成するものたるに過ぎざるを通則とする。さりながらも斯くの如き瀉血がかの轆轤師、鞍工、錠匠等に見るが如く、其の行はるゝこと餘りに再々ならんには、終には餘す所のものを失ひ、爲めに該手工業は精氣消耗して死滅せざるを得ざるに至るのである。

(b) 其の性質上、工場制工業的又は家内工業的大量製造に適してゐる報償多き個々の品物は手工業より掠め去られて仕舞ふ。製本業は斯くの如くにして其の四十餘種の特種企業の廣き全生産範圍を殆んど全く失ひ終りて、唯だ残されたものは個人顧客の爲めの製本てふ一事のみとなつた。籠職は精巧なる商品の製作はこれを家内仕事に、乳母車、藤椅子

等の製造はこれを工場の手に乗せて、手工業の手に残れるものとしては唯だ粗雑なる杞柳細工一つのみとなつた。錠匠は抑々其の錠匠なる名が因つて起れる品物、即ち「錠」を失ふに至り、刷毛師は毛筆、齒磨楊子、爪刷毛の製造を擲ち、建具師は中邊物の製作を奪はれ、安物の樅製家具を作つて倉庫に隸屬することゝなつた。麵麩焼業は今や少くとも都會に於てはその麵麩製造を工場制工業より掠奪されんとしつゝあり、葉鐵匠は最早鉢力罐の製造をしなくなつた。——之を要するに、此處に述べたるが如き損失を蒙らざる手工業は殆んど絶無なりと云ひ得るであらう。

(c) 工場制工業が生産の初期段階を引き受ける。原料を最初粗く加工するその事には最も多くの力の使用を要するものなるが故に、特に機械の應用を刺激したが、その生産手續の後の部分たる生産物の精緻なる個人的加工に至りては、其れ程に企業家の興味を惹かなかつたのである。斯くの如くにして金屬及び木材に加工する凡べての工業にありては殆んど原料は唯だ僅かに半成品として使用されるのである。革匠は已に磨製されし革に加工し、鍛冶匠は完成せる蹄鐵を、硝子職は窓框を、刷毛匠は截斷して錐揉みせる板と揃へたる剛毛を、建具屋は織り揃へた嵌木床板と取付ける迄に出來上つてゐる戸を手に入れてゐるのである。

斯かる種類の缺損は、その當初にありては通常、該手工業よりは損害とは思はれずして、寧ろ輕減なりと目されるのである。然り、それによつて能くその生産過程は短縮せられ得る。何れの親方も以前に比して遙か多數の個數を作り出すことが出来る。而して各個數毎に以前通りの利益が得られるものとすれば、彼れの收入は將に容易に増大せしめ得られたであらう。然れどもそれは固より彼が十分の仕事を受け得ることを前提としての事であることを忘れてはならぬ。一切の金具を鐵具商より出來にて手に入れる錠匠は一夏にして能く多數の造營をなすことが出来る。然るを以前にありては、此等の製造品を、先づ以て自己の職場にて拵へ上げねばならなかつた爲めに、一夏を費して僅かに一の造營を完

成し得たに過ぎなかつたのである。斯くの如く然りと雖も手工業が斯くその抑々の根元に於て切斷せられるてふことによつて、多くの場合手工業者の親方の一部をして贅物たらしむるに至るを思はねばならぬ。而已ならず當然の結果として、必要な經營資本の額が増加するのである。即ち手工業者は今や最早や原料品の原價のみならず、半成品製出の費用をも支拂ひ、更らに製造業者及び商人の資本利潤をも支拂はざるべからざるに至つた爲めである。

而して一番の元方から、然かもうまく選擇して原料品を購入する時こそ、最も大なる利益の得らるべきものなるを思はゞ、上述の事はいよ／＼重大なる意味を持つて来る。故に商業は機械的半成品製造なるものが到底考へ得られざる方面にありても、なほ此の準備的生産段階を支配してゐることが決して珍らしくない。然しながら木材手工業者はその昔木材を森に於て幹の儘買ひ得たる時代にありては、今日の如くそれが板となり條板（ちゆうばん）となり又薄き剣板（せんばん）となつて木商人の手より買入れる時代に於けるよりも、優良の状態にあり、刷毛職親方は切り放しの儘の剛毛を屠獸者の許にて求めたりし時代においては、今日の如く無數に仕分けせられたるものを剛毛商人の手より購入せざるべからざるに至れる時代に比して、遙かに多くの利益を得てゐたことは疑を挟むべき餘地がない事柄である。

この半成品商賣なるものは、如何にも手工業者にとりては極めて便利なるものにして、極めて少量の原料と雖も尙ほこれを商人より購入し得る便宜あるは否むべからず。然りと雖もこれこそ手工業の没落を少なからず助成する原因とならんとは。其の理由蓋し、今日に於ては爲めに職人が殆んど資本なくて經營をはじめ得るに至れることにあるのである。例へば製靴業にあつても亦、靴胴製造の成立によつて、その初期に於ては小經營が陸續として蜂起したる事實を考へることが出来る。それはこれによつて靴匠の生産過程が短縮さるゝに至りしが爲に據るに非ずして、以前は少くも全皮革一枚を鞣皮匠より購入せざるべからざりし不便ありしに、今や靴一足毎に上皮を小切店にて買求め得るに至れるが爲めである。

斯かる工場制工業的機械的豫備加工と手工業的完成との共働が特に興味ある組織を取つてゐるものは、労働過程の全生産的部分が手工業の手を脱し去りたる處に於て然りである。斯かる場合に於てはその生産物が或は局部的取附け又は裝備を要する際に唯だ僅かに、手工業はその存在を繼續し得るのである。然れども此處に至りては手工業者は殆んど再び賃仕事人の段階に逆轉せるものと云はねばならぬのである。斯くして錠匠と建具師（この場合は出来合の戸、嵌木板を以て仕事をするが）は唯だ僅かに『取附け師』たるにすぎず。又出来合の蹄鐵を馬に打ち着ける蹄鐵鍛冶匠の役割もそれと大差がないのである。

他の側面に於て、生産過程の短縮によつて經營はいよ／＼資本主義的となり、資本の回轉は益々速かとなる。然るに翻つて手工業を見るに、その生活要素は資本利潤にあるに非ずして、労働収益に存す。然るにこの労働収益はあらゆる事情よりして縮小されずには居られざるを奈何にすべき。

(d) 新原料と従來手工業中に用ひられるたりしものよりも一層よく大工業的經營に適應せる新生産方法との出現は生産範圍の或る一部に對して手工業を麻痺せしめ終るものである。かのワイーン式曲線家具の出現、鐵線釘製造とそれが釘鍛冶に及ぼしたる影響、麻繩綯工と對立する針線製造、革、麻布等の消費範圍への彈力護謨の侵入等を注意し度い。而して又かの瀬戸引鍋は陶器工、葉鐵匠、銅匠をして同時に一頓挫を來さしめたではないか。革及び羊皮に代るクロースの發明は機械的大製木業の道を開拓せるものに非ずして何ぞ。

斯くの如くに手工業は、非常に様々な場所に於て殺到し來る近世生産形式に侵襲せられ、然かも多くの場合到底その敵たり得ないのである。而して此の新しい生産形式は手工業の双肩に懸れる重荷を卸してやる力強い友人なるかの如き

美しき假面を被りつゝ、其の肩上の佳肴を掠め、遂には企業家資本の食慾を刺激させ得る何物をも殘存せしめざるに至るものである。

〔三〕 扱て次は手工業が大企業に併合せられて、其の獨立性を失ふ場合である。何れの大きな企業も、その製造業たるに、商業たると、乃至は交通業たるとを論ぜず、皆己が經營には多様の手工業労働を要する。然るに此等の手工業労働が尙ほ大量に生ぜざる間は、手工業の親方に受負はせ居れども、その現はれ來ることいよ／＼其の度を増し且つ益々規則正しくなり來れば、其の企業の域内にその爲めの副業的經營を設置することが有利になる。斯くの如くにして今日にありては、麥酒大醸造所にも、また酒大販賣店にありても、各自營の樽製造場を所有するに至り、車輛製作會社には鍛冶工場、鞍工場、車工場、金具工場あり、鐘詰工場には自營の葉鐵工場を生じ、造船所には客船内部の裝備の爲め指物師、大經師等が居り、大工場經營は殆んど何れも金具工場及び修繕工場を有してゐる有様である。而して從來の親方が此等の特殊仕事場の監督役となつて、斯かる大經營に加はるに至れば、無論その獨立性を失ふに至れども、その代りに或る程度までの獨立を得、殊に確實なる地位を得るに至るのである。

然れども斯かる購買力多き買取人を失ふことは自由なる手工業者よりは甚しき苦々しさが感ぜられる所であつて、上述の組織が全手工業の餓死てぶことを惹起するに至ること、かの轆轤業の如きである。そは遂に半成品の形にてその生産物を使用してゐた一切の工業の中に併吞せられ終つたのである。然しながら此の處置は、これを阻止し得たりしよりも、善き經濟の爲めといふ點に於て有利であることは贅言するの要を見ないのである。

尙ほ此處に附言し置かんと欲するは、斯かる大工業的副業に従事する労働者は、手工業が尙ほ獨立して存続してゐる間は、其の手工業の中にて訓練さるゝを通例として居ると云ふことである。其の結果として手工業には徒弟の數は極め

て多過ぎる位でありながら、職人は手工業のみが提供し得るよりも遙かに廣き労働市場を有するのである。かの金具職に於て、それが所によりては徒弟の數が職人に十倍する場合があるといふ事もこれに依つて説明され得るのである。

〔四〕 手工業は需要推移によつて衰頹し、或は需要の停止によつて全く絶滅し終る。斯かる推移は古往今來見得る所なるが(曾て羊皮紙及び蠟の使用されたることを指摘したい)、生活の急速なる今日に於けるほど激しきはあらざるべしと思はれる。此處には唯だその二三の場合のみに就いて述べようと思ふ。

桶匠は我々の祖母の所帯の爲めに、今日の人々少くとも都會の家計にては到底求めて得べからざる如き種々の容器を作つて居た。例へば肉入れ、漬菜桶、豆入れ桶、洗濯桶、手桶、天水桶、更に行水盥、洗濯盥に至るまで。然るに今日にては最早、肉を貯藏し野菜を漬けることも絶え、水は水道より出ることとなりて、小型の木製容器に代ふるに、鐵葉及び陶磁器製の容器が使用せられるに至つたのである。第二の例を示すものは轆轤師にして、以前は何れの所帯に向つても一組より數組の絲取車、絲卷、捲軸を供給して居たが、今日にては絲取車は「舊ドイツの設備」の展覽品に低落して仕舞つた。その二個の工業は、一方に於て斯くその顧客を失ひしに反し、他の一方に於ては新たな買取人を發見した事、殊に樽詰の増加による桶匠の如くではあるけれども、此の新しき顧客なるものは、實は出來得る丈け早くその桶工業を副業經營として己れに併合せんとしつゝある工場なのである。第三の例を與ふるは錫工業である。以前には都鄙を論ぜず殆んど何れの所帯にも備へられてゐたかの錫皿鉢は、今や已に流行の外に逸し去つて、陶磁器が之に代るに至り、錫業は殆んど全く其の存在の基礎を失つて仕舞つた。最後に旅行交通の範圍に於ける甚しき變動の齎らしたる需要推移をも注意し度い。その爲め鞍工、襄匠、車匠等は殊に無殘なる大打撃を蒙つたのである。

〔四〕 各種の場合の最後の聚群として手工業が全然商業に隸屬し終るといふ事が生ずる。親方は家内仕事人となつて、

其の製品は僅かに倉庫の媒介によつて、はじめてその使用者の手に達し得る状態に至るのである。斯かる現象の生ずる原因は二重である。即ち第一の原因は都會の營業地區に於ける家賃の高價であつて、爲めに手工業者はその住居及び仕事場を家の最上層もしくは裏屋に構へざるべからざるの餘儀なきに至り、従つて顧客はこれを捜し出すに極めて困難を感じ、その結果は遂に金拂のいゝ顧客の一顧を値せざるに至るのである。而してその第二の原因は特選品の數多く、店主の「大勉強をする」店、即ち見本を澤山に送つて、客の氣に向かぬものは構はず引き取る等といふ如き所ばかり買はうとする世間の人々の傾向である。刷毛、櫛、美術竹編物、皮製品、小型の木具及び金具の如き品物は、今日一寸し大きな都會にては、最早それを其の生産者の許にて買ひ求めることは殆んど皆無であつて、何れも唐物屋、小間物屋にて購ふのである。そののみならず、或る品物を己が趣味に適へて作らせんとする時にも、尙ほ商店に就きてその注文をなすまでに成つてゐる。今日尙ほ名刺を印刷所に注文し、喫煙車を輻輳師の許に注文する人があるであらうか。さなくとも日に幾度も往き來する大通に、必要品の數々が己が望み通りに出來上つて陳列されて居、従つて僅々三分間を費さば何物にまれ欲するものを入れ得る機會がありながら、何を苦しんで、廢り掛けた手工業を探ねて、熊々遠方の郊外にまで赴き、然かも彼方此方と尋ねての果て、僅かに漸く三つも四つもある陰氣な梯子段を攀ぢ行きて注文をなし、のみならず其の品物も約束の期日にはこれを手に入れ得ざるが普通となつてゐるが如きを選ぶものがあらうか。又、一軒の家具店にて室内裝飾の一切の物を調べ得るを知つてゐる人が、一軒の家財道具店にて僅か一二時を費さば臺所道具一切を取り纏め得ることを承知してゐる若き妻君が、半ダースもある職人の家を一々訪ねて、しかも何週間を経始めて始めて品物を手に入れるといふ如きことを好んで爲さねばならぬものであらうか。

以上に依つて今日手工業の間に行はれつゝある變形過程の主要特徴を示し得たこと、考へる。而して最後に、此の研究の結果より生ずる抑へ付ける事の出來ぬ確信として次の如きことを言ひ得ると思ふ。即ち平均需要の爲めに一定の型にて作り出し得て直ちに使用に供さるゝ状態にある商品にして、早く毀損廢滅するの恐れなき物を供給する一切の場合に於ては、手工業は最も甚しき存在の危險に曝されてゐるものであつて、之を營むことが大經營に取りて特に技術上の優秀性の存せざる場合にありてさへ尙ほ然りである。換言すれば、生産物が製作者のそれ以上の助力に俟たずして消費者の使用に供せられ得る一切の場合が即ちそれなのである。

此等一切の場合にありて、商業は行商販賣といふ如きものに至るまで、その凡べての分派に於て、益々工業生産の爲めの一般的清算所となり行く傾向がある。而して工業は出來得る限り特化し行かざるを得ず。而して倉庫の奴隸となるの運命より脱せんと欲せば、その途は僅かに小資本主義的となると云ふことより外にない。かくて仕事場と販賣店との結合は到底免れ得ざるの勢となるのである。

之に反して手工業生産物が局地的の取付けや個人的な裝備を必要とする場合に於ては、手工業は少くとも消費者との接觸を失はぬのである。然れども大なる都會にありては、此等の場合でも、需要が己に非常なる集中を示してゐること、彼の錠匠、總じて廣義の大工に於けるが如くであるか、もしくは手工業者が更らに販賣倉庫を有して、これが注文の集積地となり得ること、彼の葉鐵匠、鞍工、裁縫師の誂物製造店に見るが如き場合に於てのみ、自己を維持することが出來るのであるけれども、然かもこの二つの場合とも、更らに小資本主義的經營によるに非んば、到底その存立を期待し得ないのである。

「手工業事情調査」の結果も亦、如上の事情に相應するものである。都會に於ては何處も同じく、手工業親方の數は

相對的に著しく減少し、その弟子の数は増加した。即ち經營が大規模となつたのである。而して更らに甚しく増大したのはその資本である。現代の要求に適合する經營方法によつて己れを維持し、多分尙ほ將來とても自己を維持して行く見通しがあるのは都市手工業者階級の上層部であることは、明らかなことである。世人も亦、修繕をさせる上の便宜があり、且つ手工業親方には他に優つた鑑識があるが故に、同じく選ぶならば、純然たる商人の店よりも、この手工業の親方の經營してゐる店を選ばんとする傾向がある。而已ならず斯種の手工業親方は、顧客の無き時にも仕事場を引續き經營して行くことによつて、霜枯時しもがらにもさしたる影響を蒙らずして止み得るに、一方、都會の商店主はその打撃を受け易い状態にあるのである。

田舎に於てはそれと可なり事情を異にする。需要形成の變化により又都會の居住状態によつて生じたる手工業衰亡の原因は、此處にては極めて微々たる勢力を有するに過ぎぬ。此處では、需要は尙ほ未だ然かく集中されてはらず、個人的形態を取る場合が多い。而して村の人々は皆、手工業者とその家とを親しく識つてゐる。近所交際近所交際、學校仲間、親戚關係などいふものが經濟關係にても亦、強力に共働してゐる。故に、此處には尙ほ實際上の手工業の地盤が存するのである。手工業者は屢々自身數頃の田圃を耕し、收穫の時期には近隣者の刈入等の手傳をすることもある。而して自己所有の家がある。要するに彼はその生計を手工業にのみ頼りゐるものに非ず。而してその經營には依然賃仕事或は對算が行はれつゝあるを見る。

總じて田舎にその地盤を占めてゐる大多數の手工業は、なほ見透すことの出来る將來には確實な位置を占めるものなりと余は信ず。固より其等手工業が都會に於ける工業の變遷と全然没交渉なりと云ひ得ざるは異論の挟むべきなく、田舎にありても、葉鐵匠は普通に最早葉鐵製容器を自ら作らず、蹄鐵師は出來にて仕入れし蹄鐵を使用しつゝあるの状態である。然れども消費の習慣は、田舎に於ては、都會に於けるが如くしかく速かに變化するものには非ず。需要は寧ろ個人的の性質を持つた儘であり、更らに比較的少量の修繕仕事の存するものがある。而已ならず農業の諸機械が漸く廣く使用されるに及びては、鋳匠、鍛冶匠、葉鐵匠、桶匠、指物師に其の新規なるものを齎らしたのである。斯くの如きの結果は、一八九五年ドイツに於ては、手工業親方の約五三%を田舎に住まはしめることとなり、田舎をして手工業者人口の稠密度に於て、都會と肩を伍せしめることとなつた。固より田舎には單獨經營の數が殊に大であつて、一八六一年以來プロイセンにては、補助人員の平均數は明らかに少許の減少を見、徒弟の數は比較的高きを示すものがあるけれども、其處に敢て別に懸念すべきの理由がない。親方の數に對する手傳職人の數の割合は、百年前の都會に於ける夫れと比して、遙かに好況であることに疑が無い。且つ今日の田舎手工業者の境遇は凡べての方面より考察して、假令つましいものではあると云へ、然かも全然満足すべきものなのである。そはシレジア、ザクセン、東フリースラント、バーデン及びアルサスが現に提供する報告の皆等しく一致してゐる所である。田舎手工業者中には、確かに無産者の生存を營みうるものがある。然しながらそれは常に手工業中に見る現象にして、決して目新らしき徴候に非ざるを奈何。手工業を目して工業の理想的經營形式なりと爲しつゝある人々の間に、長く此の動搖しつゝある工業的中間階級に再び維持と活力とを齎らすべき二個の手段ありとなして、長くこれを歎賞して來たものがある。然かも今日にして尙ほその効能を信ぜんと欲する人の尠なからざるを見る。

其の第一の手段は「美術工業への復歸」である。この種の諸努力はやがて三十年にも成らうとする此の歲月の間、熱心に行はれ來て、其の爲めに博物館、専門學校、徒弟工場の建設、展覽會、懸賞論文等が行はれた。然れどもやがて經驗が教へ、更に社會政策學會の研究が新たに確める所に從へば、小經營はこの努力の恩澤を蒙ること極めて僅少にして、

唯だ錠匠の職のみが單獨に鍛鐵製格子、階段用欄干、提灯等の再び使用されるに至りしが爲め、幾分の利を得るに至りしを數へ得るのみである。其れを除きては、美術工藝運動により營業上最も多量の利益を蒙りし代表者は比較的大規模なる否な最も大仕掛なる工場經營なのであつて、即ち製木業、美術家具製造業、製陶業に於て然りである。

其の第二の手段は小型動力機械の弘布と電気動力傳達とであつて、此等は最も小なる手工業親方にさへ最も重要な作業機械をその經營中に取り入れるを得せしめるものなのである。ジーメンズ及びリユーローの如き人々すら、尙ほ斯かる技術的成果の普遍化に絶大の希望を繋いでゐた。此の際彼等の解釋の出発點は、大經營の技術的優秀性を撤去せしむるは唯だこれによつて所期さるべく、大經營の技術的優秀性は實に其の大部分を勞力節約機械の使用に負うてゐるといふものであつたのである。

然かも何ぞ知らん、彼等は、此の際、機械力なるものは、それが使用される度合が少なければ少ない程、その費用は益々高騰するものなるを全然閉却し居らんとは。今、リーデルが「ドイツ技師中央雜誌」に於て一八九一年に對する總括の結果として記す所に據れば、小型發動機の總費用を一時間一馬力に換算して、これを十時間作業せしめる時は、次の如くなりと云つてゐる。(單位フエンニヒ)

發動機種類	四分の一	二分の一	一分の一	馬力
蒸氣小型發動機	—	—	三〇	二二
瓦斯發動機	五二	三七	二四	一九
壓搾空氣發動機	四一	三〇	二五	一九
電気發動機	六六	五五	四六	四〇
石油發動機	—	—	六〇	三五

1) W. Siemens 2) F. Reuleaux
 3) Riedel
 4) Zentralblatt deutscher Ingenieure

〔四〕 瓦斯の價は一立方米に付き十二フエンニヒと計算す。

其處でなほ二種の經營が技術上に於て同等の位置に立つと云ふことが、未だ以て經濟上に於て對等の位置を占めるものとはなり得ないのである。機械が生産を廉價ならしめんが爲めには、それは十分に使用し盡され、用ひ盡され得なくてはならぬ。然かも機械は生産過程の全盪を引き請け得るものに非ずして、たゞその一部分のみ行ふに過ぎざるものなるが故に、従つて其等の機械が絶えず作業し居らんが爲めには、經營の擴張、多數の勞働者數の常備、原料、仕事場賃借料等に對する巨額なる失費を必要件とする。然るにこれを遂行せんは小親方には通常資本が缺けてゐる。然かも今假りに百歩を譲りて、彼等に斯かる巨大の資本ありと爲すも、大經營には常に有利なる原料購入、大規模なる分業、優秀なる工業上併びに技藝上の能力使用、好箇の販賣機會てふ利益が伴つてゐることを忘れることが出来ぬ。事情已に斯くの如し。何が故にかの聰明なる人々にして、此等一切の事を觀過し、しかも恬乎顧るなきを得たかを解するに苦しむものである。敢て問ふ。裁縫職、製靴、又は製鞍職がかのミシンによつて一層活氣を得るに至つたであらうか？

〔五〕 此處にのべたことの興味ある證據を與ふるものは指物細工場に於ける木材加工機械である。メルリン式(中邊物の)家具工場の中で多くある比較的大仕掛の手工業的經營——其の中には二十人以上の勞働者を使用する資本に豊かな中經營もあるが——の何れも、此の種の作業機械を備へ付けてゐるものは無い。尤も備へ付けたと欲すれば、各種の馬力を有する機械は、メルリンの多くの工場にて比較的廉價に借りることが出るのであるのに。而して斯種作業機械に代ふるに粗削り又は下拵へ等をなす裁斷工場を有してゐるのであつて、最も大規模なる家具製造所又は建具製造所に於てのみ僅かに其等の機械を備へ付けてゐるに過ぎないのである。

由是觀之、此の二つの點に於て手工業に對する新しい支持點を發見せんとする希望は到底抛棄せざるを得ないのである。而已ならず實際に於て、今日大都會に於ては工業の多數の部門に、最早斯かる支持點の一つにも接し得ないのであ

る。たゞ僅かに顧客生産の條件が存続する限りに於てのみ、極く限られたる数の資本主義化せる經營に對して餘地が存してゐるだけである。しかも此處にありては最早手工業者の姿を認むる能はずして、之に代ふるに中小企業家、工場に於ける工場長と精練労働者、請負製造人及び家内仕事人等の他種の人間を以てしてゐる。而して最後の家内仕事人を除く此等の聚群の凡ては何れも昔の小親方の多數と比較して、物質的には良好の境遇にあることは事實である。然れども彼等自身が、以前より満足し且つ幸福に感じつゝありや否やに至つては、それは全然別問題である。

如上の敘述は當時の状態そのものよりは、寧ろ發展の傾向を取敢へず示すものである。さればとて吾人は、夫れによつて迷誤に陥つてはならぬ。説けるが如き手工業の没落は遅々として音もなく行はれ行くものであつて、手機織工が機械織機に對して絶望的な惡闘を試みた彼の當時に於けるが如き甚しき困難は、僅かに被服工業の如きに就きてのみ見得る所である。都市人口の或る階層は依然として手工業者に忠實である。惟ふに、更に尙ほ暫くは此の状態が続くであらう。かるが故に次の世代をして新らしき状態に順應させる爲めには、尙ほ餘裕があるのである。而してこれに當つて彼等に必要なものはヨリ善き商業及び工業の一般的教育である。さりながら堪能にして細心の士は、依然活動と自己發揮との天地を有するものであつて、生半可なる修練を以て學校と仕事場を去れる者が、頼るなく、又絶望的なると比すべくもあらぬのである。

余は確信す、上述の過程は立法てふ如き手段を以てしては到底阻止し得べからざるものにして、爲し得るとするも高きそれが經過を遅緩ならしめるに過ぎず、と。借問す、抑々斯くの如くその過程を阻止し、その經過を遅緩ならしめることが果して幸福なるべきか、と。

第四講に於ては、工業的經營形式の發展を交通手段の發達と比較して、古き種類は新たに生じたるものより驅逐され

はするけれども、決して剝絶されて仕舞ふものではないと云つた。この事が同じく手工業にも適用されるのである。手工業は經營形式として決して滅亡し終るものではない。それに固有の特徴が最もよく發揮し得られる如き地位のみに局限されて仕舞ふ丈のことである。今日田舎に於て、即ち中世に於て手工業の生じたる存在條件を今日も尙ほ手工業が發見し得る地方に於て然りである。

可なり正確なる評定に據れば、一八九五年ドイツ帝國には、田舎に五十萬以上の職人及び徒弟を持つた約六十七萬五千の手工業の親方あり、都合百二十萬ばかりの有業者があつた。今それに親方の家族員を算入すれば、如何に低く見積るも、尙ほ總體にて三百萬人以上を算するのである。かるが故に十九世紀に於て、手工業は此の範圍の大部分を征服したのである。さればとて、此の事に就いてその田舎の顧客を失つた小さい農業都市の親方達と掴み合ひをするといふ理由は、社會政策的立脚地よりして毫も存しない。否、寧ろその正反對である。

都市の同業組合が狭量なる閉鎖を行ひつゝありし時代、何處にも親方の權利を得る能はざりし數千の職人が街道筋に轉がつて居た時代、鍛冶職人の間には、宿屋に於て年長の職人に會する時必ず述べべき挨拶の文句を有してゐた。それは『私はまだ親方には成り申さぬ。しかし何れは成れることと思ひますんで。此處には御座んせぬから、何處か外處に御座んせう。都市を離れた一哩、そして犬が柵を跳び越えんと、その柵が壊れて仕舞ふ土地、其の土地には好い親方がゐられますだ』といふのであつた。

〔六〕シエック著『ドイツ職人制度概論』(Ch. I. Stock, Grundzüge der Verfassung des Gesellenwesens der deutschen Handwerker) 八二頁。

當時かの鍛冶職人が最後の望の網であつたもの即ち田舎に住み込むといふ事は、今日では都會生活の要求に堪ふるを

得ざるに至れるを自覺せる幾千百の職人に取つての最後の頼みの綱である。況んや田舎に取りても、斯くの如くその住民の間に工業的要素を混入することは、社會上及び經濟上の著しき進歩なりと目すべく、其處にて手工業の基礎の上に築き上げられる生活は、我々の社會が有する中の最も健全なる生活と爲し得るに於てをや。固より斯かる生活は、當然舊き手工業の自然的尺度によつて計量せらるべきものであつて、決して經濟政策的浪漫主義者の空想になる人爲的尺度によつて計られざらんことを欲するのである。

蓋し殆んど新しい發展の初期以來、都會の手工業者階級の餘黨が高唱する不平と愚痴との主なる原因は、手工業てふ工業經營制度がその代表者達一般に齎らし得る幸福の尺度に就いて世人が誤れる觀念を抱いてゐることにあるからである。中世に於ては此の尺度は比較的高いものであつた。これ他に非ず、手工業者の境涯はその當時、直接彼等の階層の下に立ち、彼等よりは凡べての點に於て劣等なりし社會階層、即ち隸屬的農民階級、田舎「貧民」の状態を基として計量されてゐたのである。此の言語に絶えた壓制に泣いて居た地方農民の階級の生活と比較し來れば、手工業は實に『黄金の地盤』を占めてゐた。即ち手工業は常規的に金錢收得を生ぜしめ、その代表者に市民的自由を保證してゐたのであるが、之に反し農民は實物經濟の盛衰に曝露され、加ふるに地主の苛酷なる壓制に保護なく曝されてゐたのである。若し夫れ中世手工業者階級の許に均等に、多額の資本があつたと假定せんとするものありとせば、そは一箇の謬想である。手工業者階級と殆んど甲乙なかりしものは小賣商人である。彼等以上に存する階級（市民階級、貴族）とは曾て己れを比較したことがないのである。思ふに、家柄に基く階級の制度にありては、各個人はその階級に屬するものが己が所有となるあらば、よくそれを以て満足し得たりしによるのであらう。

然るに今日の我國の社會制度は職業に基ける身分階級及び職業の自由選擇てふ上に成り立つてゐる。斯かる制度に於

ては、何等の法的制限も自己と他人とを區別するものあるに非ざるが故に、各人は一切の他の人々と比肩せんとする。斯くの如くして近世社會の他の階級と比較し來れば、手工業の状態は、假令それになほ遺憾なく生存の權能ある所に於ても、到底極めて見衰らしきものと映ぜざるを得ない。即ち一切の他の階級は皆その地位を高めたりしが如く見ゆるに拘らず、たゞ手工業者階級のみは十年一日の如くに停滯してゐる。否な手工業が其の生存の爲めに苦闘しつゝある所に於ては、常に壓迫てふ悲惨なる相貌を示しつゝあるを見るのである。

舊き都市人口の核心を形作りたる獨立せる小さい人々のあの廣き階級が消滅して、それに代つて依存的生活を送る無結合の大衆が出現するといふことは、これは決して輕々に過眼し去るを得ざる事件に相違ない。これは確かに社會の缺憾にして、この缺損たる都會の地に於ては早速の所、填補するを得ざるが如くに思はれるものである。さりながらこの缺損は決して非填補的のものには非ずして、已に長き以前よりそれを補充せんとする力が作用しつゝあつたのである。即ち隸屬者の衆群の間より『新中間階級』が生じて來た。これは經濟的勢力と社會的適應性¹⁾とに於て、舊き小市民階級に勝れるものであつて、近世的工業が生み出して、其の目的の爲めに育て上げて來た一社會要素なのである。各個人は一段高き協同目的に従屬すべく、先づ自己の經營と緊密なる義務關係に立ち、而して此の自己の經營を通じて國民的貨財供給の全組織に對して密接なる義務關係に立つのである。中世手工業の同業組合制度が『一般的福祉』を高調して、その諸規定は何れも其の目的に役立たねばならなかつたとしても、工業の近世的經營形式には更に一層完全に公益に相應する公法的秩序が何時の時に徒爾たるべし、と主張することを敢てし得る何人があるであらうか。否な已に多數の力は斯くの如き秩序を創造せんと、先づ以て自由なる國民的聯合の地盤の上に活動しつゝあるのである。此處に社會的權利義務の新分配の前提の準備をなし各個人を擁護しつゝ包括する社會の新組織が生まれ出た。然かもな吾人は此の

1) neuer Mittelstand

中に、從來よりも一層崇高なる人道も亦、其の地歩を占めるであらう事を疑はねばならぬものであらうか。

六 新聞業の起源

ドイツに於て科學的研究と大學教育との間に成立する密接なる結合は、見落さうとしても見落し得ない多くの光明の側面を有すると同時に、又大なる闇黒面をも有してゐる。此の闇黒面は大學教程の基礎を形作り得ざる如き範圍に屬する知識は、研究より忽諸に付せられると云ふ事より生ずるものにして、新聞業又この運命を免れることが出来ない。フランス、イギリスに於てはジャーナリズムの歴史は極めて豊富にして進歩せる文獻を示してゐるに反し、ドイツにては此の方面に就きて言ふに足るべき試みは、寥寥として指を屈するにすぎざる状態であり、此等二三の研究とても、此の現象全體を包括して、此の問題を取扱ひたるものに至つては、遂に一つをも數へることが出来ないのである。

〔一〕ナルツ著『ドイツ・ジャーナリズムの歴史』(Prutz, Geschichte des deutschen Journalismus) 第一卷、一八四五年、
ムンッ版。ウットケ著『ドイツに於ける雜誌及び輿論の起源』(Wuttke, Die deutschen Zeitschriften und die Entstehung
der öffentlichen Meinung) 第二版、一八四五年、ライプツヒ版。ザロモン著『ドイツ帝國の紀元よりその再興に至るまでのドイツ新聞史』(L. Salomon, Geschichte des deutschen Zeitungswesens von den ersten Anfängen bis zur Wiederaufrichtung
des Deutschen Reiches) 全三卷、一九〇〇—〇五年、オルテンブルク及びライプツヒ版。尙ほ『現代の文化』(Kultur der
Gegenwart) 第一部、第一卷(二版)五二二頁以下に於ける余が包括的敘述をも参照せよ。

斯かる事情の下にありて、今日まで閑却されたりしこの問題が、元來現在の學問上の學科の何れに屬すべきものなるかを究めることは益する所餘り多からざるを思ふものである。新聞業の如く、しかく複雑せる現象は之を極めて多方面より觀察してこそ、始めてその効果を期待し得べきである。即ち或は政治的・歴史的に、或は文學史的に、書史的に、或は法律的に、更に新聞文體の確否に關し各種の著書が述べてゐるが如く言語學的に、之が研究を爲し得るのである。さりながら其の何れにも増して最も身近かに此の問題が横はつてゐるものは、言ふまでもなく經濟學者である。蓋し新

聞は第一に交通施設にして、現代國民經濟の最も樞要なる保持機關の一を構成するものなるが故である。然るに今日經濟學教科書の中、否な狹義の交通業の教科書の中にさへ、新聞紙に關する一節を求めんとするも、それは遂に空しき徒勞に歸して仕舞ふであらう。事態斯くの如くにして、しかも新聞業の起源を簡明に取扱はんと敢てする余輩は、要するにただ不完全なる或るものを供し得るに過ぎず。而して此等の材料を各方面に於て汲み盡し來らんとするは、經濟的觀察方法の到底なし得ざる所なるが故に、正當なる世の期待を裏切らざるを得ないであらう事を最も多く自覺してゐる。

抑々新聞業の起源の問題は人が新聞なるものを如何に解釋するかによつて其の解答を異にするものである。今、十人の異つた人に「新聞とは何ぞ」と尋ねれば、多分十色の答を得るに相違ない。されど之に反して、近世の人類を社會の統一性に結び付ける精神的併びに物質的交互作用の大きな組織を作り出す手段は何物ぞとの間に對しては、郵便、鐵道、電信と相併んで、第一番にこの新聞紙を擧ぐるに長く躊躇するものはあるまい。

實際に新聞は近代的交通手段、即ち社會に於ける精神的併びに物質的貨財の交換を行はしめる施設の連鎖中の一環である。然れども郵便又は鐵道の如く、人間、貨財及び報知の運輸を行ふ交通手段には非ずして、報知が手記又は印刷によつてその創始者より離れ、そのみが單獨に傳達され得るやうになる事によつて、初めて運搬可能となる手紙及び回章の如き交通手段なのである。

手紙、回章及び新聞の間に存する區別は、今日にありては極めて大であるとは云へ、この三者は何れも報知傳達の必要より生じ、その必要を満さんが爲めに文書を用ゆるといふことより生じた本質的に同性質の産物なりと云ふ事に對しては甚しき異論なかるべしと信ず。唯だ其の異なるは、手紙は一個人に宛てたるもの、回章は多數の確定せる人々に宛てたるものなるに、新聞は多數の不定の人々に宛てたるものなりといふことだけである。換言すれば、手紙及び回章は

個人的報知傳達の手段にして、新聞は報知公布の手段である。

今日に於て吾人は勿論新聞なるものを規則正しく印刷され、短期間を以て定期的に發行されるものなりと云ふ様に普通考へて居る。然かれども此の二者は決して報知公布の手段としての新聞の本質的な特徴なりと目し得ない。かの有力なる近代的交通手段が生ずるに至れる源なる原始的新聞紙は印刷もされず、又定期的に發行されもしなかつたのであつて、寧ろ大いに手紙に類するものあり、否な殆んどそれと區別し得ざる程度のものなりしことは、後段に於てやがて明瞭になると思ふ。固より短期間を以て再發行されることは、報知公布の天性と認むべきは論なし。蓋し報知なるものは時間的貨財にして、その價值を有するはそれが新らしき間のみなるが故に、其れに清新といふ刺激を維持させ行かんが爲めには、その發表が事件に次ぎて直ちに行はねばならぬからである。さりと云へ、此の期間の週期性は、新聞業の小兒期に生じた限に於ては、報知輸送機會の週期性に依存したのであつて、決して新聞本來の性質と何等相關してゐるものに非ざることを見るであらう。

報知の規則正しき蒐集送致の發生には、公共的事物に對する空間的に弘く廣がれる興味、もしくは多數の經濟關係及び利害連結を有する比較的大なる交通範圍を前提條件とし、又はその兩者を同時に前提としつゝあるのである。然るに斯かる興味は人々が大なる國家組織によつて或る種の生活運命の共同に結合せらるゝに及びて始めて生じ來るものなるが故に、古代の都市共和國には新聞の必要なく、その公布の需要は一切傳令使及び其の時々の布告によつて滿されつゝあつたのである。然るにローマの統治權が地中海沿岸諸國の全體に及び、少くとも其等諸國がローマの勢力下に屬するに及んで、此處に初めて役人、徵稅請負人、其他業務上地方に赴いた支配階級の所屬員に首府に於ける最近の出來事を供給する手段の必要が生じて來た。茲に興味ある事柄は、ローマの軍國主義的獨裁君主制と中央集權制との創始者なり

しかのシーザーが新聞に似た最初の施設の開基者と見られるといふ其の事である。

(11) アンソール著『ローマに於ける新聞紙』(Teclere, Des journaux chez les Romains) 一八三八年、パリ版。リベールキ
 ユーン著『ローマ新聞紙論』(Tischerkin, De diurnis Romanorum actis) 一八四〇年。Zeitschr. f. Geschw. 第一卷、三
 ○三頁以下のシエニツタ筆『ローマの國家新聞事業』(A. Schmidt, Das Staatszeitungswesen der Römer)。¹⁾ ヴィル著『古代ロ
 ーマの新聞と、休暇に於けるドドゥル氏断片』(Zell, Über die Zeitungen der alten Römer und die Dotwellischen
 Fragmente in s. Verienschriften) 一頁以下、一〇九頁以下。²⁾ Fleckeisens Jahrb. f. Philol. Suppl. 第三卷、五六四頁以下のフ
 ユブネル筆『ローマ元老院及び人民の新聞紙に就いて』(Hübner, De senatus popularique Romani actis)。³⁾ ハイムツェ著『ロ
 ーマ官報断片の断片に就いて』(Heinze, De spuris diurnorum actorum fragmentis) 一八六〇年。グライフスワルト版。

余は此處に新聞に類する施設と云ふ。蓋しローマ人の間には、今日の意味での新聞業なるものなかりしが故である。
 モムゼンが『ローマの組織階級の新聞紙』といふ事を述べてゐるが、それは牽強なる近代化に過ぎぬ。シーザーが新た
 に行へるものは今日の吾人の間に見る新聞と見んよりは、寧ろ今日の政府の文書局が新聞記者に利用させつゝあるかの
 公示及び半官的政府公表に比すべきものであつた。故にシーザーに就きて云ふべくんば、彼が新聞業を創始したりと云
 はんよりは、寧ろ已に存在してゐた新聞に影響を與へたといふの優れるを覺ゆるものである。

シーザーの執政に先立つ餘程以前、地方に住めるローマ人の間にはローマに一名乃至數名の通信員を抱へ置きて、政
 治運動の成行及び日々の其他の出來事を手紙に認めて報告せしめる風習が特に生じてゐた。此の通信員は通例知識ある
 奴隸もしくは自由奴隸にして、首府の状態に精通し、又屢々多數の人の爲めに職業的通信に當つてゐたものもあつた。故
 に彼等は古代に於ける一種の報告者にして、今日のそれと異なる點は唯だ彼等が新聞企業の爲めに非ずして、直接その
 讀者に報告を致すと云ふことであつた。此等の報告者はそれ許りかその依托者の代請に基いて元老院會議に出席するの

1) Mommsen 2) „römisches Intelligenzblatt“

権利を有し居たりしものすら尠くなかつた。アントニウスは單に元老院の決議のみならず、元老院議員の演説及び投票
 に就いての報告をもなすべき一名の通信者を有し、ツイツェロは執政代としてその友人ツェリウスを通してクレスツス
 なる者の報告を得て居たが、その劍客試合、裁判所審理及び各種様々の都の小事件に關する報告には満足しるざりしが
 如く思はれる。かの例に見る如くに、彼の通信はたゞ事實の素材その儘の報告に止まり居たりしを以て、ツイツェロの
 書簡によつて知り得る如く、本來の政治的の輿論を報告するその黨友の手紙を以て其の足らざるを補ふ必要があつた。

今シーザーが此の施設に附け加へし新らしき事柄は何物なりしかと云へば、そは元老院の會議及びその決議に關する
 短かき議事録の公表及び國民議會の會議併びにその他重要な公共の出來事を公布せしめたことであつた。

その前者を *Acta senatus* と稱し、後者を *Acta diurna populi Romani* と呼んだのである。而してこの發表は石膏を
 塗布せる板上に文字を書いて行はれた。その板は公然設けられたものであるから、首府の住民に取つては、恰かも今
 日の揭示と同意味のものであつた。而して在外者の爲め多數の書記はそれを書き取つて、己が依托者に送致してゐた。
 然るにやがてその原文は官報に掲載せられるに至つたのである。

故に此のローマの官報はそれ自身より見れば、決して新聞とは云ひ得なかつたが、吾人の概念では容易に想像し難き
 程困難なりし當時の個人的地方通信設備に依つて新聞の如き意味を有することゝなつた。

Acta senatus の行はれしは餘り長き期間には非ずして、アウグストゥスは已に之を禁止したのである。然るに之に反
 して *Acta diurna populi Romani* はやがて普く行はるゝに至り、その内容は著しく擴張せられ、帝政時代の大部分を
 通じて繼續したのである。されど此の時代に至りては、いよ／＼一種の宮廷録事とも稱すべきものになり行きて、其の
 内容より云へば、今日ヨーロッパの多數首府の官報又は半官報がその讀者に報道してゐるものと酷似せるを見る。而し

てそは總じて事實の報告にのみ限られてゐて、時代の趨勢といふことに關しては、好ましからぬことには口を緘してゐたといふ程度でしか發表されてゐなかつた。而して此の記事が通信の方法によつて地方に報道されてゐたのは以前と異なる所がなかつた。故に地方にては、タチトウスの報ずる如く、官報に記載しあることのみには注意せずして、それに記されるざることを亦注意したのである。即ち言外の意味を悟り得たのである。斯くて此の全施設が何時まで繼續したりしかは吾人の知り得ざる所なるが、コンスタンチノールへの遷都後次第に衰へ行きしものと思はれる。

〔三〕 Acta diurna によく似た官報が支那人の間に行はれたのであつた(京報)。ホルト著『支那研究録』(Hirth, Chinese Studien) 二〇九頁以下。ナツアラ著『支那及び支那人』(Narara, China und die Chinesen) 八九一頁以下参照。

ローマ人に次ぎてヨーロッパの運命の鍵を握れるゲルマン民族はその文化の段階よりいふも、又その政治組織より云ふも、これに類したる報知事務の組織を維持するの能力なく、又それを維持するの必要をも有してゐなかつた。中世を通じて人間の生活は、政治的にも、社會的にも狭く閉鎖されてゐた範圍内に動き、文化の營みは寺院の内に潜みて、文化は何世紀の間、僅かに社會の上層に觸れ居たりしのみ。而して都市の狭き城壁を越えもしくは人々が屬してゐる支配權を超えて、人類を互ひに結合するが如き經濟的利害關係の存立を見るに至らなかつたのである。然るに時代移りて中世末となるに及び、再び大なる社會的關係が生じたのであり、その初めは寺院が神聖ローマ帝國の文化範域に屬する凡べての國々を包括する宗教政治を以て現はれ、次いで都市同盟及び共同の商業利害關係を有する市民階級が發現し、最後にはその反動として現世的の領地權が出現するに至つたのであつて、これが漸次渾然たる一大結合に到達するに至つたのである。斯くの如くにして十二世紀及び十三世紀に於ては、寺院、大學併びにその他の高僧の使者に報道事務及び信書送達の組織の最初の痕跡を認むるを得べく、十四世紀及び十五世紀に至りては、商業及び都市有司の信書交通の爲

め、殆ど郵便に類する大規模の都市使丁局の設備の出現を見るに至つたのである。而して此處に至りて、はじめて Zeitungs (新聞) てふ語を聞くに至つたのである。

此の Zeitung という語は、その初めは「現時に起れる事」¹⁾即ち現在の出來事と云ふ意味であつたけれども、後にはそれが斯かる出來事の報知、音信、報告、新報の意味に變じたのである。

此の語は特に、政治的時事の報知と云ふ意味に使用されてゐるのに接するのである。斯種の報知は市記録局が他の都市又はその都市に住む友好關係にある都市顧問役の個人から、手紙若くは其の追書として受取つたものであつて、今日なほ都市の記録中に殘されてゐる。即ちフランクフルト・アム・マインの都市記録中には十五世紀の頭初四十年間に於けるアルマニアック戦争^{〔譯者註〕}に關する百八十八通餘の書信を藏し、その大多數はアルサス及びスイスから來た諸都市の慘狀と求援とを報ずるものである。然しながら其の中にはセント・ヤーコプの戰に關する三つの記述があつて、それはチャーヒヒよりのが一つ、シュトラスブルクよりのが一つと、バーセルの市會よりのが一つ存してゐる。

〔四〕 フランクフルト・アム・マイン市歴史考古學協會 (Verein f. Gesch. und Altertumsk. zu Frankfurt a. M.) 一八七三年新年號中のウニケル (Wulker) 筆『アルマニアック戦争に關する記録——尙ほ次の節に就きては左記の書を参照せよ。アマン著『フランス新聞の政治史及び文學史』(Hatin, Histoire politique et littéraire de la presse en France) 一八五九—一八六一年、パリ版、第一卷、二八頁以下。アマン著『歴史的批判的フランス新聞史、附古代併びに近世に於ける新聞の發生及び發達に關する史的統計的研究』(Hatin, Bibliographie historique et critique de la presse périodique française, précédé d'un Essai historique et statistique sur la naissance et les progrès de la presse périodique dans les Deux Mondes) 一八六六年、パリ版、四七頁以下。ルベル著『フランス第一世よりルイ十四世に至る新聞及び小冊子の實狀』(Leber, De l'état réel de la presse et des pamphlets depuis François I jusqu'à Louis XIV) 一八三四年、パリ版。アレンキサンダー・アムドゥ

1) was in der Zeit geschieht

トース著『英國新聞史』(Alex. Andrews, The history of British Journalism) 一八五九年、ロンドン版、第一卷一二頁以降。
 オットイノリ著『イタリアに於ける定期新聞と書籍販賣併びに印刷業に就いて』(Ottino, La stampa periodica, il commercio dei libri e la tipografia in Italia) 一八七五年、ミラノ版。七頁。ブルック著『ドイツ新聞史』(Rob. Prutz, Geschichte des deutschen Journalismus) 一八四五年、ハノーヴァー版、第一卷。ウインクラー著『オーストリアに於ける定期新聞紙』(J. Winkler, Die periodische Presse Osterreichs) 一八四五年、ウィーン版、一九頁以下。グラスホッフ著『十六世紀の信書』(Grashoff, Die briefliche Zeitung des XVI Jahrhunderts) 一八七七年、ライプツィヒ版。Archiv für Post und Telegraphieverkehr 一八九五年號、三四七頁以下のシュタインハッセン (Steinhausen) の所説及び、同人著『ドイツ書簡史』(Geschichte des deutschen Briefes) 全三卷。

〔譯者註〕マニニマック戦争 (Armagnakenkrieg) は、一四一〇年來フランスのアルマニアック伯の黨とブルグント侯の黨との間に行はれた内亂に當り、皇帝フリードリッヒ三世の要求によりフランクのカール七世によつて無統制な備兵がスイス人に對して派遣された事によつて起つた。スイス人はセント・ヤコブの戦で敵を破つて國を護ることが出来、一四四四年十月廿八日にエンガスハイムの媾和が成つた。

斯かる報知送達は自由意志的のもので、相互的關係に基けるものである。即ちそれは貴族及び領地權に反抗して諸都市を結び付けた共同の利害關係より生じたものにして、規則正しきコースを取つて高地ドイツと低地ドイツとを結合してゐるかの多數都市所屬使者(即ち常規使者)によつて實際上支持されてゐたのである。

十五世紀に於ては夫れに類する手紙による報知交換が、貴族、諸侯、政治家、大學教授の間に行はれたのに接するのであるが、其の最も盛んなりしはかの宗教改革時代であつた。而して此處に至りては、手紙にその表題として *Novissima*, *Tidings*, *New-Zeitung*, *Avise* 等の文字を附記し、若しくは別紙として添附する事がハイカラな事となつてゐる。斯くて人々がたゞ偶然の動機で以て、時代の窮乏困苦の状態を相互に通信し合ふのみならず、更に報知を計画的に蒐集すると

1) Ordinari-Boten

いふ點にまで進んで居た有様を已に認めるのである。殊に大なる交通中心地、商業都市、使者通路の結集點及び學府は世界中から報知が輻湊し來るのであり、此處にて其等を集めて編輯し、手紙又はその添書としてこれを各方面へ送達することとなつた。而してこの書かれた報知は一般に *Zeitung* 又は *neue Zeitung* の名を冠せらるゝに至つたのである。

〔譯者註〕*Novissima* は「最近事」、*Tidings* は「最新事件」、*New-Zeitung* は「新事件」、*Avise* は「報知」の意。

此の通信の大部分は個人的性質のものにして、政治的宗教的事件の中心點に住める人々は己が許に蟻集し來れる報知を相互に知らせ合つてゐた。それは實に相互間の贈答にして、頻繁に通信を得つゝある人々はその新しい事件の報知を異つた多數の人々に宛てた手紙に添へんが爲めにこれを複寫させ、又これを受取つた人々はそれを寫し取つて更に各方面へ通知し、または之れをその知人間に回覽させる事は少しも差支へなかつたのである。諸侯は又己に主なる交通地に專屬の有給通信員を有し、又はある特別の場合には、重要な出來事の現場へそれを派遣してゐたのである。

斯種の手記の新聞は、その初めに於ては、國民の間には入り込まないのであつて、それが目指した範圍は、(一) 王侯、政治家併びに市參事會員、(二) 大學教授併びにそれに近き學校及び教會の公務に従事してゐる人々、及び(三) 大商人であつた。

宗教改革者及びヒューマニストは殆んど凡てが、熱心なる新聞通信員にして、同時に新聞報告の規則正しき受信者であつた。殊にメラニヒトン¹⁾はそのドイツ併びに近隣諸邦の凡ての地方との無數の連絡によつて、絶えず新らしい報知を豊富に得、これを又己が友人、殊に各地の王侯に送つてゐた。彼と比べると、ルッター²⁾とツウイングリー³⁾との書簡はこれに類した材料には比較的乏しい。然しシュトラスブルクの人ヨハン・シュトゥルム⁴⁾とヤコブ・シュトゥルム⁵⁾、ブツェル⁶⁾、カピト⁷⁾、バーゼルの人オエコラムバディウス⁸⁾、ベアトウス・レナーヌス⁹⁾、アウグスブルクの人ヘッツェル¹⁰⁾、ウ

1) Melanchthon 2) Luther 3) Zwingli 4) Johann Sturm 5) Jakob Sturm
 6) Bucer 7) Capito 8) Oecolampadius 9) Beatus Rhenanus 10) Hätzer

ルバームス・レギウス¹⁾、ニュルンベルクのバウムガルトネル²⁾其他ヨアーヒム・カメラリーウス³⁾、ブーゲンハーゲン⁴⁾等は何れも皆この通信の範囲に非常に熱心に働いてゐた。

其の報知の出所は極めて多種多様にして、友人の口頭又は手記の報知の外、なほ種々あつたのである。即ち旅から来た商人、殊にフランクフルトの歳市を訪れた木屋の物語、文書飛脚の話、戰場より歸還せる傭兵の報告、漫遊外人及び賓客の話、殊にドイツの大學に入る爲めに外國より來れる學生の話及び他の宮廷より偶然派遣されし使者から、又高位高官者の書記官、祕書官、代理人より得たる話等であつた。

斯くの如くに其の折々に集められたる口頭の報知には、その價值に非常なる差等あるは論ずるの要なき所にして、これを更に各方面に送達した新聞通信員によつて、それが始めて編輯上の批判を受けねばならなかつた。其等報知にて遙かに重要なものはかの手紙によつて得た報知であつて、今日かのメランヒトンの書簡集を手にして、其の報知の出處を探究せば興味深きものあるべしと思ふ。

〔五〕 グラスホフ著前掲書、二三頁以下による。

而して吾人が直ちに認めることは各種の報知に對して、夫々一定の集積點が多數にあつたことである。當時興味の前面に据ゑられて居たものは東方問題、即ちトルコ民族による中部歐洲諸國の威嚇であつた。而して此のトルコ民族との戰爭の報知は或はハンガリーよりウィーン、クラカウ、又はプレスラウを経、或はコンスタンチノーブルより海路によりヴェニスを経て齎らされしが、その報知者の多くは新教に荷擔せる僧侶であつた。

南方の諸國の有様に就きては報知がローマ、ヴェニス、ジェノアより來、又よくバドゥア、ボロニア出身の學識ある友人の許からも來た。フランス及びスペインよりの通信はリオン、ジェノア、シュトラスブルクを経て來、イギリス、

1) Urbanus Rhegius 2) Baumgartner
3) Joachim Camerarius 4) Bugenhagen

ネザーランドよりのアントワープ、キョルンを経、北方諸國よりのブレーメン、ハンブルク、リュベックを経由し、北東よりの音信はキューニヒスベルク、リガを越えて到着したのである。

ドイツ内地にありてはニュルンベルクが此等の報知の主要集積點であつた。これ一は國の中央に位しるたりしによれが、更に一は廣き商業結合を有するたりしに職由せずんば非ず。故に世界貿易の趨勢を確實且精細に知らんと欲する者は、ニュルンベルクに或は手紙にて照會し、或は使者を派遣して之れを質したのであつた。プロイセンのアルブレヒト王、デンマルクのクリスチアン三世の如き王侯は、其の地に常設の通信員を有し、其の地に到着せる新聞を蒐集して、之を報告せしめつゝあつたのである。而して市の吏員、參事會員又は聲望ある商人等にして此の役に當れるもの決して珍らししなかつた。ニュルンベルクの外尙ほ注意を惹いたものに、フランクフルト、アウグスブルク、レーゲンスブルク、ウォルムス及びシユバイエルがある。

メランヒトンが此等各種の出所より寄せ集めた新聞は單純な歴史的報知であつて、それは如何にも何等の批判をも加へずして擇び出したものではなかつたが、其れには政治的種類の論議は極めて稀にして、種々雜多の不平、恐怖、願望、希望が甚だ多く點綴されてゐたのである。皇室、方々の戰場、宗教改革の經過等に關する重要な報知の外に、當時の人々の極めて素朴にして輕信なりしことを反映するものをも發見し得る。即ち政治的豫言、自然の驚異、畸形兒、地震、血の雨、彗星、その他の天變がそれであつた。

然るに十六世紀の後半に至りては、此の種の報知媒介が規則的形式と職業的組織とを取るに至つたのである。然かもそれはドイツに於けるのみならず、イタリヤに於てはなほ幾分それよりも早く、殊にヴェニス及びローマに生じた様に思はれるのである。

ヴェニスをはじめて近世的意味の新聞を発見した場所なりと、長い間言はれてゐる。その證左としてラテン民族の間に殆んど一般的に弘まつてゐる新聞に對する *gazetta*, *gazette* といふ呼稱は一番早くヴェニスに、然かもそれが小貨幣の名となつて發見されると云ふ事を説くものがある。さりながら余は此處に、貨幣の名より新聞の名が由來したといふが如き、それ自身不確からしき事柄を證せんとするやうな一部分可なりに冒險な物語に深入りしようとは欲しないのである。

〔六〕アマン著『定期新聞史』(Hatin, *Bibliographie de la presse périodique*) 四七頁、參照。

然れども、前述の如く新聞業がヴェニスに於て第一着に職業的完成を遂ぐるに至つたとの推測には、それ自身極めて多くのこれを證するものがある。東西兩洋交通の媒介者として、近世的意味の公使制度と政治的通報事務を組織せる政府の所在地として、此の古き水の都は自ら、知れる限りの世界の各國より重要な報知の流れ寄る集積地を形作つたのである。マルクス圖書館長ヴァレンティネリ¹⁾の研究によれば、已に早く十五世紀に於てヴェニスの市會は、或はその共和國內に起れる出來事、或は公使・領事・官吏・船長・商人等より報告されたる事件に關する報知の蒐集を作らせ、國際事件の成行を即刻知らしめんが爲め、それを回覽飛報によつて外國に駐割せる使節に送らせてゐた。而して此の報告集を呼んで *Togli Davvisi* と云つて居た。然るに後世に至つて此の公の報告集より抜き書きを作ることゝなつた。固よりそれは多數民衆の間に弘布せんが爲めのものに非ざりしは明らかであつて、たゞヴェニスの名望家の爲めにのみ行はれたのである。彼等は夫れによつて自己の商業上の作戦に多大の便益を得ることが出來たが、又他國に於ける商賣仲間に手紙にてそれを通知してゐたのである。

此のやうに業務通信に政治的報知を附加し、又は特別の紙にそれを記せしものを添加することは、やがてアウグスア

1) Markus-Bibliothek

2) Valentinelli

ルク、ニュルンベルク及び其他のドイツ都市の大商人の間にも同じやうに行はれるに至つた。かくて漸く特別の人々が此の報知を蒐集し、これを手紙となして送達することを營利の源となさんと考へ付くに至つたのである。十六世紀にはヴェニスのリアルト橋上には兩替店と貴金屬鋳店との間に一種獨得の商業的通報局が設けられ、政治的報知、商業報知、出入船舶の報知、物價、道路の安全、政治的事件の報知を蒐集して、これを書き抜いて志望者に販賣することを商賣とするに至つたのである。そののみか、それは遂に *scrittori davisii* と稱する纏つた組合を作ることゝなつたが、やがてローマにも同種の人々現はれて *novellanti* 又は *gazettanti* と呼ばれてゐた。然るにローマに於ては彼等の行動は法王廳の憎む所となつた。蓋し一は彼等が不都合なる事實を弘めたりしにもよるべけんも、又一はその事實に彼等自身の判断を附加したりし爲めにもよるのであつた。斯くて一五七二年には、彼等に對し二つ餘りの法王の諭令布達せられ(ピウス五世とグレゴール十三世)、新聞を書くことは彼等に嚴禁せられ、もしそれを續行するものあらば、烙印の刑及び刑擽船服役刑を以て臨まれたのである。然れどもそれにも拘らず尙ほ引續き、ローマより上部イタリアの諸市及びドイツへの通信事務の多數に行はれたりし痕跡を認め得るのである。

〔七〕ブルツ著『新聞史』(Pritz, *Gesch. des Journalismus*) 第一卷、二二二頁による。

斯かる間にドイツに於ても亦新聞を書くことが一個の營業となつて、これは當時の交通狀況にとつては驚異すべしと云ひ得る程の獨得の組織を取るに至つたのである。此の組織は一方では使者通路の遠く延長したることゝ、他方ではマキシミアン皇帝によつて塊領ネザラントより首府ウィーンへの郵便が設置せられ、よつて以て規則正しく報知を得ることの非常に容易になつたことゝが大いに與つて力あるを見るのである。斯くの如くにして十六世紀後半に於ては各所に獨得の通信局なるもの起り、報知を集めてはそれを其の豫約者に手紙もて通知することゝなつた。斯かる手紙の形

式をとれる新聞の彙集の多數が今日尙ほ保存されつゝあるが、就中一五八二年より一五九一年に至る一彙集はワイマール大公國圖書館に、十六世紀の八十年代及び九十年代のもの二つはライプチヒの大學圖書館に現存するのである。

〔七〕 Archiv für die Gesch. des deutschen Buchhandels 誌、第三卷（一八七五年）中のオハル筆『ドイツ新聞紙の起源』(Jul. Opel, Die Anfänge der deutschen Zeitungspressen) 参照。

此處に少しくライプチヒ彙集中最も古き年次を取扱ふを許し給へ。それには次のやうな表題が記されてゐる。
Neuzeitung soll dero von Kornbergk von dem 26. Octobris Anno 87 bis auff den 26. Octobris Anno 88 einkommen. (八十七年十月廿六日より八十八年十月廿六日迄に到着せるニュルンベルクよりの最近情報)

其れに續きて、毎週規則正しく或はローマ、ヴェニスより、或はアントワープ、キヨルンよりニュルンベルクの商店「ライネル・フォルクハルト・ウント・フロリアン・フォン・デル・ブルック」の帳場に着し、其處より直接又は特別の發行人の手を経て更に先きへと報知されし通信の拔書が夫々獨立に纏められてある。本彙集の受取人は多分ライプチヒの陪審裁判所書記長ルードウィヒ・トリューブといふ人であつたらしい。

ローマの通信は通常ヴェニスのよりも六日早き日附を有し、アントワープのはキヨルンのより五日丈け早い。これ等の四つの土地は皆イタリア及びネザールランドよりドイツへの大郵便路に横たはつてゐたのである。斯くの如き規則正しき通信の外に、臨時に来るものも時々あるのであつて、即ちブラーク、プレスラウより來るものあり、就中フランクフルト・アム・マインよりの通信には屢々接することが出來た。

今此の通信の内容を仔細に調べて見ると、それ等はローマ、ヴェニス、アントワープ等にて起れる事件を取扱ふものには非ずして、此等の地で集められた報知を扱つてゐるといふ事が直ちに解るのである。それに依つてアントワープ通

1) Reiner Volckhardt und Florian von der Bruckh 2) Ludwig Trüb

信は皆にネザールランドの報知のみに止まらずして、フランス、イギリス、デンマークより來れるものも含み、ローマよりの通信はイタリアのことに關する以外、スペイン、フランスの出來事を報じ、ヴェニスより來れるものによりては近東の事件を知ることが出來た。而して報知の調子は客觀的冷靜にして且つ事務的で、報ずる所は政治的通信が主となり、商業、交通の報は甚だ稀であり、當時嬉ばれるたりし奇蹟、妖怪の物語には殆んど接することを得ないのである。而してかの四つの大集積地點に於ける通信事務は如何に組織され居たりしか。何人がその蒐集者であり、又その仲介者であつたか。如何にしてその報酬を得たりしか。如何なる根拠より彼等はその材料を得たりしか。悲しい哉、吾人は此等の質問に對してたゞその一小部分に答へ得るのみ。

先づ、その通信の編輯者がその材料を得て居た根拠は何處に在りやといふに、そは時には最近着の郵便により、或は正規の使者通信(常規使者)に依つてゐたのである。故に一五九一年二月二十八日のキヨルン通信には『オランダ、ベルギー、從つて又外國の營舎よりの書信未だ到着せず』といふ如き文句を記し、一五九〇年二月十七日のローマ通信には、その地の郵便局長は法王に對して毎週必ず一回郵便をリヨンに送返する義務を負ふことになつた事を報じ、その終りに『かくて我々は毎週フランスよりの報道に接するを得べし』と敍べてゐる。

それ以上はこの彙集そのものから調べべきものがない。然しそれと同時に多くのドイツの都市に於て新しい事件を營業的に編輯し送達することに當つてゐたものは主に都市附屬の飛脚頭及び帝室郵便局長であつたといふことを認めるのであるから、報知蒐集は當時の通信運輸設備と極めて密接に結び付いて實行されたりしものならんとの推測は其の確實性を大いに増すこととなるのである。惟ふに、飛脚頭や郵便局長等は己が個人的顧客に供給せんが爲めに、己が集めた報知を規則的に相互交換し合つてゐたものらしく思はれる。然れども此の全事項はなほ一層精細なる研究を必要と

する。

【九】シュタインハウゼン (Steinhäuser) は Archiv f. Post und Tel. 誌、一八九五年號、三五五頁に此等の關係に就きて極めて適切な透徹した推測を発表してゐる。

されど大商業と新聞業との關係に至りては、少しく之を明らかにすることが出来る。上述のニュルンベルクの商人の如く、個々の大商店は他の土地にありても自力で通信事務を組織してゐた。その中殊に有名なりしはウエルゼル家とフッガー家²⁾にして、その通信はかのニュルンベルクと共に、ニュルンベルクの法律學者クリストフ・シヨイル³⁾の有名な書簡集中に発見し得るのである。十六世紀後半に至りては、フッガー家は世界各地より自分の許に到着する報知を蒐集帳に纏めさせて居たが、その中の一五六八年—一六〇四年の分二十八部がウィーン帝室圖書館に所藏されてゐる。其處に綴ぢ込まれてある計算書には、アウグスブルクの市民にして新聞記者イエレミアス・クラッセル⁴⁾の名が記されてゐる。クラッセルは自分の新聞に年二十五フロレンを取り、常刊新聞、即ち規則的に發行された號だけなれば十四フロレンで供給してゐたが、最新記事を載せた附録(臨時新聞)は唯だ一部賣で全紙一枚に對し四クローツェルで販賣してゐたのである。彼はアウグスブルク及び其の近郊に住む他の紳士方にも通信を供給してゐると記してゐる。其他の新聞事件報道の書簡の送達者も亦、クラッセルと似た立場にあつた事であらう。之れに反して、此のウィーンの蒐集品の中にフッガー家から發行された手記の新聞の全年次があると思ふものあらば、それは誤である。

【一〇】ヴォーテン、クナーク共編、『クリストフ・シヨイル書簡集』(宗教改革及び當時の歴史論考) (Christoph Scheurl's Briefbuch, ein Beitrag zur Geschichte der Reformation und ihrer Zeit, herausgegeben von Sweden und Knauke) 一八六七—一七二年ボツタム版。

1) Welser 2) Fugger 3) Christoph Scheurl 4) Jeremias Krasser
5) Ordinari-Zeitungen 6) Extraordinari-Zeitungen

【一一】フメル著『ウィーン帝室圖書館手記』(Chmel, Die Handschriften der k. k. Hofbibliothek in Wien) (一八四〇年) 第一卷、三四七頁以降。

【一二】Athenaeum Français 誌、一八五四年號八二八頁のツッヒェルの所論。

フッガーの新聞は、歐洲各地方及び近東よりの通信を規則的に收めてゐるのみならず、更にそれを越えてベルシャ、支那、日本、アメリカよりの報知さへ含んでゐる。政治上の通信以外、收穫報告や價格表が屢々掲げられ、間々廣告に類した知らせや、ウィーンの商館の長い目録(目下ウィーンでは色々の物を何處でどうして買入れることが出来るかといふこと)さへ掲載されることもあつた。而已ならず文學的通信も現はれ、新刊の名著の紹介をなし、新らしき劇の上場をさへも報告してゐたのである。

アウグスブルクと同様に、ドイツの他地方にも通報者の居るあつて、王侯や都市の爲めに新聞書きをやつてゐた。即ち一六〇九年にはザクセン選帝侯クリスティアン二世はウルムに住むヨハン・ルードルフ・ヒンガー・フォン・バルツハイム¹⁾と契約を結び、ヒンガーは年酬百フロレンを得て、スイス、フランス及び言ふまでもなくシユワーベン²⁾の出來事を侯に報知することとなつてゐた。一六一三年にはブラークに居るハンス・ツァイドラー³⁾は、それと同様の役目でザクセンの宮廷より年俸三百フロレンと、報知蒐集の際に使つた前拂金の代償として三千三百九十九ターレル六グランを受取つた。丁度其の頃公爵僧正フォン・バムベルクはニュルンベルクのグーデル博士より二十フロレンの報酬にて新聞を送らせてゐたのである。一六二五年にはハルレ市はライプチヒの通信記者ヒエロニムス・トイトルン⁴⁾に一季一シヨック八グランを支拂ひ居り、一六六二年に至りても尙ほデリツチュの市會は一ライプチヒ新聞通信社に一季二ターレルにて通信送附の豫約をしてゐた。郵便局長飛脚頭等はこの遙かに割のいい仕事に對して、その本職よりも却つてよき報

1) Avisenschreiber (Zeitunger, Novellisten)
2) Kurfürst Christian II. 3) John. Rudolf Chinger von Balzheim
4) Hans Zeidler 5) Dr. Gugel 6) Hieronymus Teuthorn

酬を得たりしものらしく、一六一五年フランクフルトの郵便局長ヨハン・フォン・デル・ビルグデン¹⁾は多数のドイツ諸侯に通信をなしつゝありしが、マインツ選帝侯の宮廷よりは新聞を毎週送達する報酬として年六十フロレン宛を受けてゐた。

- [一二] ウィットツレーベン著『ドイツ新聞史』(C. D. v. Witzleben, Geschichte der Leipziger Zeitung) 一八六〇年、ライプチヒ版、五頁以下。一六二九年にはザクセン宮廷は斯かる新聞代理人をウィーン、ベルリン、アラウンシュタット、アウグスブルク、ウルム、プレスラウ、ハンブルク、リュベック、ブライク、アムステルダム、ハーグ及びハンガリーに有してゐた。
- [一三] オベル著前掲書、二八、六六頁。
- [一四] フォウエルハーメル筆『フランクフルト・アム・マインに於ける郵便史』(Faulhaber, Geschichte der Post in Frankfurt a. M.) (Archiv f. Frankf. Gesch. und Kunst. 第十號) 三一頁、四〇頁以下。

然かも此の手記の新聞は十七世紀に入りても、なほ廣い範圍へと滲透してはゐなかつたものと思はれる。蓋しそは一般にとりてはなほ高價すぎたのである。

ドイツ、イタリアに於けるが如く、フランス、イギリスに於ても十六世紀末及び十七世紀にはこの手記の新聞行はれ、フランスにてはそれを *Novvelles à la main* といひ、イギリスに於ては *News Letters* と呼んでゐた。然れども此の兩國にてはそは首府獨得の現象であつた。

就中最も興味あるはパリに於ける發達にして、實に其處には、手記の新聞に先立てる獨自の原始新聞とも稱すべきものありしを見る。そは即ち説話又は口述新聞とも稱すべきものであつた。

- [一五] アタン著『フランス新聞史』(Hatin, Histoire de la presse en France) 第一卷、三二頁以下。

1) Johann von der Birghden

十六七世紀の世間が擾がしかりし時代に於ては、毎夜、街の角、ボントノエツフの橋上、廣場等にパリ市民の大群が集まつて、其の日々の新らしき出來事を齎らしては、これをとや角と評し合つたものである。而してこの人々の間には、かゝる新らしき噂を集めてそれを又他の人々に話し聞かせる玄人が少しは居たことも容易に考へ得られる所であると思ふ。かくて漸く組織が物になつて來、所謂 *Novvelles* なるものが例會を催して、其の得たる報告を相互に交換し、或はそれに註釋を加へ、或はこれを政治化し、或はこれを計畫の材料となすに至つた。當時の作家は無盡の諷刺もて此の社會を取扱つて居り、喜劇作家はこれを以て結構な材料となし、モンテスキューの如きさへ彼の *Lettres Persanes* 中の最も華々しき一つをその爲めに捧げた有様であつた。

- [十六] 「全集」一八五七年、パリ版、八七頁、第一三〇篇。

然るに其の初めにありては單に新らしき物好きの人や閑人の道樂たるに過ぎざりしもの、それがやがて投機的な人の營業となつた。此の人達は位階あり名望ある人々に規則的に新事件を送聞する役目に當ることゝなつた。斯くて紳士とも云はるゝ人は、恰も理髮師、仕立屋等を抱へ置けると同じく、この *Novvelles* を一人宛は備つてゐた。例へばマザリン大公の如きは月々此のやうな通報員に十ルーブルを支拂つてゐたのである。

間も無く此の記者社會は地方の顧客をも求めんとし始めたのである。固よりそれ等が唯だ手記の通信に限られてゐたことは言ふまでもない。此の記者社會は夫々に各自特殊の編輯謄寫局を有し、宮廷及び政府の通信に就きては、其等を手に入るべき各自獨得の源を握つてゐた。豫約者は毎週通信を望むだけの頁數に應じて定められてある定額を支拂ふことゝなつてゐた。これ實にかの有名なる *Novvelles à la main* の起源にして、政府よりは幾度となく迫害を蒙りながら、しかも尙ほ十八世紀の終頃まで持續し來れるものにして、その一部は遠く外國へ迄も發送されてゐたのであつた。而し

て彼等が印刷せる新聞紙と相併んで能くその存立を維持し來りし所以のものは、これ主として一は政府の秘密保持主義をして幾度か惑亂せしめたりしこと、一は公的状態の批評をも亦幾度か敢てし得たりしことにあつたのである。

〔一七〕此の種の新聞の内容の見本は、『一七一五年一月より一七一九年六月に至る攝政時代に關する報告』(從來公開せざりしハノーヴァー立圖書館蔵書によるバーテニミー伯の著述) (Gazette de la Régence, Janvier 1715—Juin 1719, Publiée d'après le manuscrit inédit conservé à la Bibliothèque royale de La Haye par Le Comte E. de Barthélemy) 一八八七年、パリ版にある。

〔一八〕ウィーン、ベルリンにても同様であつた。ウィンクレン著『オーストリアの定期新聞』(Joh. Winckler, Die periodische Presse Oesterreichs) 一八七五年、ウィーン版、二八頁以下。フリードレンデル著『ドイツ歴史協會誌』(F. Friedländer, Schr. d. Ver. f. d. Gesch. Berlins 1901)

イギリスに於ても、主に地方貴族に首府に關すること、宮廷に就きての報道をなしたりし News Letters は十八世紀の餘程後まで持續されてゐたのである。嘗に持續されてゐたといふのみならず、當時の印刷せる新聞紙が、却つて斯かる設備の存立を次の如き理由によつて一層容易ならしめてゐた。即ちそれは當時の印刷せる新聞紙は二頁に印刷して、他の二頁はこれを白紙の儘にて残されたりしが故に、豫約者はこの白紙の面への手記の書き足しをなして送達すべきを希望したりしによるのである。

〔一九〕尙ほ此の詳細に就きては、アンドリュース著『英國新聞業史』(Andrews, The History of British Journalism) 第一卷一四頁以下。アタン著前掲書、五一頁。シュワルツコップ著『新聞に就いて』(Joseph von Schwarzkopf, Über Zeitungen) 一七九五年、フランクフルト・アム・マイン版の九頁には、ドイツに於ても亦、内容形式より云へば手記の新聞と稱すべきものが(マインツ、レーゲンスブルクに於ける)その申込人の數の多き爲め、時々印刷の助けを藉りたものがあつたと述べてゐる。彼はその外に秘密の内地通信を掲載した新聞紙を發送し出した場所としてウィーン、ミュンヘン、ベルリン、ハノーヴァー

を擧げてゐる。

是に因つて乃ち知る、ヨーロッパの凡べての文明國に於ては、殆んど同時に——勿論なほ餘程制約はされてゐたとは云へ、——報知公表手段として手記の新聞が発生し、二世紀以上にも涉つて能く繼續されて居たことを。然るにこれに就き最も顯著なる事項は、此の手記の新聞紙の營業的作製が印刷術發明以後に至るも、何處に於ても驅逐されざるといふその事である。觀來れば茲に、何故人々が印刷機を規則的報知公表の用役に供せざりしかと云ふ疑問が自ら生ぜざるを得ないであらう。

此の疑問に答ふべく簡單に次の如き事實を以てすることが出来る。即ちその本國に於て已に印刷せる新聞紙に慣れるたる歐洲人の新植民諸國にありても亦、印刷新聞に先立つて手記新聞が行はれると云ふ事實之である。北米合衆國に於ては十八世紀の初期には斯くの如く、西部オーストラリア植民地に於ては、一八三〇年に至つてもなほ然りであつた。此の事實は、報知公表に印刷機を使用することを久しき間阻礙してゐたものは檢閲の壓迫なりと云はんよりも、寧ろ印刷費を償ふに足る販路を保證するに十分な讀者社會に缺けてゐたと云ふことに存するものなることを證するものである。

〔二〇〕ハドソン著『一千六百九十年より一千八百三十年に至る合衆國新聞業』(Frederic Hudson, Journalism in the United States from 1690 to 1830) 一八九三年、ニューヨーク版、五一頁以下。

〔二一〕アンドリュース著前掲書、三一二頁以下。

成る程、かの手記の新聞中の或る報知にして、それが廣き範圍の興味に訴へ得る如きものに就きては、已に十五世紀の末葉以降之を印刷に附してゐた。それは大抵四一八の四折紙の片面刷にして、Newe Zeitung の名にて投機的出版者の

手に發行され、歳市又は市場にて販賣されたのである。其の合冊は今何れの古き圖書館にも存してゐる。この今日までに發見されたもの、中最も古きはアウグスブルク發行の一四八二年のトルコ戦争の報知と、パリに居つた一ドイツ印刷人の手にてフランス語で印刷されし一四八五年カール八世のルアンヌ行幸に關する報知である。それに次ぐは一四八八年の一ドイツ通信である。それより十六世紀の全汎を通じて、その事行はれしが、十七世紀に入るや、定期刊行の印刷新聞紙が現はれるに至り、漸く衰微し行きて、遂に十八世紀に入り全く其の姿を止めざるに至つたのである。其の最も古きものは或は全くその標題を缺き、或はこれを有するもその記事内容中の著しきものをとりて其の標題としてゐた。 Zeitung てふ名がかゝる印刷速報紙に命ぜらるゝに至りしは實に一五〇五年のことであつた。 Zeitung の外なほ種々の命名あり、例へば Brief (「手書」) Relation (「知事」) Mär (「市場」) Nachricht (「報知」) Beschreibung (「記述」) Bericht (「報告」) Historie (「史記」) Aviso (「報警」) Post (「郵便」) Postillon (「郵便車」) Kurier (「報知」) Fama (「傳言」) Depesche (「電報」) Follisen (「狂言」) — 種々なる形容詞を附せるもの又珍らしからざらば、 Umständliche Nachricht (「詳報」) Warhafftige und eigenliche Beschreibung (「確實なる」) Wolbedenkliche Beschreibung (「周到なる」) Warhafftige Relation (「確實」) Vberschlag und Inhalt (「概観と要」) Historischer Discurs und ausführliche Erklärung (「史的論説」) 又よへ Neue und warhafftige Zeitung (「新」) Warhafftige und erschrockenliche Zeitung (「確實なる」) Wunderbarliche, erschreckliche und erbärmliche Zeitung (「悲むべき新聞」) など呼ぶものもあつた。イタリアには、 Relatione (「知事」) Vera Relatione (「真報」) Relazione perfetta e veridica (「真報」) 非ランヌには Discours (「説述」) Memorable discours (「可記」) Nouvelle (「新事件」) Récit (「記述」) Courier (「報知」) Messenger (「使者」) Postillon (「郵便車」) Mercure (「水銀」) 等、又イギリスには News (「報知」) Newe News (「新」) Thining (「消息」) Woful News (「喜ばしき」) Wonderful and strange News (「驚くべき」) Lamentable News (「悼すべき」) 等と呼んで居たのである。

[111] ウェルラー著『ドイツ最初の新聞』(Waller, Die ersten deutschen Zeitungen) [Bibliothek des literarischen Vereins

1. 六一卷] には之を書史的に取扱つてゐる。尙ほその補遺は「ゲルマニア」(Germania) 二六卷、一〇六頁にあり。

斯くの如き有様にして、その標題は廣告式であり、大道商人的である。而してその内容とはいへば種々雑多にして、王侯の着御、戴冠、婚儀、葬祭及び戦争、殊に都市、城塞の攻圍陥落、處刑、殺人、疫病、火難、水害、天の奇瑞、惡魔話、怪談等があつた。然れどもその大多數は政治的報知にして、考察論證は一般に餘り現はれなかつたのである。假令それを掲ぐることもあるも、道德的利用にのみ限られてゐた。而して各種雑多なる事件に關しての多數の報知が同一紙上に纏めて記される時は、その標題が Zwei (drey usw.) neue Zeitung (「二(三)の報」) Le quattro relationi (「四の報」) 等となるのである。手記の通信文は印刷機にかけた此の新聞紙の唯一の源なりとは云ひ得べからずとするも、尙ほそれが主なる源となりたるは否むべからず。各報は普通夫々獨立して居り、十六世紀末には各自獨立して、戦争攻圍等の長時間の出來事に際しては多くの號數を續刊してゐたのである。然かもその時代には尙ほ未だ定期發行てふことには考へ及ばなかつた。中には押韻せる文體を取りしものも決して珍らしからずして、その中實際「歴史的民謡」となりて、周知の諧調で語はれしものも尠なくなかつた。論難文、宗教的考察、官廳布告等は新しい新聞の形式を取つてゐる。斯くて此種の新聞紙は、その形式よりも亦その内容よりも、定期的に發行される本來の印刷新聞紙の爲めはその荊棘を拓けるものといふべく、更に時代進みて、かの詰らぬ抹香臭き教會趣味を越えたる實世間の出來事に對し世間一般の興味を覺醒し來るや、又一層然りであつたのである。

印刷せる定期報知集の嚆矢は已に十六世紀にある。しかもそれは年刊にして、各種各様の名稱 [Historischer Kern

【「史的」】Chronika (「歴史」)の下に比較的長い期間の政治的出来事を集成し、或は所謂 Postreuter (「郵便」)として、
【「史的」】現今の國民曆の政治要覽と比し得べきものであつた。

【二三】ブルック著前掲書に據れば、それは已に十六世紀の中葉に生まれたものであるといふ。

其れに次ぎて現れしは、半年發行の報知集にして、所謂 Relationes semestralis (「半年報」)又は Messrelationen (「談市報」)と呼ばれたものである。此等は十六世紀の八十年代にミヒアエル・フォン・アイチング¹⁾によつて創設されしものにして、主に定期の郵便又は商人の齎らす報道より種を取り、二世紀以上も引き續いて、フランクフルトの春秋の市の主なる賣物の一となつてゐるが、間もなく又ライプチヒの市にも現はれることゝなつた。吾人の知る限りの一番最初の印刷週刊新聞は一六〇九年アウグスブルクとシュトラスブルクとに於て發行された。そのシュトラスブルク新聞の一六〇九年號はハイデルベルク大學圖書館にあり、其の後の年次の殘部はチューリッヒの市有圖書館に保存されてゐる。アウグスブルクの新聞の一六〇九年及び一六一〇年號はハノーヴァーの王立圖書館の所蔵にかゝる。此の兩種の新聞は内容より云ふも、外形より見るも、かの毎週郵便が通信交通の主要集積地より齎らし來れる手記の常規通信と極めてよく似た所がある。扱て一度斯かる週刊新聞生るれば、その聲に倣ふものゝ直ちに生ずるは理の當然にして、殊に三十年戦争が始まりてよりは、非常なる勢を以て印刷週刊紙の數の増加を見るに至つたのである。かくて十七世紀の二十年代及び三十年代には、ドイツの諸都市に於て、殆んどその二ダースを數ふる盛況に達したのである。その企業家は多くは書籍印刷人なりしが、多數地方にては、郵便が報知を印刷して發行するの權利を己が特權の餘徳として要求したのである。而して其の要求の貫徹されし所もあり、又然らざりし所もあるは言はずもなである。斯くの如き事情よりしてフランクフルト、ライプチヒ、ミュンヘン、キヨルン、ハンブルクに於ては郵便と新聞との間の古き關係が極めて長く維持されて

2) Strassburger Blatt

1) Michael von Aitzing

居たのに反し、他の多數地方に於ては報知公表のことは、全く書籍印刷所の營業に移つて仕舞つた。而してこの事は新聞將來の發達に對して最も重大な意味があつたのである。

【二四】Abh. der k. bayer. Akad. der Wiss. III. (I. XVI. 1. 一八八一年ミュンヘン版のシュチャイフ²⁾筆「最古の半年刊新聞即ち Messrelationen. 殊にその創設者男爵ミヒアエル・フォン・アイチングに就く」(F. Stieve, Über die ältesten halbjährigen Zeitungen oder Messrelationen, und insbesondere über deren Begründer Phrn. Michael von Aitzing) X オルト著「自由市フランクフルト・アム・マインに毎歲開催せられたる有名な二歲市の詳記」(Orth, Ausführl. Abhandlung von den berühmten Zwoen Reichsmessen, so in der Reichsstadt Frankfurt a. M. jährlich abgehalten werden.) 一六〇五年、フランクフルト版、七一四頁以下。アレンツ著、前掲書、一八八頁以下。シュルツマン著「フランクフルト・アム・マインに於ける政治及び學術新聞に就く」(J. von Schwarzkopf, Über politische und gelehrte Zeitungen in Frankfurt a. M.) 一八〇二年版。

【二四a】フロイント著「ミュンヘン・アウグスブルク夕刊新聞、一六〇九年より一九一四年に至るの三百年以上に渉る歴史の輪廓」(C. Freund, Die München-Augsburger Abendzeitung. Ein Abriss ihrer mehr wie 300jährigen Geschichte 1609—1914.) ミュンヘン、一九一四年。

【二五】オヘル著前掲書、四四頁以下。

ドイツは規則的に且つ短い期間を以て發行されし印刷新聞紙を生める一番最初の國であつた。以前イギリス人及びネザラント人が最初の印刷週刊新聞を生み出したと云ふ名譽を擔はんとして提起せる要求は、今日にては全然拋棄されてしまつた。イギリスに於ては一六二二年以前、オランダにあつては一六二六年以前には此の種のものゝ名を擧げるを得ず、フランスの週刊新聞の嚆矢は一六三一年にあつたのである。然しながら此等の凡べての場合には、單一な新聞紙が繼續して各號を發行するといふのではなくて、各號が皆夫々特殊な標題を持つてゐると云ふ新聞紙が毎週に發行され

るといふのであつた。

扱て斯くの如く半年報よりして直ちに週刊に一足跳びを爲し、その中間の月刊を経ざりしは一見奇異の觀なきを得ないであらうが、この報知の蒐集も又新聞紙の弘布も、何れもその時代に特有の交通機會に適合するの要ありしは、吾人の到底忘れるを得ざる所である。然り而して當時の交通機會の最も重要なものは歳市及び郵便であつた。半年毎に開かれたる歳市は商品商業及び人間交通の一大中心より印刷せる報知をあらゆる方面へ、極めて僻遠の地にまでも弘布せしめる可能を與へたものであつたが、郵便はその主要交通路線に於ては毎週一回宛の往復があつた。かるが故に半年報より週刊報へと一足跳びをなせるは事物の性質に基くものであつたのである。

此の週刊新聞の出現によつて、新聞業の本來的なる近世的發達への刺激が與へられたのである。然れども尙ほ、最初に日刊新聞の産まれ出づるまでには相當の時日を要したのであつて、それが初めて現はれしはドイツにては一六六〇年 (Leipziger Zeitung)、イギリスにては一七〇二年 (Daily Courant)、フランスに於ては一七七七年 (Journal de Paris) であつた。

斯くて更らに進んで遂には今日の一日に三回發行される世界新聞紙に到達するまでの經過を探究し行かんことは、今余の企及する所ではない。而して此等今日の新聞紙と彼の十六世紀に於ける手記の新聞紙とを區別する點は何處に存するやと云へば、報知媒介の組織の大規模なること、報知送達の迅速なること、にありといはんよりは、寧ろその材料範圍の擴張と、廣告業と、それが輿論に延いては諸國民の運命の歩みに及ぼす影響とにありと云はなくてはならぬのである。

〔一六〕最近の發達に就ては『現代の文化』(Kultur der Gegenwart) 第一部第一卷四九三頁以下の拙稿を参照すべし。

規則的に報知を蒐集する網は十六世紀にとつては大規模であつたことは疑ふ餘地がない。その中には所謂近世的特点、即ち各個別力を分業せしめると同時に、又これを統一せる働に纏めて行くことが行はれてゐる。この報知蒐集の範圍に於ては十六世紀以來さしたる進歩を見なかつたのである。新聞が此の方向に於て經驗した進歩の全體は、報知蒐集を報知送達(郵便)より分離せしめたること、報知蒐集を通信局及び電報代理局てふ企業的組織に作り上げたること、に存するのである。斯くてかの以前の郵便局長及び通信員の役目はこの通信局及び電報代理局に移り行くに至つたのである。而してこの間にありて唯一の異なる點は、彼等が最早、直接に新聞購讀者の爲め働くに非ずして、發行企業家の爲めに唯だ半成品を供給するの點と、此の際に新時代の完成された交通機關を利用するの點とにあるのである。

次に報知公表てふ方面を考ふるに、それが印刷機械を利用することとなりて以來占むるに至れる地盤の上に獨得の進歩發展をなすに至つたのである。その初め定期刊行の印刷新聞紙の發行人は他種の出版物、例へば小冊子又は書籍の出版者と同一人であつた。即ち文學的産物の複製者及び販賣者であつて、その内容の如何に就いては何等容喙の權能がなかつたのである。その新聞發行者(『新聞商人』)は、他の出版者が本草書とか昔の文學者の版とかを民衆に提供したのと同様に、郵便によつて得た常規報知を印刷して、之れを市場に齎らしてゐたのである。

されど斯かる状態はやがて一變せざるを得なかつた。抑々新聞紙各號の内容は書物又は小冊子の如き意味での渾一した統體を形作るものに非ずと云ふことを容易に發見したのである。而して其處に纏められたる異つた源泉から掘み取つて來た報知には、その信憑の程度に於て夫々甚しき差等の存するものありしが故に、之を選擇し批評して利用すべきであつたのである。此處に政治的又は宗教的傾向の現はれ來るは寧ろ當然の數であつて、殊に此の新聞に於て政治的時事問題を論評し、これを以て政黨の意見を弘める手段に利用するに至つて、遂に其の極に達したのである。

此の事は一番最初にイギリスに長期議會及び一六四九年の革命當時に生じたものであつて、やがてネザールランド及びドイツ自由市の或る一部分が之に倣ふことゝなつた。フランスに於ては大革命の時、初めてその躍進を見、多くの他の國々にありては十九世紀に入つて、初めてこの變化を見るに至つた。斯くの如くにして新聞は單なる報知公表設備よりして、遂に輿論の支持者及び指導者となり、政黨政策の鬭争機關となつたのである。

此の事はやがて新聞企業の内部組織に對して、報知蒐集と報知公表との間に新らしき一肢體が入り込むといふ結果を齎らすに至つた。それは即ち編輯といふことである。此の事は新聞の發行者に取りては、彼が新報知の販賣者たることから同時に輿論の商賣人となつたと云ふ意味を有してゐたのである。

其の事は發行者がその企業の危険の一部を政黨組織、利益集團、政府に轉嫁することが出来るやうになつたと云ふ事を先づ以て思はしめたのである。さりながら新聞紙の傾向にして讀者の意に合せざるものあらんか、讀者は直ちにその購讀を停止するものなるが故に、讀者の要求なるものは實に新聞の内容を規定する最後の原因なりと云はねばならぬのである。

然し印刷新聞紙が漸く一般に行はれるに至れば、やがてこれを官廳の公示に利用するに至るのであり、次では十八世紀の前期二十五年間に私用廣告の完成が行はれるに至つたのである。斯くて現今に及びてはこの私用廣告業は所謂廣告取次所によつて、彼の政治的報知の蒐集が通信局を通すと同様の組織を得るに至つたのである。

〔二七〕其の初めにありては一般的の通信仲介局（相談所、通信所）より發行されてゐた特殊の新聞紙に發表されてゐた。一八九七年の *Baileys Jahrb.* 中の *ランハート* (R. Mangold) の所論參照。

此の廣告業を取り入れるといふことに依つて、新聞は茲にそれに獨得の陰陽兩性的地位に陥るに至つたのである。即

ちそれは最早豫約代金を取つて單に一般的利益に關係のある報知及び意見のみを公表するだけに止まつてゐないで、特別に報酬を得る各種の廣告によつて個人的取引及び個人的利益の用役に立つことゝなつた。それは實に、新らしき報知をその讀者に販賣すると同時に、その讀者社會を支拂能力ある個人利益に販賣してゐるのである。かるが故に、同一新聞紙にして、しかも同一の頁の上に、人類の最高利益が代表され又表明されねばならない筈の場所に、賣買を營む人間がその賤しき營利慾を抱いてその本性を露呈してゐるのである。従つて事情を辨へざる讀者に取りては、抑々何處に於て公共的利益終り、而して何處にて個人的利益が始まるものなるかを區別するに極めて困難なる場合が決して珍しからざるを見るのである。

然るに十九世紀の漸く進むに連れて、新聞紙の編輯部分の内容が一般人間の利益の殆んど全般に渉るやうになつて來るに及んで、上述の危険はいよゝゝ甚しくなつて來た。高等政策、國家及び自治體の行政、司法、各種の藝術、技術、各方面の經濟生活、社會生活等が日刊新聞紙上に反映して來る。而已ならず美術的否な更に學術的生產の大部分までが文藝批評欄の完成以來、現今の社會的精神生活の此の大なる流となつて海に朝するに至つた。斯くて書物てふ出版形式は歲々その地歩を失墜して行く。——吾人はこの事實に就きて敢て疑を挟まんとは欲しない。

余は此の事項に就きて此處に更に深入りすることが出来ないし、又それが許され得ない。余が新聞業そのものゝ近世的成形を上如く一渡り概觀したことの意圖は、實に新聞業の起源を進化史的に正しく整頓して、報知仲介の組織が常に全經濟方法によつて規制されてゐる状態を示さんとするにあるに外ならなかつたのである。

ローマの新聞は富裕なる貴族の家の自主的貨財供給の一肢體にすぎなかつた。人々は丁度抱醫者や圖書係を雇備してゐた如く、新聞記者を抱へて居た。故に新聞記者は大抵は新聞讀者の財産であり、主人の指圖に従つて働くその奴隷で

あつた。

二六六

十六世紀の手記の新聞にては、當時の高等なる經濟行爲の全部門を支配してゐた手工業的經營が行はれてゐた。即ち通信記者は註文に應じて、自己の許に蒐めたる報知を直接、夫々特別の報酬を得て顧客の範圍に供給し、その顧客の需要に應じて材料の範圍をもまた定めてゐた。彼は一人にして報告者、編輯者、發行者を兼ねてゐたのである。

近代的新聞は資本主義的企業である。云ふべくんば新報製造工場である。其處には多數の人々（通信員、編輯員、植字工、校正係、機械係、廣告取、廣告取助手、使丁等）が雑多な分業により、統一ある指揮下に、勞銀を得て働いて居り、見識らぬ讀者社會の爲めに——なほ中間物（賣子、郵便局）によつてそれより分離されてゐることが珍らしくないが、——商品を製出しつゝあるのである。故に讀者又は顧客社會の單純なる欲望は最早この商品の性質を規定する力を有せざるに至り、甚だ複雑せる出版市場の競争關係がその規定條件となつてゐる。然るに此の市場に於ては、一般に卸賣市場に於けるが如く、商品消費者即ち此の場合には新聞購讀者が直接これに關與するに非ずして、實にその商品の品質に對して決定権を有するものは出版界の大商人及び投機業者である。而してこの出版界の大商人及び投機業者とは、政府、夫に屬する電信局、通信社、政黨、藝術界及び學術界、相場師及び殊に有力なるは廣告代理店と各個の大廣告主と即ちこれである。

今日發行されてゐる大日刊新聞の何れの號を取つて之を見來るも、それは資本主義的に組織されたる國民經濟的分業と機械的技術との摩訶不思議なる作品ならざるはなく、精神的併びに經濟的の一手段であつて、それには一切の他の交通機關、即ち鐵道、郵便、電信、電話の作用が、恰も焦點に結集するが如くに、集中しつゝあるのである。さりながら資本主義が精神生活と相觸接する處、其處には常に吾人は到底嫌忌の情なきを得ざると同じく、この近世文明の所産たる新聞紙に對しても滿腔の喜悅を傾瀉し來り得ざるものあるを遺憾とする。企業家の目睹する所のものは、素朴なる人々が信じてゐるが如くに、新聞の中に公益を代表し文化所産を弘布せんとする事にあるに非ずして、廣告欄の販賣によつて利潤を獲得せんとするにある。新聞の編輯の内容は企業家にとつては此の目的を到達せん爲めの失費の嵩む手段たるにすぎないのである。さるにても今日の文化世界が尙ほ依然として斯かる状態に堪えつゝあることは、これ文化世界の珍無類なる現象に非ずして何ぞ。

七
聯力と共力

ドイツに於ける經濟學の近時の教科書に於ても、又經濟學に關するどの大學の講義に於ても、其の中に聯力の概念が何處にか必ず或る點に於て述べられ、若干の注意を附加せられざるものなきを見る。然るに固より何人もこれに就きて能く多くを語り得るものがないのである。然かもこの概念にして一度現はれ來らんか、それは從來の習慣によりて、これを分業の章の末尾に附記するのであつて、それがよく一節を立つるの價ありと認められる場合には、それには必ず一節を立てるを通則とし、以て該書又は該講義の後段に再出せんことを防がんとしてゐるのである。

斯かる有様にしてやがて全一世紀は過ぎて仕舞つた。然るに科學なるものは、一現象範圍を深く啓明する資格のない概念を、夫等が一旦存在してゐるといふ理由で勞はつてやるといふことを許さぬものであるから、今や遂に此の古き在庫品目録中の物件を精細に調査探究して、それが遂に果して實際上何等の役にも立ち得ざることが明かなるに及びて、始めて之を棄つべく、もし苟且にもそれが吾人の知識の促進に資するものあるを知り得れば、それに與ふるに相當の地位を以てすべき時とはなつたのである。

教科書の説く所に從へば、聯力とは『分勞の他側面』たるに他ならぬ様である。即ち『結合的統一の立場より觀たる分勞』『分勞の相關』にして、『その表面の文字を分勞と記してある貨幣の裏面』なりと説かんとしてゐる。然れども思ふ、此等は何れも皆、其の表現に曖昧模稜の憾なきを得ざるを。そは實に人が勞働を分割する時は、到底此等を再び結合せざるを得ず、分れ／＼になれる箇々の部分はそれ自身にては存立の能力を有するものに非ざるが故なりとの見解より出發せるが如き觀がある。此の際に、分勞の概念は廣狹二様に解釋されてゐるものであつて、之を極めて狹義に解する時は（例へばアダム・スミスの説く留針製造工場の意味に於けるが如き）、此の結合力は企業家の資本によつて與へられるものと見られるのであるが、翻つてこれを廣義に觀ずれば、所謂社會的分業も亦其の中に數へられるのであつて、

1) Arbeitsvereinigung 2) Arbeitsteilung

此の時は此の聯力の要素たるものは交通でなければならず、然らば聯力なるものも畢竟、全交通經濟組織其の物と何等異なるの點を發見し得ざるに至るであらう。

〔一〕 フィリポフ著『經濟原論』(Philippovich, Grundriss der polit. Ökonomie) 第一卷、八九頁(六版)。

〔二〕 マンヘット著『經濟學原論』(Mangoldt, Grundriss der Volkswirtschaftslehre) 二九節。

〔三〕 Schönbergs Handbuch 中のクラインウヰルナー筆『國民經濟的生產』(Kleinwächter, Die volksw. Produktion) 一三節。

此の問題を最も詳細に取扱ひ、後人の典據となりうるロッシヤ¹⁾は實にそれを次の如く觀察してゐる。曰く、分勞と聯力とは『同一概念の二側面たるに過ぎざるものにして、即ち社會的勞働の兩面である。換言すれば、それ以上分割すれば勞働が相互に妨礙し合ふに至るべしと云ふ程度に於ける勞働の分割にして、また相互に勞働を促進せしめ得ると云ふ程度に於けるその結合』である、と。尙ほ彼はその論を進めて、『葡萄園丁及び亞麻培養者も、穀物を作る農夫を十分に當てにする事が出来ないならば、餓死を免れ得ざるべく、留針工場の勞働者にして唯だ針の頭のみの製作に従事してゐる者にも、たゞ無駄な仕事をしないやうにとならば、その針の尖端を磨く仲間のことをよく了解して居る要がある。それと同じく商人の仕事も、彼が仲介する各種の異なる生産業者の勞働なくしては考へ得られざるものである』と述べてゐる。

〔四〕 『經濟學體系』(System der Volkswirtschaft) 第一卷、六四一六六節。

斯くの如くにして、全現象は此處に國民經濟的交通過程及び組織過程の雲霧中に沒了し去つて、國民經濟一般と何等異なる所の存せざるなきに終るであらう。殊にそは分勞との概念的相關性を全然失つてゐる。ロッシヤ¹⁾は又、各世代が

1) Roscher 2) gesellschaftliche Arbeit

祖先の遺産を承繼し、これを豊富にして後代に傳へることより生ずる文化發展の確實不易なること、更に大企業は必ず有利なるものにして、小企業は必然結合せざるべからざるものなる事に就いてのみ廣きに涉つて詳論してゐるが、此の際に勞働は殆ど全く一顧だも支拂はれてゐないのである。

ロッシヤ¹⁾は此の部分に於ては、全然フリードリヒ・リスト¹⁾の考を襲うてゐる。リストは國民的生產力の發展を説ける彼の學說中に『勞働の聯合』²⁾なる語を、余の知れる限りに於て一番最初にドイツにて使用したる人にして、又それを獨得の方法もて利用した人であつた。分勞の『自然法』の批判から出發すれば、アダム・スミス³⁾も、又彼の後繼者も此の法則の本質を根本的に研究してその最も重要な結果にまで追及したるもの能く一人もなかつた、と論じ、抑々『勞働の分割』⁴⁾てふ語句が已に不十分なるを免れ得ず、之よりしては誤れる概念の必然的に作製されざるを得ざるものなるを説き、更らに曰く、『野蠻人が同一日に狩獵に行き、漁撈に赴き、木を伐り、小屋を修理し、弓網及び衣服を作るが如きも、これ勞働の分割と稱するを得べく、アダム・スミスが例として取れる、十人の異なる人が一つの針の製造に際して生ずる異なる夫々の仕事を分擔することも亦、勞働の分割と見るを得べし。前者は勞働の客觀的分割にして、後者はその主觀的分割である。前者は生産に對して妨礙的なるものであり、後者はそれに對して促進的なるものである。而して兩者間本來の區別は、前者は異なる對象を生産せんが爲めに一人がその勞働を分割するに反し、後者は唯一の對象の生産の爲めに多數人がその勞働を分割するといふ所に存するのである』と。

〔五〕 『國民經濟の國民的體系』(Das nationale System der politischen Ökonomie) 二二二頁以下。

彼は尙ほ其の辯論の武歩を進めて曰く、『此の二個の活動は更らに同等の權利もて、勞働の聯合なりと呼ばれ得る。即ち野蠻人は異なる勞働を自己一身に纏め、留針製造に於ては各種の人々が一個の共同的生産に集められるのである。か

1) Friedrich List 2) Vereinigung der Arbeit 3) Adam Smith
4) Teilung der Arbeit

の學派が依つて以て社會經濟の中のかゝる重要な現象を説明しつゝあるかの自然法なるものゝ本質は單に勞働の分割とのみ見得るに止らずして、多數人に各種の仕事行爲を分割するものであると同時に、それは共同的生産を爲さんが爲めの各種の行爲、見解、力の合同もしくは聯合でもある。故に、此等の操作の生産力の基礎は常に分割にのみ存するに非ずして、本來はこの聯合に存するものといふべし」と。

リストは此の後段の考を更に擴張して、生産力の調和¹⁾は國民の中に作り上げらるべきであるといふ要求を、其處に基礎付けようと試みてゐる。物質的生産に於ける業務の最高分割と生産力の最高合同とは、農業と製造業と之れなりと説き、單に農業をのみ營む國民ありとせば、そはかの物質的生産に於て片腕を挽がれた人間と選ぶなしと云つてゐる。

今、此の大煽動家の巧妙なる修辭から、その議論を剥ぎ出して來れば、彼はアダム・スミスに對して釋然としてゐなかつたと云ふ事——これは此の場合ばかりでなく、他でも随分そうであるが——が解るであらう。然れどもスミスは決して分勞が力の共働 (cooperation) の條件となつてゐるものであることを看過してゐるのではない。——リストもこれを認めない程に狭量ではなかつたのであるが——而してスミスのかの有名なる分業論の末段には、文明國に於ては最下級の勞働者すら尙且つこの聯力 (Joint Labour) によつて、アフリカの黒人王よりも遙かに多方面なる欲望満足を得つゝあることを詳論してゐる。然かも彼の慧眼なる、分勞の本質中に含まれて夫れと融合してゐる此の事實を、一個特殊なる經濟現象とは觀察せんとしなかつたのである。それを一面より眺むるか、他面より觀察するかによつて、同一物を或は分勞と呼び、或は聯力と稱することは抑々何の効ありと爲し得るであらうか。かの狩獵、漁撈、伐木等をそれからそれと行ひつゝある西印度族の行爲を目して、アダム・スミスは勿論、分勞の特殊態とは見なかつたであらう。彼をして云はしむれば、斯くの如きはその反對に、非分割的勞働と稱すべく、社會一般に分勞の状態が尙ほ未だ生ぜざるに當

1) Harmonie der produktiven Kräfte

つて出現せる一状態なりと稱するであらう。勞働の分割と云ふことは、彼に取つては、時間の分割と云ふことは少しく異なるものとなつてゐる。

〔六〕 第一卷、第一章の末段。

〔七〕 分勞の概念に就きては次論に詳述しあり。

勞働の使用に於ける時間要素に關して、リストは尙ほ他の場所に於てヨリ精細に論じてゐる。彼は一國に於ける個々の工業部門は改良せる取扱方法、機械、建物、生産利益、經驗、熟練、その他原料の有利なる購入とその生産物の有利なる販賣を保證する如き知識併びに關係に漸次掌握されて行くものであると、其處に論じてゐる。而して已に着手されてゐる業務を完成せしめ擴張せしめることは、新らしきものを創設するよりも容易にして、已に以前より一國內に在籍してゐる營業部門に於て、優秀なるものを廉價に供給することは、初めて新たに設けられたる部門に於てするよりも遙かに容易なりと説き、更に曰く、『人類一般の施設に於けるが如く、工業に於ても亦、自然法なるものが其の著しき業績の基礎となりゐるものにして、それは仕事の分割と生産力の合同でふ自然法と多くの共通點がある。即ち其の本質は、繼續する多くの世代が彼等の力を同一目的に聯合せしめ、それに必要な努力を彼等の間に同等に分配すると云ふ事の上に成立してゐるものである』と。リストは之を呼んで恒常性及び作業繼續の原則と云ひ、その歴史上に於ける効力を多數の例を以て證明してゐる (選舉王國に比して世襲國家の方が勢力の遙かに大なること、文字による人間知識の相傳、工業上の熟練を維持し増加せしめる上に及ぼす階級制度の影響、數世代に渉る中世の殿堂建立)。又、公債制度なるものは、夫によつて『現在の世代が將來の世代に宛て、手形を振出す』ことなるが、それはかの作業繼續の原則を適用せる殊に美はしき一例として掲げらるべきものである。

1) das Prinzip der Stetigkeit und Werkfortsetzung

〔八〕『國民經濟の國民的體系』(Das nationale System der polit. Ökon.)の原四〇九頁以下を見よ。

所で此處ではリストには聯力の修辭的に飾り立てた比喩だけが重要なものとなつてゐるのだといふ事が容易に解るのである。然し斯る「作業繼續」よりして、後入をして聯力の一特殊の種類を形作らせることを妨げはしなかつた、尤も少しく考量すれば、この作業繼續は決して經濟に特有なる現象に非ざることを教へ得たのであらうけれども。然り、此の作業繼續なるものは、實に人類を動物界より峻別せしめる社會進化の一般史的原則なのである。動物にありては、銘々に新しき同種の生活が始まるのであつて、吾人が知り得る限りに於ては、夫等の生活は數千年前も今も何等異なる所を見ず、従つて何等痕跡をも止むるなく、歴史なるものも残さぬ。然るに人間に於ては各世代は前の一切の世代の文化の成果を受け續ぎ、これを豊富ならしめては、更に後代に遺すのである。この事は單に物質的貨財生産にのみ適用されるものたるに止まらずして、藝術にも、科學にも、宗教にも、法律にも、習慣にも及ぶ。斯くの如く作業繼續は人類生存の根本條件であり、基礎的前提を作成するものなるが故に、それを經濟的勞働使用の學說中に特別に取扱ふ何等の根據が存してゐない。殊に況んや、作業繼續なるものが、これに對して何等の新しき效果ある觀點を提供せざるに於てをやである。

然るに二三の教科書には聯力の第三の場合として、次の如きことを掲ぐるものがある。それは「多人數が同時に同一のことをなし、聯力によつて、彼等が孤獨にて爲し得たであらうよりも一層大なる作用を生ずる時に」現はるべきものである。ラウは此のやうな場合を序でに考へて、森林に於ける樵夫、筏師及び草刈人の臨時的聯合を指摘してゐる。實際は此處では、分勞ではないが、多人數の同時的共働によつて、各個人の勞働生産力の増進が所期されてゐる一過程が取り上げられてゐるのである。故に此の場合は、リストが述べてゐるあの多方面に働くアメリカ・インディアンの場合

1) K. H. Rau

と相似て、已に分勞の概念に蔽はれて居り、敢て特殊なる學問的研究には適せざるものなりとして、無雜作にこれを除外し去り得べきものではない。

〔九〕『經濟學原理』(Grundrisse der Volkswirtschaftslehre)第一卷、一一六節(a)、ラウは『經濟學新說』(Nouvo prospecto delle scienze economiche)第一卷、八七頁以下に此の問題を論じてゐる。その他ヘルマン(Herrmann)は著『國家學研究』(Staatsw. Untersuchungen)新版、二二七頁に、この問題に注意して、これを「最も簡單なる勞力結合」(die einfachste Arbeitsverbindung)と呼んでゐる。佛人も同じくこれを分つて單純共働(Cooperation simple)と、複合共働(Cooperation complexe)となし、後者を分勞(Division du travail)と同じものであるとしてゐる。ノーツェ著『經濟論』(Cours d'Écon.)第一卷、二二五節參照。

然れども聯力と云ふ概念が構成され、科學的文獻の中にそれが永く維持され來りし根底には、其處に分勞の原理と相對峙する一經濟原則が存せずしては止み得ざるものなりとの漠然たる感じが横たはつてゐることは疑ふべからざる所である。さりながら共働はそれではあり得ない。蓋し共働は、分勞の或る種の形式⁽¹⁾と同一物であり、その「他面」たるに過ぎざるが故である。果して然らば、斯る原則とはよく如何なるものなるべきか。

〔一〇〕例へば勞働分割(Arbeitsverteilung)又は生産分割(Produktionsteilung)と同一にして、決して職業分割(Berufsteilung)とは等しくない。今、凡べての種類の病氣を治療する醫者の代りに、各種の専門醫が生ずるとしても、彼等の間には、交通によるも、又、その他の方法によるも、到底一工場の種類の部分勞働者の間に見るが如き「聯力」は生じ得ないのである。

一切の分勞は限られたる人力に勞働を適應せしめることであつて、營むべき仕事と各個人の勞働能力との間に性質上の不均衡の存する時に生ずるものである。⁽¹⁾

〔一一〕次講を參照すべし。

1) Arbeitsteilung

然るに此處に又此の兩因數^二には數量上の不均衡が存し得るのであつて、然かもそは二重の方法に於てである。即ち(一)は營むべき仕事に數量に於て使ひ得べき人力よりも小なる場合であり、(二)は一個人の力にて行ひ得るよりも大なる場合である。

第一の場合に於ては、もし労働者にして此の一箇の仕事にのみ己が活動を局限せんとせば、人の力は十分なる利用を見る能はざるに至り、爲めにその労働能力の一部は休閒の状態に曝され、不經濟的精力浪費を生ずるに至るべく、當該労働は、それに當る人を養ふ生業の基礎を形作るを得ざるに至るであらう。かるが故に労働者は、その私經濟的利害關係よりして已に、その空虚なる時間を充たさんが爲めに、第二の行爲を第一の行爲と結合させ又は聯合させるに至るは、寧ろ當然の成行であつて、吾人は之をこそ正に聯力¹⁾と稱し得べきである。

第二の場合にては、各個人がその營まんとする労働を唯だ一人にては決して行ふを得ず、又よし行ふを得となすも、異常なる時間と努力との使用を俟つて初めて望み得らるゝものである。例へば一人の労働者は止むを得ざるに際しては、手鋸を以て木の幹を板に挽き割ることを爲し得ぬことはない。さりながら、その爲めには如何に大なる辛勞と、如何に長き時間とを要するぞ！ 然るに今二人の労働者が大鋸を取つてこれを行へば、その仕事は單に絶對量に於けるのみならず、相對量に於ても具合よく運ばれるのである。今日も尙ほ村の大工の仕事場にてよく見掛けて誰れもが知つてゐるあの『挽穴』²⁾の繪は、斯る理由よりして生ずるに至つた。斯くの如き労働者の聯合は各個の労働をヨリ生産的ならしめるものである。然るに吾人は斯種の過程を呼ぶに最早や聯力なる語を用ゆるを欲せず¹⁾。これ厭はしき紛雜に陥らざらんが爲めである。假令聯合なる語を用ゆるとしても、精々「労働者聯合」と呼び度い。故に之を呼ぶに共力²⁾なる語を以てするの勝れるを思ふ。——殊に後に述べんとする此の過程中の變種を考へ來る時は、一層その感を深うするものがある。

1) Arbeitsvereinigung, Kombination 2) Arbeitsgemeinschaft

る。況んやこの語を用ゆれば、此處に關係してゐる人的要素も亦、言葉の上で一層明瞭に表はれ來るものがあるではあるまいか。

〔111〕もし聯力なる語を使用せんとせば、此の場合を第一のそれと區別する爲めに「主觀的(人的)聯力」[subjektive Personliche] Arbeitsvereinigung) とし、第一の場合を「客觀的(物的)聯力」[objektive (sachliche) Arbeitsvereinigung) と稱せねばならぬであらう。

〔譯者註〕[Personliche] (挽穴) とは、一人が材木の上に立ち他の一人がその下になつて挽く爲めに作つた穴を云ふ。

故に聯力とは、異なる労働を一人の手に聯合せしむることであり、共力とは、一の労働任務を遂行せんが爲め、多數労働者を同時に使用することである。聯力にあつては同一の生産者が各種の生産物を作成し、又は生産を商業及び人的勞務給付と結合せしむるものにして、共力にあつては異なる労働者が同一生産物を共同して製作するものである。前者にありては聯合中心點は労働主體の中に存し、後者にありてはその協同は労働客體によつて與へられる。

此の兩者は分勞には依存せざる全然獨立せる過程である。如何にも夫等は原始的なる發展の段階に於て而して完成せる國民經濟の比較的程度の低き地方にありて、その主なる役割を演ずるものである。かくて吾人は諸民族の經濟生活の中に二つの大なる進化段階を劃することが出來ると思ふ。即ち一は聯力及び共力の原則が主として勢力を有する低級の段階にして、一は分勞の原則が優勢なる高級の段階である。而して今日の國民經濟に於ても同様に二箇の社會的生活範圍が區別されるのであつて、即ち分勞が著しく現はれてゐる範圍と、聯力及び共力が優秀の地位を占めつゝあるそれとである。

一 聯 力

聯力は民族の發展史に於て已に早く現はれるものにして、元來それはかの個人的食料探求の段階を經過して、假令極めて粗雑なりとは云へ、經濟的顧慮が人間の行爲の間に認め得らるゝに至れば、已に一般的に現はれ來るものである。蓋し其處に於ては到る所、互ひに峻別し合へる二個の生産範圍の分裂を見るのであり、其の各は何れも更らに多樣に組合はされてゐるからである。此の二個の生産範圍、其の一を男子の労働となし、他の一を女子の労働となす。此の制度は個々の點に於ては瑣末なる差異あるを免れ得ずとは云へ、その根本的形相に於ては、凡べての進歩せる自然民族の間に認め得る所にして、それに本能的計畫性あることを否定する譯には行かないであらう。然れどもこの段階に於ては、男子と女子との間に労働分割(分勞)が行はれたとは、到底眞面目になつて云ふ譯には行くまい。蓋し、吾人が知る限りに於ては、男女の夫々に指定されてゐる労働中の何ものたりとも、異性によつては行はれたことがないからである。

〔一三〕 詳細は三二頁以下、五九頁に就きて見よ。

斯くの如き關係は、原始狀態より、全く自然的に發達し來りしものと考へなくてはならぬであらう。故に強力なる男子が己れに課せられたる各種の労働を女子に強制轉嫁せるものなりといふならば、それは到底謬想たるを免れ得ない。實際に於ては然らず。寧ろ男女は夫々時の經過に伴れ、自發的に、境遇の必要上各自の生産範圍と労働日課とを自ら作り出し、その爲めの技巧を完成し、經驗を積むに至れるものである。而して男女夫々の間に引續き相續的に承繼せらるゝことによつて、此の二つの労働結合は殆んど性的特徴又は性的機能とまで成るに至つたのである。従つて女子の世襲勞

働は、これ男子の解し得ざる所にして、一種の自然的裝備を構成し、以て男子をして尊重せしめ、價值を認めしむるに至れるものである。而して此の事より女子を男子の財産と見る考が生ずるに至れりとなすことは假令正當なる意見であるとしても、又女子が生産上に行ふ重要な役目が、原始時代の生粗なる夫婦關係をして漸次一個の生活協同に向上せしめ、女子をして遂には男子と同等の權利を享有せしむる上に決して渺なからざる貢獻を爲したのであると云ふ考も亦、等しく正鵠を得たものと云はざるを得ない。

男女兩性の夫々の手中に異種類の労働を聯合させることが有する經濟的意義は、實際は教育的なものである。即ちそれは——少くも女子の側に於て——播種收穫の時期に留意し、一日の中でも、尙ほ極めて粗雑なりとは云へ一つの時間分割をするやうにと、謂はゞ自ら強ゆるものである。此の際特に重要な事柄は、今日に至る迄もなほ多くの自然民族間に行はれてゐる原始的なる拙石を用ゐて穀粉を作る労働が甚しく時間を要し、三人より四人の食料を作る爲めには已に一人の女子の労働を要求するといふ事である。これ實に此等民族の間に一夫多妻の俗が維持されつゝありて、しかも婦人が敢てそれに苦情を挾まざる最も重要な原因の一つである。蓋しその夫が新らしき妻を迎ふるは、これ常に従前の妻の勞役を軽減する共同勞力者を得たるを意味するが故である。従つて多數の女子を所有することが富裕の象徴と考へらるべきことも、敢て訝しむに足らぬ所である。かるが故に規律ある經濟の生ずる本源たるかの時間使用の經濟は、その出發點を此の女子の聯力に有するものなりと正に云ひ得るのである。

〔一四〕 ユンケル著『アフリカ旅行記』(Dr. Junker, Reisen in Afrika) 第二卷、二一六頁以下、及び拙著『労働と律動』一七、七二頁以下参照。

然るに其の後の進化の經過中に、男女兩性に於ける労働範圍の限界に非常なる變動を生じ、女子は益々家計に於ける

使用規制の方面に退き行き、之に反して男子は殆んど一切の生産を己が掌中に收めるに至つた時に於ても亦、分勞の原理は殆んど唯だ男子の營利行爲の範圍にのみ行はれることとなり、他方、女子には家計にあつて、準備、整理、清掃、修理の極めて種類の異なる勞働が残されることとなつたのである。然かも今日にありても、なほ此の女子の勞働過程が、實際上日常生活に於ける時間分割の基準となりつゝあるのである。

かるが故に、聯力は營利經濟より全然消滅し去れるに非ざるは言を俟たず。農業に於ては、耕作は尙ほ依然として極めて異つた種類の耕作法を包括してゐる。文明國に於ては到る處として牧畜と不離の關係に立たざるものある無く、尙ほ副業が經營中に取り入れられてゐることが屢々である。かくて人及び獸の力を、出來得るだけ多方面にして然も規則的に利用し盡し得んが爲に、經濟の仕組を立つることが、農業に於ける經營指導者の最も重且つ大なる任務の一つとなつてゐる。四季の移り變りに従つて勞働の任務の變化するが爲め、分勞なるものは大經營にありても其の行はれる餘地極めて狭小にして、各種の異なる仕事は常に一人の手に聯合さるべく、勞働階級の女子の部分に對しては、經營部員と下婢との明確なる區別は尙ほ之を認めるに難き有様である。

これと同様な顧慮を必要とするものは、林業なのであつて、此の方面に於ける達識なる實際家は今日尙ほ普通に行はれつゝある特殊化された季節勞働の組織を非議し、各種の勞働に慣れて一年中引續き仕事を營む常設的勞働者幹部の維持を希望してゐる。然り而してそれは聯力の基礎の上にもみ滿され得る要求ではあるまいか。

〔一五〕イェンチ著『國家林業に於ける勞働者事情』(Fr. Jentsch, Die Arbeiterverhältnisse in der Forstwirtschaft des Staates) 一八八二年マルリン版。

工業に於ては、かの往昔の手工業はこの聯力の上にその基礎を有してゐた。蓋しそが其の生産範圍を對立的に限界す

るに際してその規矩となりたるものは、最高の生産力てふことに非ずして、各親方がその職業に於て得べき「生計」に對する顧慮であつたのである。工業史の最近數世紀を滿たしてゐる各種同業組合間の無數の境界争は聯力の何れの形式が合目的なりやを絶えず考量するを餘儀なからしめて居た。然るに營業自由の時代に入りては、大都會に於てこそ手工業も亦、分職の方面に非常なる發達を呈したるものあれ、小都會にありては尙ほ依然古き聯力を其の儘に襲踏し、田舎に至りては尙ほ歳々新らしき聯力の發生を見るの狀態であつた。即ち田舎に於ては左官職は又同時に敲屋・ペンキ匠・室内裝飾師なりといふこと決して珍しくなく、冬となれば屠殺者の手間取と成れる者も亦あつた。鍛冶屋にして鋸匠、打禾機を使用する際の機械頭を兼ねることあり、室内裝飾師が時には鞍工の手間取となり、時にはペンキ匠に備はれ、又時には製本屋の職人に住み込むこともある。都會に於ては、少くとも新たに生じたる仕事は、極めて異つた各種の聯合を引き請けて居り、瓦斯水道の引込工事は或は鋸前屋より、或は鍼力屋より引き請けられ、電気引込工事は各種の手工業者の手によつて行はれることとなつた。而して自營の仕事場を持つた手工業者は到る處で好んで小賣業をも併營して、主として己が生産範圍に屬する商品にして最早手工業的には製作され得ざるに至りしものを販賣するに至り、時によりては、各種の他の品物をも取扱ふに至つた。ユストゥス・モエーゼルも已に、健全なる經濟思想が此の聯力の裡に實現されてゐる状態を述べ、願はくは凡べての「小賣商賣」が手工業者及びその妻女の手委ねらるゝに至らんことをと述べてゐる。以上數へ來れる所に加ふるに、手工業が人的服役(殊に下級の市町村吏員)を以て、田舎に於ては一般に農業をも共に營んで引き請けてゐる多様の聯合を以てすれば、聯力は此の範圍になほ極めて廣き領野を維持しつゝあることを容易に確信し得るのである。『近代に物を考へる』人々は、斯かる『時代遅れの經營』の多數が今日尙ほ現存しつゝあることを或は悲むかも知れない。厭世家はこの中に『手工業の窮狀』の象徴を見んとするかも知れない。生産惑溺者は、

何れの工業の方面にも生産力が出来得るだけ高き尺度に達しざることを仰つかも知れない。さりながら具體的見解より生じたる因へられざる評價は、獨立してゐる小なる中間階級がこの聯力の中に、その最も確實なる支持を得つゝあるものにして、多くの場合、經濟性も亦その爲めに損失を蒙りゐるものにては非ざることを見出すであらう。蓋し、それは本業に不用なる時間を有益に使用し、打ち棄て置かば何等の役にも立ち得ざる勞働力をも共に招き寄せる事を通常主眼としてゐるからである。

〔一六〕『愛國的空想』(Patriotische Phantasien) 第二卷、三七號。

〔一七〕手工業者の職業聯合及び副業に關する豐富なる材料は Zehr. d. Ver. f. Sozialpolitik 第四〇卷より七〇卷に渉る。ドイッに於ける手工業事情研究』(Untersuchungen über die Lage des Handwerks in Deutschland) の中に掲げられてゐる。殊に小都會及び地方團體の工業敘述中にその多數が記されてゐる。

聯力がなほ比較的頻度に行はれてゐるのはかの家内工業に於てである。此の範圍にては婦人勞働者は通例家計の仕事をも共に營み、男子勞働者は農業又は其他の職業を本業として經營してゐることを珍らしとしないのである。實に多數の家内工業の成立は、これが十分に其の力を效し得ずゐる人々によつて、從來の作業に合目的に結び付けられ得るであらうといふその考慮に歸するものなのである。

商業はその元來が常に聯力である。即ちその發展の初期に於ては、それは必ず運搬をも含んでゐたからである(隊商)。近世國民經濟に於ては、卸賣商業のみならず、大都市の小賣商業に於ても亦、廣汎に渉る分勞が行はれるに至つたのである。然しながらそれと相併んで種々雜多なる品物を一纏めにしてゐる無數の營業(小間物店、勝手道具店等)あるを忘るゝを得ない。而して此の傾向は百貨店、通信販賣店、五十錢均一店、割賦販賣店に於て其の頂點に達したるものと

爲すことが出来る。勿論斯種の經營に於ても、その極めて大規模なるものに至れば、それに屬する勞働は嚴に分勞の原則に遵つて組織されるるを通則となすが故に、此處に算ふるは其の當を得ざるものがあるかも知れぬ。然れども市外地、小都會及び田舎に於て、其の多くは單獨經營として一個人の手に營まれてゐる多數の小賣商店はよく此の現象範圍に屬するものである。蓋しその店主は金を齎らすものは何にてもあれ能ふ限り廣く取扱はんと心掛けつゝあるからである。此處に驚がれてゐる一切のものを知らんが爲めには、此の商店の人相書を作つて見るがよい。その中には小間物雜貨として調法がられてゐる或る種の商品、例へば杖、パイプ、櫛、刷毛、麥稈帽子の如きものをすら發見し得るのであつて、夫等が如何にしてかくも同列に陳べられるに至りしかを解するに苦しむ程である。而已ならず此等の商人の多數はそれ以外更らに周旋業、保險代理業、新聞取次業、富籤及び觀劇券の販賣業を營み、或は廣告取をなし、或は貯蓄銀行の貯金徴收をなし、或はその他種々のことを營み居るに想到せば、思半ばに過ぐるものがあるであらう。

交易經濟の大きな機構の中には様々に夫々特化された多數の行爲ありて、夫等はそれを單獨に分離せしめては、經濟的に成し遂ぐるを得ず、従つて常に他の營利行爲と聯合させてゐるものがある。思へ、どの村落共同體が專屬の主唱、書記又は役僧を備ひ置き得たであらうか。何れの田舎に於ける貸付組合がその計算人がそれのみによりて生計を立て行き得る丈の給料を彼に支拂ふことが出来、又如何なる保險會社がその復代理人の大群に同様の支拂を爲し得たであらうか。今もし此處に聯力てふことの可能ならんか、此等のみか、その他多數の經濟的機能はあつさりと不充實に終らざるを得なかつたであらう。

扱て此の聯力に對して、如何なる要因がその個々の場合に規矩となり準繩となるべきかは、たゞ統計的敘述的基礎に立つ透徹せる研究に俟たねばならぬ。先づ各種異なる勞働任務に従事してゐる人にとつて決定的な作用を及ぼすものは、

多くの場合に於て、十分なる時間の利用と全生計の獲得てふ事である。然れどもその聯力の種類に對しては、其れ以外更に多數の他の點を顧慮せざるを得ないのであつて、或は在來の顧客關係の利用を、或は勞働者に特殊の天賦又は機巧の利用を顧るの要がある。さりながら其の間にあつて、終始それと協力するであらうもの、それは實に經濟主義なのである。

國民經濟に於ける聯力の事實上の範圍は之を算定する到底容易の業に非ず。統計はそれに對して危つかしい副業の範疇を作り出してはゐるが、しかしその副業なるものも、此處に問題となつてゐる場合の總體を盡したるものにはあらで、副業が何か職業的な性質を備へてゐる場合が精々なのである。かるが故に此處にては聯力と呼ばんよりは、寧ろ職業聯合といふの一層適切な感ずるものである。されど最近のドイツに於ける職業及び營業調査の結果が、次の如きことを示しつゝあるを見れば、聯力が強力なる經濟的意義を有するものありとの觀念を幾分なりとも獲ることが出來はしなからうか。即ちその調査結果によれば一九〇七年六月十二日ドイツ帝國には七百五十萬人の副業を営む者あり、農業のみに就いて云ふも、これを副業として經營してゐるもの五百六十萬二千二百二十二人の多數を數ふ。又農業、工業、商業の或る一部門に於てその經營所有主又は經營指揮者として働きる五百四十九萬二千八百八十八人中、百四十八萬二千五百十四人(二六・九%)は副業を営み、當該營業部門を副業として經營するものは三百二十五萬三千五百二十二人を算したのであつた。

〔一八〕 中世の都市生活中に聯合職業の生じたることに就きては、拙著『十四五世紀に於けるフランクフルト・アム・マインの人口(Bevölkerung von Frankfurt a. M. im XIV. u. XV. Jh.) 第一卷、二三二頁以下、四一七頁以下に少しくこれを説いて置いた。

主業副業に據る ドイツ帝國營利人口組織

(一九〇七年六月十二日現在)

職業種別	業者				
	一 主業トシテ之ヲ營ム有業者	二 有業中 他ニ一副業ヲ營ム者	三 副業ヲ有セザル者	四 上記ノ職業ヲ副業トシテ營ム者	五 各職業種別ノ從業者總數
A 農業園藝	九、八三三、三五七	一、三二一、四四四	八、五七二、八四三	五、六〇一、三三三	一五、四八四、四七九
B 牧畜業	一、二五五、六二四	一、七三四、六〇八	九、五三二、六四六	七、五〇〇、三七四	二一、〇〇六、六二八
C 工業及鑛業	三、四七七、六二六	四、八三三、七三三	二、九三三、八八四	九、五五〇、三六一	四、四三七、九八七
D 商業及交通業	四七二、六九五	三三、二〇八	四、四八八、四八七	五二、七六七	五三、三、四八二
E 家事服務、代的賃銀労働	一、七三三、五三〇	一、三六、〇五七	一、六〇〇、四七五	一、五三三、九五二	一、八九一、四八一
F 公務自由職業、無職業及職業ノ申告ナキ者	三、四〇四、九八三	四、五六七、七五四	二、九四八、三二九	—	三、四〇四、九八三
合計(A-F)	三〇、三三三、〇四四	四、一四七、七六三	二、六〇八、四七五	七、四〇六、六九五	三、七、三九、〇四〇
内 男	二〇、一六六、六四〇	三、五五一、〇四九	一、六六四、五九七	四、一〇〇、九五五	二四、三〇六、七三五
内 女	一〇、一六六、四〇四	五九六、七一四	九、四三三、八七八	三、三〇六、〇〇〇	一三、四三三、三〇五

* 獨逸帝國統計、二〇二卷(一)、四頁以下参照。

かの調査によつて取扱はれたる職業行爲の全範圍の一覽は前掲の表によつて明かなるべく、其の中には獨立有業者と從屬有業者とを包括してゐる。之によれば當該職業種別に於て主業としてこれを營む者の百人中、經營所有主にせよ、ある何等かの労働關係に立ち居る者にせよ、それと共に第二又は第三の營利行爲(副業)を合せ營みつゝあるものは

七 聯力と共力

A	農業、林業、牧畜業、漁業にては	一三・三
B	鑛業及び工業にては	一五・四
C	商業及び交通業にては	一三・九
D	家事服役及び交代的賃銀労働にては	四・九
E	公務自由業にては	七・九

各職業種別に於て（主業にせよ、又は副業にせよ）兎に角營利行爲をなしつゝある者の總數中、其の職業種別に屬する職業を副業として營みつゝあるものは、百人中

A	農業、林業、牧畜業、漁業にては	三六・二
B	鑛業及び工業にては	六・二
C	商業及び交通業にては	二一・五
D	家事服役及び交代的賃銀労働にては	九・九
E	公務自由業にては	八・一

を算するのである。

多數の職業が主として他の營利行爲との聯力に於て營まれてゐるといふことは職業統計——此の目的には遺憾ながら分類が餘りに簡に失すれども——よりして已に知り得られる。例へば牧畜業（獨立業者の九一・〇％）、内地漁業（六九・四％）、泥炭採掘調製業（九七・七％）、石匠の業（五〇・四％）、大理石・石材・盤石採掘及び荒打業（八〇・九％）、石材細

工業（四六・六％）、煉瓦及び土管製造業（八二・九％）、窯業（四八・六％）、陶製及び硝子製玩具細工業（四四・四％）、釘製造業（五八・四％）、大物鍛冶業（七五・八％）、製車業（七三・八％）、剥皮業（八八・六％）、炭燒業（八〇・五％）、穀粉製造業（九三・二％）、麵粉燒業（五四・七％）、獸肉業（五五・七％）、輻輳業（四七・八％）、保險業（七二・九％）、周旋業（三二・一％）、旅客輸送及び郵便取扱業（五四・五％）、荷物運送業（七九・九％）、宿泊業及び料理業（六二・三％）である。

〔一九〕括弧内に示せる數字は該職業を營める人の總數に對する該業を或は副業として或は他の副業と共にこれを主業として獨立的に經營してゐる人の割合を表はすものである（帝國統計第一表、第六及び第八欄）。

此等の數字は上述の職業種類に於ける聯力的營利行爲と分勞的營利行爲との業績の相貌を示しつゝあるものでは決してないことと言ふまでもない。實際、生産統計にては、田舎靴屋にしてその時間の四分の一を農耕に費すものは、靴生産の爲めの残りの四分の三の時間が計算に入れられ得ないであらう事は餘りにも明白な事である。然れども此處でも問題となるのは其の事ではないのであつて、問題は實に聯力的労働行爲が、分勞の原理に遺憾なく適合せる如き一方的なる仕事よりも、一層豊かな生計と、健康上より云ふも又道徳上より云ふも、一倍満足なる生存を與へてゐる人の數に存するのである。而して此の數はドイツ帝國に於ては豫想外に大なるものがあり、全有業者の三分の一を甚しく下らざる有様である。

二 共 力

聯力はその現はるゝ形式に於ては極めて豊富なるものあるに拘らず、その原則は可なり簡單にして、即ち「過剰せる力は之を有利に使用せざるべからず」と云ふことに歸し得るのである。之に反し共力の原則に至りては、それは決して斯

かる易々たる型式に歸せしめ得るものではない。今之を概言すれば、不十分なる個別力を補つて目前の労働任務を果し得るやうにさせる事が問題となつてゐるのである。然るに此の各箇労働者の力の不十分と云ふ事は、更に各種異なる原因より生じ得るものであつて、或は労働者のある一定の精神的素質によりて單獨にては持續して仕事を営み得ざるることあり、或は體力の不十分と云ふことに基くことあり、或は技術上の事情より或る仕事はそれと異なる他の仕事なくんば営まれ得ざることとなり得るが爲めによるものがある。此等三つの場合に應じて夫々相異なる三種の共力を生ずるものであつて、第一のものはこれを寄合仕事¹⁾と稱し、第二のものはこれを合力²⁾と呼び、第三のものはこれを連力³⁾と云ふことが出来る。吾人は今其等を順次に觀察し行かんと欲す。

(一) 寄合仕事は多數の労働者が集まつて共同の行動を爲すのであるが、しかも各人は己が仕事の繼續に就きて他の人に何等依存してはならないといふ場合に行はれるのである。従つて各人各自欲するが儘のテムボを以て獨立に労働するものにして、此の集合の唯一目的は労働に際して仲間を得、依つて以て談笑歌謡の樂しみを得ることを得て、唯一人働いて虚然として物思ひに沈むなきを得るといふの點に存するのである。

己が仕事は他人より妨げられずして孤獨にて之をなす時に最もよく營まれ得る學者が此の事を聞かば、或は憐憫の念に眉を擧めて、斯かる事は眞面目なる解釋を下すの値ひなきものなりと爲すかも知れない。されど眼を轉じて一度、麻打場又は小川の岸の洗濯場にある田舎女の一群を見、蕪昔畑の草取をする出稼農民の一隊を見、多數集まつて働く草刈人の様を窺ひ、更らに室内裝飾人やイタリヤの葡萄酒に働く女達が唄ふを聞く人は、これに就いてかの學者とは可成に違つた考を懐かざるを得なくなるであらう。蓋し人間はその文化の程度の低下するに従つて、唯だ單獨に放置せらるゝ場合は、持續的にして規則的なる行爲を決意することいよゝ困難となるに至るものである。

1) Gesellschaftsarbeit od. gesellige Arbeit 2) Arbeitshäufung
3) Arbeitsverbindung

然れども此の寄合仕事なるものゝ意義に對する最もよい證明は、それが世界中到る處に一種の組織を作り出してゐる其處にある。即ち野蠻人の間にある公開の仕事場及び寄合場¹⁾。ロシアの家内工業者の共同仕事場、我國の百姓娘の間にある紡績室¹⁾を想ひ出させ度い。此の我が國に於ける百姓娘の紡績室なるものは、十八世紀の官憲が極めて非常識な方法を盡して禁制したものであるが、今日に至るまで、尙ほそれは共同仕事をなす夜間の集會場として、多數村落に存續してゐるのである。而して到る所に習俗は此の集會に踰越、響應及び其の他仕事を一層愉快ならしめ得る慣行を結び付けてゐるのである。今次に掲げる三四の例は、以て此等の設備が極めて廣く行はれてゐることを語るに十分なものがある

[110] シュカイネン著前掲書、三七四頁。Zischr. f. Ethnologie 誌、第二卷、三一八頁のヘルマン(Ermann)の所説(「サツチャに於けるコルネシユ族に就て」)。ヤコブセン著『パルタ海の島嶼界旅行』(Jacobsen, Reise in der Inselwelt des Banda-Meeress) 一一三頁。フアンシュ著『サモア群島紀行』(Finsch, Samoafahrten) フンシュ編『バートマン、スコーク兩氏旅行記』(Burton's und Speckes Reisen, bearb. von Andree) 六四、一一七、三三三頁。ナハティガル著『サハラ及びスーダン』(Nachtigal, Sahara und Sudan) 第二卷、六二四頁。第三卷、一四六、二四四頁。シュロイニツ伯著『戦時及び平時に於ける東アフリカ横斷記』(Graf Schweinitz, Durch Ostafrika im Krieg und Frieden) 一七一頁。スタンレー著『時間大陸横斷記』(Stanley, Through the dark Continent) 第二卷、八二頁。同人著『リッティングストン遊記』(Wie ich Livingston fand) 第二卷、一七二頁。ヤンセン著『オーストラリアの叢中及び珊瑚海邊に於て』(Semon, Im austr. Busch und an den Küsten des Korallenmeers) 三五三頁。尙ほ拙著『勞働と律動』(Arbeit und Rhythmus) 三五頁以下、六八頁及び本書三九頁を参照せよ。シュルツ著『年齢組合と男子集團』(Schurtz, Altersklassen und Männerbünde) 一四〇頁。

ファイジ諸島にては『多數の女子がタバの着物を作る爲めに常に一所に集合するのであるが、時には一村の女子が擧

1) Spinnstube

つて此處に集ることも珍らしくない。又網もて漁する時は「必ず多數の婦人相集りて其の漁獲に赴くのであるが、その際労働は同時に一種の保養であつて、海水浴を爲しつゝ面白可笑しく行つてゐる」。アフリカの多數黑人の間にては女子が公開の仕事場に集合して穀物を搗き又は粉にしてゐるのを見るのである。一宣教師は北アメリカ・インディアンに就いて一層詳細に述べて曰く、「土地を耕し、薪を集め、穀物を搗くことは、女子が他家の女子と相集りてこれを爲すこと再々である。：：斯くして仕事は手輕に營まれるのである。仕事の一段落となれるか、又中間時間中に於ても時々團樂して、其の爲めにその仕事を營み居れる人なり家族なりが仕度せる食物、即ちその家の男が豫め森中より取り來つて作り置ける御馳走を鱈腹喰ふのである。實はそれが最も主なる事柄と見られてゐるのであつて、思ふに、斯かる仕事に出づるものは久しく肉を口にするを得ざりし寡婦孤兒又は其の他餘りに裕かならざる婦人なるが故であらう。此の寄合仕事に際して夫等婦人の間に行はれる無駄話そのものが已に彼等に取つては大きな慰みにして、其の爲めに出來るだけ長時間、斯る仕事に止まり居ようとの念慮を生じ、土地の耕耘を業としてゐる村の凡べての住民の間を順次廻り歩いてゐる」と。

〔一一一〕 ヌスラー著『南洋事情』(A. Büchler, Südsee-Bilder) 二二四—二二六頁。

〔一一二〕 ヘックウエルダー著前掲書、二四九頁。それと類せること南アメリカにあり、エーレンライヒ著『ブラジル人種學論考』(Ehrenreich, Beiträge zur Völkerkunde Brasiliens) 二八頁に出づ。

労働と娛樂との同じ様な結合を示すものは、自然民族の間に殆んど汎く存してゐる公開社交場である。それは男女の性により分たれるを普通とし、未婚男女の爲めの設備は殊に多きを占めて居る。これは共同仕事の爲めの集合所といふのみに止まらずして、時に寢室ともなることあり、常は舞踏所、遊戯場となつてゐる、歌ひつゝ、笑談を云ひつゝ、無駄

話をなしつつする所となり、此處に於ける不器用者の拙き仕事は嘲笑的となり、勉強家又は器用人の手際よき仕事は賞讃を博してゐる。

斯かる設備の色褪せた姿を現時に至る迄我々の間に維持してゐるものは、百姓娘の間に現存行はれつゝある紡績室が即ち之である。それはドイツの各地方に一定の不文の規律や法律を有してゐた。「ブラウンシュウィックでは、冬が近くなつて野良の仕事が終りとなれば、紡績室が開かれたのである。それは大概の村に於ては十一月十一日の聖マルチニ祭の日が始まつて、禁肉祭まで続く。如何に遅くも復活祭の日曜日までである。思ふに其の時節ともなれば、他の仕事が始められねばならなかつたからである。此の夜の集りは一定の紡績仲間メンバーの家を、今夜は此家、翌る夜は彼家といふ風に、順繰りに催されたのであるが、斯かる仲間を作つてゐるものはお互ひに能く氣心を知り合へるとか、親類同志などいふ關係の娘達の四人精々多くて八人である。其の基礎になりゐるものは下婢達であつたが、百姓の娘さん達もそれに加はつたのである。年を取つた人達は一人で紡いでゐた。始めの間は婦人達ばかりであつたが、やがて八時頃ともなれば、仕事を切り上げて來た若い男衆が訪ねてくる。そして初めの程は神妙にしてゐたが、段々と無遠慮にその仲間入をして來た。抑々その紡績室の據つて起れる目的は娘達の目覺ましき阻勉といふことにあるのであつた」。撚絲を作る一週分の仕事が可能一定して居り、もしそれを爲し了へざる者があれば、その娘は衆人より嘲弄された。又時々競争の紡ぎも行はれて、其の時は何時も激しい競争が行はれた。夫々に一種の労働警察とも云ふべきものが行はれてゐたのであつて、例へばナッサウ地方にては誤つて居睡をする娘あらば、木炭もて口髭を描き、絲を切り又は縫らす娘あれば、臨場の若い衆はその撚絲竿をもぎ取つても差支へなく、それを取戻す爲めにはキッスをその若い衆にしてやらなくてはならぬ慣習の存する如きそれである。

〔二三〕 斯かる設備は同様の風にて到る處に行はれてゐる。ヘンリー・エヌ・ランドナー (Henry S. Landor, Auf verhoerenen Wegen, Reisen und Abenteuer in Tibet 八九頁以下) は南部ヒマヤ前峰中のシヨカ族の間に此の種の設備あるを發見したのであつて、彼等の間ではその爲めに特別の寄合所 (Rambang) がある相である。

〔二四〕 アンダーソン著『ブラウンシュユイク人種學』(Dr. Andrew, Braunschweiger Volkskunde) 一六八頁以下。Zschr. d. Ver. f. Volkskunde 誌、第三卷二九二頁以下。第八卷、三六六頁。第十二卷、一八一頁以下、三一六頁以下。Blätter f. hess. Volksk. 誌、第二卷、一〇一頁以下。尙ほ詳細はホエッケル著『上部ヘッセンの民謡』(O. Böckel, Volkslieder aus Oberhessen) 一三三頁以下。

〔二五〕 Zschr. d. Ver. f. Volksk. 誌、第八卷、二一五頁以下の紡績競技に就いての興味ある報告。尙ほ拙著『労働と律動』三版、八九頁以下参照。

〔二六〕 ラウジッツのウエンデン族にては降誕祭前の最後の紡績會の際に、消けた者の裁判がある。ハツプト、シュマーレン共著『上部及び下部ラウジッツに於けるウエンデンの民謡』(Haupt u. Schnaler, Volkslieder der Wenden in der Ober- und Nieder-Lausitz) 第二卷、二二〇頁——その仲間にて行ふ労働警察とも稱すべきもの、其れに似たる例は他種の農業的共力の間にも存す。即ち林・穀類の收穫、打采、耕作、麻打ちの時等にこれを見る。ホエルマン著『ティロール農事年鑑』(Hörmann, Das Tyroler Bauernjahr) 一八九九年インスブルック版。五〇、五二、六六、七〇頁以下、七五、一二九頁参照。

斯かる紡績室は近世の技術的變革の犠牲となり終つたのであるけれども、然かも今日も尙ほ、田舎には到る處弘く、冬の夜長を娘達が熱ろに或る家に集つて、仕事をするといふ風が遺つてゐる。それと似た事が田舎に残つてゐる二三の家内工業に行はれてゐるのであつて、例へばエルツ山嶽地方のレース編みの如きそれであり、今も尙ほ此の娘達のかゝる集りを稱して "ze Rooken bein" (撚絲竿に行く) と云つてゐる⁽¹⁾。斯かる風習の十分なる發達は、ロシアの家内工業に於て見ることが出来る。彼地に於ては男女のクスタリ⁽¹⁾ (小手工業者) は自分等の家にては働かずして、多勢の仲間が

1) Kustari

いや同じ職を持つ一村の家内工業者が、或る特設の仕事場に集合するのである。此の仕事場は、大なる百姓家を借りて之れに充用し、或はその爲めに特に建てたる工場を以て之に宛てゝゐる。而して、斯かる共同の仕事場を呼ぶに、相違らず「紡績室」(Zswetjolka) と云ふのが最も多いが、「工場」と呼ぶことも再々である。この設備が行はれるのは例へば家内工業的木綿機織、製絨、絹絲取り、靴製作、玩具製造等に於てあり、女子向の仕事では普通には唯娘達のみが赴くこととなつてゐる、既婚の婦人は家に止つて仕事をしてゐる。『古老の言によれば、木綿機織は初め殆んど主として Zswetjolka に於て営まれるたりしものなるが如し。蓋し此處にては機織熟練者の不斷の監督の下に、機織機械取扱の技術を早くしかも容易に習得し得られる便あるによるのである。而して初めの程は居室がこの Zswetjolka となつて居たが、後に至りては住宅より離れて Zswetjolka を建てることとなつた。今日にありても尙ほ若き人々、勤勉なる織工等は己が住宅に於てよりも此の Zswetjolka にて仕事を爲すを望んでゐる。蓋しその第一の理由は其處にては集まつて仕事を営み得るといふことに存し、第二の理由は斑なく且つ利益多く仕事を爲し得るといふ點に存するのである。己が家では織工は家事の雑用に妨げられること多く、加ふるにその部屋の狹隘と陰暗とを以てす。のみならず人間と犢や子羊との雜居せること珍らしくなく、爲めに空氣は甚しく汚穢なるを免れ得ない。且つ自家に放置せば綿は濕氣を吸収して微を生じ易き缺陷あるに、Zswetjolka にてはその貯藏にも好都合なりてふ長所がある』。

〔二七〕 『労働と律動』九七頁以下。

〔二八〕 その詳細に就きてはシュテルマツヘル著『ロシアに於ける室内工業敘述の爲の論考』(Stellmacher, Ein Beitrag zur Darstellung der Hausindustrie in Russland) 一〇六頁以下。キヤプノフ著『ロシア管線工業論』(M. Korbunoff, Über russische Spitzenindustrie) 一八六六頁、ウィーン版、二三頁以下。

斯くの如くにして、此の寄合仕事なるものは、これ先づ以て人間の社會性本能に歸せしめ得べけんも、極めてよく經濟主義に適ふを知る。人は共同して働くときは、單獨にて仕事を營むよりもヨリ繼續的に働くことを得るのみならず、其の間に生ずる競争によりて總じて一層良好なる成績を期待し得るのである。斯くて勞働は快樂となる。而してその結果は結局生産の増加である。

(二) 合力とは單一の仕事を果す爲めに多數同種の勞働力を提供することを稱するのであつて、例へば重き荷物の積込、材木の曳引、草原の刈收、獵の逐ひ出しの爲めにする如きこれである。然れども此の際果すべき仕事はそれ自身一個人の力量に過重なるを必要條件となしるるには非ずして、一個人にてはその仕事を適當なる時間に完成せしめ得ざる事が已に多數勞働者の使用を十分有利ならしめてゐるのである。殊に此の合力の最も其の樞要を發揮し來るものは、一定の季節に關係し又は天候の影響を蒙る如き仕事に於てである。更に社會的顧慮よりして、或る仕事の促急を命じ得る如きそれである。

如上の事情は已に早くよりして世界到る所に承認されてゐる相隣者相互扶助の義務に基いて成立してゐる合力と云ふ一種の社會的組織を生ぜしめたのである。吾人は之れをかの新スラヴ族の間に用ゐられてゐる名稱に基きて「請願勞働」と呼び得るのである。或る家にて其の一家の手のみにては到底爲し遂げ得ずしてしかも止むに止まれぬ仕事あらば、隣人はその手傳を頼まれる。斯る場合には隣人は定めの際にその手傳を爲すのであつて、仕事を頼む家の主人が從來の慣習によつて出す響應以外には、別段何等の報酬をも受けざることとなつて居り、唯だ何時か必要な場合には、己れも亦同様、その隣人より手傳を得るといふことを期待して働いて遣るのである。其の仕事は談笑、歌謡の間に、樂しき競争裡に行はれるのであつて、夜となれば多くは舞踏又はそれに似たる慰樂が催されるのである。

〔二九〕 多數の例が拙著『勞働と律動』第五章に集録されてゐる。

斯かる風習は全世界に汎く行はれ居る所にして、南洋諸島民の間にすらその跡を探ねることが出来る。例へばニューボムメルンにては、魚捕籠又は大漁網を作る爲めに多數の家族が聯合するを例とし、『その籠が初めて水に入れられる前には、大饗宴が催され、それを作るに與かれる凡べての人々が之に列するのである』¹¹⁰⁾。

〔三〇〕 マーキンソン著『バスマルケ群島』(Perkinson, Im Bismarck-Archipel) 一一五頁。

チャイロロ(ハラマヘラ)にては、村落共有地の一部を開墾せんとする時、木を伐り倒す手傳ひに十人乃至二十人の親戚の者を呼び集めるが、其の報酬としては、此の親戚の者等は將來何時か他の仕事に手傳つて貰へるといふことが考へられて居る。パディー米の植付け、米の收穫に際しても亦同様である。¹¹¹⁾『誰かゞ家を建てんとせば、食事を供してその親戚の二三に、干潮に際し建築用材を切り倒す手傳を頼むのである。…ザゴの葉にて家を葺く時は、更に多數の手傳人これに招かれ、其の仕事終れば宴を催し、普通は酋長がこれに臨むこととなつてゐる』¹¹²⁾。

〔三一〕 Zischr. f. Ethnol. 誌、第一七卷(一八八五年)七〇頁以下のリーデル(Liedel)の所説。ニューギニアにもそれに似たことがあつた。即ちフィンシホ著『サモア群島紀行』(Finsch, Samoafahrten) 五六頁以下。南ミンダナオのパコス族にあるものは Zischr. f. Ethnol. 誌、第一七卷、一九頁以下のシャーターンベック(Schadenberg)の所説に見え。

〔三二〕 ヨーデル著前掲書、六一頁。尚ほクバリー著『カロリン群島研究人類學的論考』(Kubary, Ethnogr. Beitr. zur Kenntnis des Karolinen-Archipels) 一六四頁。Journal of the Anthrop. Inst. 誌、第二三卷(一八九四年)一六一頁以下のホース筆『ボルネオ土人』(C. Hose, The natives of Borneo)

中央アフリカのマディー及びマルーと稱する種族にては、『各人が夫々自己の土地を耕作しつゝあるのであるが、それが非常な廣さで、自分等の家族の手に餘る時には、友人や隣人の手傳を頼むのである。斯かる際には別に報酬の支拂とい

ふ様なこともしなければ、又それを貰はうともしない。たゞ彼等にはこの様な手助けは必要な時には何時でも受けたり與へたりする心構へが出来てゐるのである。斯かる風習はアフリカに於ては一般に行はれるが如く、その殊によく發達してゐるのは中部コンゴ地方にして、一時的の共力(Tano)があらゆる生活關係にまで入り込んでゐる。『ガラ族間にては一村の住民が打禾場に集合して、打禾の調子に叶へる音律的な歌を誦ひながらドウラの穂を打禾したり、穀物を篩つたりするのである』。家を建つる時の請願労働も屢々行はれる。マダガスカル^(マダ)のホヅァ族の間にて、聲望ある人の墳墓を築く際には、その重き岩の運搬に、其の親族及びその氏に屬する者のみならず、その人の住みたる村の人全體が之に加はることがある。『斯種の勞役に對しては其の報酬は金もて支拂はれること決してなく、多くの場合長き日數を要して遠い距離を重い石を運搬して行く時は、その人々に食料を供しなくてはならぬこととなつてゐるだけである。殊に多數の牛を屠らなくてはならない。斯くの如くに彼等は相互扶助をなすの義務を有するが爲めに、此の民族は時間の大部分を斯種の勞役に費してゐる。故にこの地方の街道等にて二百人より三百人位の男女及び奴隸の行列が丈夫な繩を斷續的に引つ張つて、粗末なる檣架に結び付けたる石を動かしてゐるのに出會することが再々である』。

〔三三〕 Proceedings of the Royal Society of Edinburgh 一八八三年—一八四年、三一〇頁に於けるフェルキン(Rob. Felkin)の所説。

〔三四〕 Zschr. f. Ethnol. 誌、第六卷(一八七四年)二七頁のエンデマン(Endemann)の所説。ホッペ筆ウィスマン編『ドイ

ツ國族の下に縱斷せるアフリカ』(Voyage bei Wissmann, Unter deutscher Flagge quer durch Afrika)三一頁。ナハティ
ガル著『サハラ及びスーダン』(Nachtigal, Sahara und Sudan)第三卷、二四九頁。ホスト著『アフリカ法理論』(Post, Afrika-
nische Jurisprudenz)第二卷、一七二頁。

〔三五〕 トナー著前掲書、六四頁以下。

〔三六〕 バウリチュケ著『北東アフリカ人種學』(Paulitschke, Ethnographie Nordost-Afrika)第一卷、一三四、二一七頁。

〔三七〕 シュルツ著『アフリカの工業』(Schurtz, Afr. Gewerbe)一一頁。

〔三八〕 シブナー著『マダガスカル』(Sibree, Madagaskar)二五五頁以下。

ゲオルギア人は葡萄摘、玉蜀黍や小麦の播種收穫、森林よりの木材の伐採運搬に方つて此の請願労働を應用し、セルビアにては草刈、玉蜀黍畑鋤耕、李收穫、葡萄摘のみならず、紡績、機織、毛氈製織等に當つてもこれを用ひ、ロシアの多くの地方にては枯草穀物の收穫、甘藍畑鋤耕、伐木、肥料運搬、耕作、並びに女子の間には紡績、更らに家の掃除にまでもこれが行はれてゐる。ドイツに於ては田舎にては殆んど一般に家を建てる時に、尙ほ所によりては農業的副業(麻選み、豆の收穫、羊の洗淨)に今日も尙ほ残つてゐる。斯かる請願労働はかの閉鎖的家内經濟の彌縫手段なのであり、従つて企業的經營の發生と進歩によつて益々衰頹し行くを免れ得ざるものなることは容易に解し得る所である。然りと雖も、曾て請願労働が使用されてゐた多くの場合には、今日にありても尙ほ機械を使用して労働に必要な時間促進を期待し得ざる時は、大農業家は多數労働者の使用を以て之に代へつゝあるのである。而して同時に之れを行ふならば、生産過程の後段を一層廉價ならしめ得る如き場合には、合力は一生産過程の初期段階に應用されて、その獨得の意義を發揮するものである。例へば或る草地在一人の労働者にては多分三日を費して僅かに刈り盡し得られるとする。然るに其の土地の所有者は出來得べくんば六人否それ以上の草刈人を使はんとする。蓋し斯くなさばその仕事は午前中に全く終を告げて、同時に全草を乾燥せしめ、かくて枯草を一つに纏めて運び行くを得るが故である。再々運搬の手續をかくるは生産費をして徒らに高からしむるに過ぎぬであらう。

然し斯かる種々な理由が存しない場合にでも、或る農業家の所有する土地が他の人々のと夾雜してゐる如き場合に於

ては、彼はその凡べての労働者を異つた土地に分散さすよりは、何時でもそれを一團として一個所に使用し、一の土地の労働を終つて他の土地へと順次に移行行かせようとするであらう。此の理由他にあらず。團體にて働くは、單獨にて爲すよりもその結果良好にして、それに要する時間短少に、且つ斯くすれば何人も他の人々に後れんことをこれ恐れ、斯くて得られたる結果は直に眼前に展開せられ、労働の元氣を鼓舞するものあればである。之に反して容易に抄の見えずして、その結果を見通し得ざる如き仕事にありては、兎角元氣の沮喪を生じ易き傾向がある。斯くの如くにして前の例に擧げたる六人の草刈は普通に努力して、しかも一人が單獨にて普通に勉強して要したる時間の六分の一を以て仕事を爲し終るといふのみには非ず、其れよりも遙かに短時間にて事足るのである。況んや主人公自身が共力せざる如き大經營にありては、もし労働者を分割すとせば、耕地面積單位に對する監督の費用が一層大となること附加さるゝに於てをやである。

〔三九〕 已に彼の老テール (A. Thiery) による、その著『合理的農業の原則』(Grundriss der rationalen Landwirtschaft) 第四版、一八四七年、ベルリン版、第一卷、一二頁以下に、次の如き規則をのべてある。『大經營にあつては、決して一時に多數のことを企てゝはならぬ。殊にそれが非常に遠隔の土地にあつては最も不適當である。かるが故に出來得るだけ一つの仕事を終つて次の仕事へと順次に移つて行く様にし、以て其の一つ／＼に全體の労働を使用して、これを完成せしめる様に試みなくてはならぬ。こは一方よりは監督の立場より、他方よりは仕事をなす人々の間に或る一種の競争心を生ぜしめる上よりである。然るに大なる仕事にてありながら、僅かの人が使用される時は、その前途頗る遠遠なるに殆んど呆然自失し、その進行の遅々たるに元氣を沮喪せしめ、範圍のあまりに廣き爲め労働者は己が仕事の進行を解するに苦しむこととなる。故に斯くの如き粗大な労働にありては、人及び獸はその寡なきんよりは寧ろ多きんことを以て良しとするのである。——然るに小經營となれば、必要以上の人を配置せざる様氣を付けなくてはならぬ。然らずんば銘々が邪魔になり易く、お互ひに仕事を他人に押し付け勝

ちになるのであつて、兎角に仕事を實際より大袈裟にやり易くなるものである。』セツテガスト著『農業とその經營』(H. v. Sestegast, Die Landwirtschaft und ihr Betrieb) 第一卷、三一三頁。第三卷、一三八頁にもそれに似たことが述べられてゐる。

合力は、手もて動かす簡單なる道具を以て、もしくは全くそれなくして行はれる非精練労働の範圍にのみ殆ど主に限られてゐる。従つて技術の尙ほ未だ進歩せざりし時代にあつては、それは非常なる延長を見たりしものなるが、労働器具の完成するや、いよいよ衰亡の徴を示すこととなつたのである。されど尙今日に於ても、それには可なりに廣き領域の残されてゐるものがある。その最も大規模なる例を示すものは、昔も今も軍隊である。

〔四〇〕 殊に古代エジプト人、バビロニア人、日本人、支那人の間に於ては然りであつた。『労働と律動』四二五頁以下参照。扱て多人數の共働に際しては二つの場合が可能である。其の一は、個々の労働者が仕事に當つて力を提供する時間的要因に於て夫々獨立してゐる、その共働は仕事を早く完成せんと目的よりのみ生ずるものにして、これを單純合力と呼ばんと欲する。その例を擧ぐれば、新築に際しての多數の左官、道路に於ける鋪道工の一隊、雪掻き人夫及び土工の一群、草刈人・蕪菁畑耕作者の一列等即ちこれにして、中間形式を示すものは、雁行するアフリカ擔荷夫の一隊、狩獵の際の狩立て人、一つの畑に於ける多數の鋤手等である。

其の二は、個々の労働者の運動が相互に獨立して行はれるに非ずして、或は總體が同時に、或は等しき時の間隔を以て交互的に行はれるものにして、即ち常に調子を取つて行はれるものである。我々は此種の合力を連鎖合力と呼ばんと欲する。これ各個の参加者とその運動の繼起に於て、謂はゞ其の隣者に結合さすものであり、全體の人々が調子によつて集められて一個の組織立てる統體となり、丁度自動的に働く労働體の如くなるが故である。而して此れに屬する労働

1) einfache Arbeitshäufung

2) Arbeitsverkettung

は凡べて、それが長く繼續する時には必ず律動的の経過を取るに至るものである。其の内には固より唯だ一回の力の使用によつて完成せられる如き、例へば一二三の掛聲による多人數の重荷の引上げ、綱にて木の幹を引き倒す等の如き種類の勞働も含まれてゐるのは言ふまでもない。

斯種の律動的に行はれる勞働は、更にそれが各個人の運動が同時的に行はれるか、又は交互的に行はれるかによつて、分れて同時拍節勞働¹⁾及び交互拍節勞働²⁾となる。

〔四一〕その精細は屢々掲げた拙著『勞働と律動』中であつて、それは以下の語についても關係する所が多い。

同時拍節勞働をなすものは、例へば漕艇に於ける兩側の漕手、錨を抜き帆を捲き上げ流に船を曳上げる時の船夫、地行をする時大槌もて太き杖を地に打ち込む土方、一本の綱に大勢掛りて荷物を曳上げる樽揚げ人夫及び凡べての人足、二人四人六人もしくは八人といふ風に棺輿を擔ぐ人夫、行進する軍隊等である。而して其の仕事の拍子は簡單なる一三といふ掛聲、勞働者の合唱歌又は樂器特に太鼓によつて取られてゐるのが最も多い。

交互拍節勞働といふは、例へば交る／＼拍子を取つて木槌にて鋪石を打ち込む三人の鋪石工、打禾場に於ける三人乃至四人の打禾者、鍛鐵の際の二人の鍛冶工、挽穴に於ける二人の木挽き、木材を伐る時の二人の職工、洗濯物を敲き晒し絨氈を敲く時の二人の女の仕事等に見ることが出来る。

故に同時拍節によつて行はれる勞働の主眼點は、各個人の力を遙に超過してゐる全業績を最少の勞働者數を以てその全共働者を同一時點に最高の力量提供を爲すことによつて爲し遂げんとするにある。

交互拍節の勞働にあつては、その仕事それ自身は各個人の手にても爲し遂げ得べき種類のものなるを普通とする。されどそれは通例、個々の運動(例へば鼓竿を以て打禾する時の腕の上下)が長時間を要求する如き困難な仕事である。此

1) Gleichtakt-Arbeiten

2) Wechseltakt-Arbeiten

處で僅かに一人が働くとすれば、彼は一度敲いたり衝いたりすれば、其の後に短かき休息を挟ませやうとするのであつて、爲めに運動の平均は失はれる。そして敲いたり衝いたりする運動は不均勢なる強度と時間を以て行はれることとなり、かくて著しき疲勞を覚えしめるに至るものである。然るに此處に第二、第三の勞働者が加はり來るならば、各人の運動は勞働器具がその加工すべき材料を敲く時發する調子により整調せらるゝに至る。然らば其處に短き調子を得ることが出来、それを持續して行くことも、餘りに煩らはしきことには非ざるに至るのである。此の際各勞働者は自身だけ獨立したまゝではあるが、その運動は仲間の運動と同じ調子もて行はねばならぬのである。斯くの如くなるが故に此處での眼目は、勞働任務の大きさが勞働力を二倍三倍せしめることを要求するといふにあるには非ずして、單獨の力にて營む時は、一定の運動の韻律を維持するに困難なるものがあるといふ點に存するのである。

此の第二第三の勞働者が力を加へることは、一見一個人の力の作用をたゞ二倍し三倍し得るに過ぎざるが如く思はれるが、斯種の連鎖合力も亦、生産力の増高てふ結果を齎らすものなのである。即ちそは各人に對して、力の支出と休憩時とを平等に整調し、依つて以て凡べての人をして其の仕事長時間繼續せしめ得るものあるによるのである。もし一人のみなりせば、疲るればその手を止め、もしくはその運動の時間を遅くするに至る。之に反し勞働の調子の短きことは人の心を爽快ならしめ、寄り合つて仕事を爲すことは競争心を刺激する。何人たりとも其の仕事を繼續することに於て、敢て人後に落つるを屑とするものではないのである。

然るに此の連鎖合力の中にも、勞働者が序列的に聚群を作り、その一人の仕事の進行が他の人の行動と相關的關係を有してゐるといふ風の組織を取り得る所謂自由なる律動を有する二三の勞働に至りては、比較的弱き勞働者をして、尙ほ且つ強き勞働者と肩を比べ行かざるを得ずとの強制の感を懐かしめることが一層明かに現はれて來るのを

見るのである。野に働く草刈りの一列に混つては、何れの人も同様に仕事を果して行かなくてはならぬ。然らずんば其の後列の人をして、仕事を止めさせるか、その鎌で切られる心配をさせなくてはならぬこととなる。建築の爲めに煉瓦を順次に手より手へ渡したり投げたりする助手の一聯にては、仕事全體を停頓させまいとする爲めには、何れの人も煉瓦を次々と等しき早さでもて受け取るやうにしなければならない。

かるが故に、連鎖合力の凡べての種類の特徴となつてゐる斯かる労働者相互の對立的適應なるものは、最も重大なる意義を有する一個の訓練的要素となるのであつて、殊に經濟的併に技術的發達に於ける原始的階級に著しく表はれてゐる非精練作業に對して殊に然りである。否、そのみに止まらず、それ自身にては此處に彼ぶるが如き連鎖的なる運動の結合を必要とせざる如き合力の場合にありても、尙ほかゝる組織が作業を促進せしめる爲めの強制手段として適用され得るものである。斯かる場合には、此の爲めに人工的に調子を取ること（或は一二三と數へ、或は歌ひ、或は音楽を伴奏する等）が必要であり、之に依つてかの單純合力は連鎖合力に移り行くのである。世人が周知してゐる理由よりして軍隊的に行はざるべからざる奴隷労働、自然民族の賦役及び公的労働にありて然りである。

カメルーンに於ては『有名なマホット教の奴隷使役者なる酋長のルギッラは己が人民を百人宛の隊伍に分ち、伴奏される音楽の調子に伴れて土地を耕させる。此等の労働者の後よりは播種人の一隊が同じく調子に合はせて行進し、頸にかけたる袋より種を播くのである』¹⁾ バススト族はその酋長夫妻の私用の料にと定められてゐる畑を鋤いて、それに種を播く爲めに、毎年集合す。カサリ¹⁾は此の様を敘して曰く、『此の際數百の黒人が一直線に列んで、一點の税を打つべき所なき正確さを以てその鋤を同時に上げたり下ろしたりする態は誠に見事なものである。空氣は労働者をして調子を取らず助けとなる歌の聲もて鳴り響く。酋長は通例その場に臨む義務があり、數頭の肥牛を屠つて鋤耕者を養

1) Casalis

應するの勞を取るのである。これは酋長のみに限らず一切の階級に屬する者がその仕事を軽減促進せしめんが爲め、同様の手續をするのであるが、普通の人間ではそれが相互扶助的のみに行はれてゐる』と。

【四二】 ヲイネック著『ヲイック植民地圖説』(Meinecke, Die deutschen Kolonien in Wort und Bild) 三五頁、挿圖共。

【四三】 『バススト族』(Les Basoutos) 一七一頁、併びに挿圖。なほこの挿圖はゲルラント著『人種學地圖』(G. Gelland, Atlas der Ethnographie) 一八七六年、ライプチヒ版、二二圖、二五號にあり。それに類することをエンデマン(K. Endemann)は Ztschr. f. Ethnol. 誌、第六卷、二六、三〇頁にツゾー黒人族に就いてのべて居り、パウリチユケ著『北東アフリカ人種學』(Paulitsche, Ethnographie Nordost-Afrikas) 第一卷、二一六頁にはハラールに於けるガラ族に就いて記し、シャードンマック(Schadenberg)は Ztschr. f. Ethnol. 誌、第一七卷、一九頁以下に、南ミンダナオに於けるバヨホ族に就いて書いてゐる。

此の最後の例は實に請願労働より莊園労働への過渡を極めて明瞭に示すものである。此れと類似の事實はスーダンに於ても之を見るを得べく、彼處にて殊に都市城壁を築造し又は改築するに際しては、必ず音楽の伴奏の下に行はれるのである。尙ほマレー人、支那人の間にも、之に接するを得べく、古來國家の賦役は太鼓の調子によつて規整されてゐたのである。ヨーロッパにありても、この手段が試みられずには居なかつたのであつて、バルチック海地方に於ては十八世紀に及びても、尙ほ地主は體僕をして收穫をなさしめる際には風笛の調子に伴れて働かして居たのである。否、實に今日の文化諸國に於てさへ、尙ほ斯かる人工的手段によつて保護されてゐる連鎖合力に接するを得べし。そは即ち軍隊の歩武堂々たる運動である。多數の人をして力を發展せしめる完全なる統一に訓練することを常に眼目とし、一個人にして歩度を少しく誤るあらんか、全軍の運動に支障を來すといふ如きこの軍隊に於てである。

【四】 いよく、共力の最後の種類を敘べることとなつた。そは實に連力と呼ばんと欲するものである。抑々或種の生産

任務にあつては、之を果す爲めに、異種の労働の同時的協働を必要とするものがある。此の際此等の労働は相互に補充し合ふ所謂「補足的労働」にして、到底一人の労働者にては成し遂げ得ざるものなるが故に、多数の異なる種類の労働者が一個の纏つて分離すべからざる一聚群に結合されることを要する。斯かる聚群はバイエルン及びオーストリアに於ける山林労働の許では *Pass* と呼び、他の地方に於ては *Rotte*, *Truppe*, *Bande* と稱してゐる。

〔四四〕 シュメツラー著『バイエルン辞典』(Schmeller, Bayer. Wörterbuch) 第一巻、四〇九頁を参照。セツテガスト著前掲書には斯かる聚群を稱して *Pass* と云つてゐる。此等の語源は不明である。——イタリヤ語の *squadra*、フランス語の *escouade*、英語の *squad*, *gang*, *set* と比較すべし。

此の例證は原始生産に於て可なり多数を發見し得るのである。枯草、穀物の搬入には積載者、積込人、後掃除人、これを束にするには荷造人、搬入婦相集まりて聚群を形作つてゐる。穀物を刈る際には、それを拾ひ集める第二の人が必要である。薯を掘る時にはその後を擇び集める人が無くてはならぬ。工業に就いて云へば、鍛冶匠と鑄番、綱工と車廻し、左官屋と土捏ね、舗石工と敲下職といふ如き取合せがある。又他の範圍に見れば、料理番と焼串かへし番、給仕人、密番と家僕、街鐵では運轉手と車掌、漕艇では漕手と舵手、更に進んでは獵師と勢子、鑄押しと大オルガン樂手、鼓手と笛人、俳優の一座、樂隊がある。而して斯くの如きの表は尙ほ疑々として續き得るであらう。

今此等凡べての事例につきて考ふるに、夫等は分勞によつて成立しそして後に聯合されるやうになつた組織ではなくて、それ自身にては一つも獨立しては成立し得ず、従つて常に他の者との提携によつて初めて生じ來つた如き全く異種の行爲なのである。實に此等の労働は其の進行に方りては相互に相關係し合ひ、相互に相扶け合ひ、相集つてはじめて渾一せる統體を形作つてゐるのである。従つてそれに參加する労働者は互ひに相應じ相適し居ざるべからず。一人は必

ず他人と相携へて働かざるべからざるものにして、他人を缺いては到底何物をも營み得ざるものである。孤立無援にしては、彼の労働は何等の効果をも表はし得なかつたであらう。

斯かる連力にありては、其中の或る一行爲が指導的或は統御的と稱され、他のものは隷屬的にしてその下に仕へてゐるといふ關係となりゐるを通則とする。従つてこれに従事する労働者間の人的關係も亦、隷屬關係となりゐること珍らしからず。即ちもし指導的労働者にして獨立しゐるとすれば、技術上隷屬してゐる労働者は賃銀關係に立つやうになる。連力が或る一企業に附隨して行はれる場合には、全體の仕事は共通の賃銀率を與へられるのを常とし(團體請負)、例へば葉捲煙草製造人とベーバ貼女工、硝子吹き工と搬出者の如きである。斯かる施設は一労働者の仕事が一若くは數人の他の労働者の仕事より分割され得ぬ場合に於ても、個數賃銀制を應用し得る手段を與ふるものであるが、それは多くの場合にかの從屬的労働を營む者に不利益を齎らし勝である。

〔四五〕 シュロックス著『工業報酬の方法』(Schloss, Methods of industrial remuneration) 六一頁以下参照。

總じて共力の此の形態は、道具技巧の尙ほ未だ發達しざりし段階に屬するものにして、文化の漸く進歩するに及んでは、この隷屬的労働は動物若くは機械の力によつて補充せんとするに至る。その最も較著なる例は犁であつて、初期には夫れを曳くに人力を用ひたりしもの、漸く牛をして曳かしめるに至るが、然かも此の連力はなほ相當期間は犁扱人の外に、一人若くは數人の馭者を要するのであつて、これが遂に完全なる犁の構造によつて不要となるまで必要であつたといふ風にして存続したのである。

〔四六〕 比較的高價なる道具を要し、其の連力を營む者の一人がこれを所有し、他の者は彼等の労働力を提供するに過ぎざるが如き場合には、連力の組織に興味ある變形を生ぜしめる。北方ロシアに於ける漁業、又は土地の墾き爲め六乃至八頭、又はそれ以上

の家畜の使用を必要とする鋤耕等にありて特に然りである。ウエールズ、アイerland、スコットランドの例はシーボム著『英國の村落團體』(Seeborn, Die englische Dorfgemeinde) [フンヤン譯] 八一頁以下及びマイツェン著『西ゲルマン族及び東ゲルマン族、ケルト族等の移住及び農事』(Meitzen, Siedlung und Agrarwesen der Westgermanen und Ostgermanen, der Kelten etc.) 第一卷一二二頁以下。第二卷一二九頁以下。アビシニア山嶽地方に於けるボス族に就きてゴスト著『フリカ法理論』(Post, Afrik. Jurisprudenz) 第二卷一八四頁以下は類似の例を掲ぐ。アルメニア人に就きてはタラヤンツ著前掲書、一二頁以下に、ゲオルギア人に就きてはゴギチャイシュウイリ著前掲書、二四頁に、モンテネグロ人に就きてはゴグイック著『モンテネグロの法律及び裁判』(Popovic, Recht und Gericht in Montenegro) 第七九節に述ぶる所あり。

終りに臨みて更に力説せざるべからざることがある。即ち共力の全活動範圍は、聯力のその如く、主として資本無き若くは資本に乏しき經濟の範圍と時代とに屬する事、之である。夫等は實に經濟上の弱點より脱却せんとする彌縫手段である。然かも斯かるものとして、夫等は大きな進化的意義を有してゐた。即ちそは人間を秩序ある時間の分割と時間の節約とに慣れしめ、總體目的に隸屬するの念慮を起さしめ、規則的にして力強き勞働に教育したのである。而して其の起源に於ては、唯だ習慣にだけ基いてゐたのであるが、此の二形式は時と共に漸く奴隸制度及び體僕制度の如き法的強制状態を發生せしめる動機をも與ふるに至つたのである。

此の聯力と共力との原則は曾ては永續的組織を創り出しはしなかつたのであるが、永續的なる仕事は能く之を創り出したのである。人間がその強大なる意志によつて結合されて共力を營むに方りては、假令其處に鐵の知識の存するなく、輓轂あるなく、槓杆、螺旋、滑車の如き極めて簡單なる機械的助力すらこれを缺くありとも、尙ほ且つ彼は如何に偉大なる仕事を成し遂げ得べきものなるかを知らんと欲せば、乞ふ、ナイル河の流域に巍然として聳ゆるピラミッドとオベリスクとを見よ。メソポタミアの巨市の廢墟と古代アメリカ文化民族の建築とを觀察せよ。

然り而して此處に述べた此の二個の現象は、それが概念的に確定されてゐるが故に、囚はれざる見地に立つて判ずれば、夫等は學問に對して決して全然無用の礎石にあらずと爲し得るであらう。固より勞働の學説は大いに此れ以上の完成を必要とする。本講に於て多くは唯だ示唆し置きたるにすぎざりし觀點も、これを追究し行かば、此の地盤の上に尙ほ多大の獲物を望み得べきことを容易に示す事であらう。已に今日にありても、聯力及び共力には、從來殆んどそののみ攷究されてゐた分勞に比して、其の間に遙か繊細なる心理的要素が協力しつゝあるものであることは明瞭である。然り而して此等一切を闡明し得るは、思索の力に富み内省に忠なる人を俟つて、初めて期待し得べきものなるは此處に贅言の要無きを思ふ。

八
分
勞

今日多數の科學の中には、通俗的な眞理がある。其處で問題となつてゐるのは一般的な意味を有する教義なのであつて、其の成立の頭初に當つては、夫等は人間認識の確乎たる成果として、我々人類の知識の寶庫に珍藏せらるべく、斯くて不動不滅に保たるべきであるが如くに見えるやうな内的及び外的な完成がその創成者によつて與へられたのである。斯かる教義は屢々驚くべき速度を以て學者の一般的思想内容に織り込まれるに至る。斯くてそれに固有してゐた手輕に調法な特徴は、それを化して思想交通に於ける一貨幣たらしめ、遂には元來その通用する知識の範圍を超えて、廣き範圍にそれが流通を見るに至るものである。其等がかく一方に、教養ある世界の知識及び言葉の寶庫に入り行くことは、他方に於ては更らに、それが生じたる狭き研究範圍内にその勢力を固からしめる働を有するものである。而して此の狭き研究範圍に於ける認識が駿足なる發達を遂ぐるや、他の全學説が倒壊し改造さるべき運命に瀕するも、かの通俗となれる教義は尙ほ且つ何等犯される所なく、その存立を繼續するの奇現象を生じ來ること、宛として甚しき勢もて繁茂し行く有機體によりて覆ひ包まれてゐる無機體のその如くである。

余の考ふる所にして誤なからんか、分勞に關する經濟學説も亦、如上の關係に立つものである。抑々分勞の學説は、その今日の形態より云へばアダム・スミス¹⁾に遡るべきものであり、夫が一般的に行はれるに至つた爲めには、其處に外的事情も亦、助力するものがあつた事は否むことの出來ぬ事である。而して此の外的事情とは即ちその分勞の學説が多數の書物を漫讀する世間の多數者も尙ほ且つ觀過し得ざる彼のクラシックの著書の第一卷第一章に記されてゐるといふその事である。云ふまでもなく、アダム・スミスはかの學説の創成者ではなかつた。彼は一七六七年に刊行された其の國人アダム・ファーガッソンの²⁾「Essay on the history of civil society」に其の要點を負うてゐる。然かも彼の學説が一切の後人より承認せられるに至れるは、唯だ彼の講じたる形式が輕快なりしが爲めなのであつて、實に彼の學説は輕

1) Adam Smith 2) Adam Ferguson

妙なる形式を取つて、他の學問にまでも侵入し行き、一切の學者に對し斯かる形式に於て流暢なる思想となるに至つたのである。

三一四

かるが故に、此處に分勞に關する經濟學說を批判的に審査せんと試み、且つ經濟學說が極めて最近に社會學的範圍に於て發見した應用を此の吟味に結び付けるとするならば、余は世間多數の人士の間に常識となりたる思想範圍に終始するだけで、十分満足して居ることが出来ると思ふのである。蓋し此の後者の應用と云ふことは、科學的經濟學が此の章に於てアダム・スミスを超脱せんとする少數の試みの一を示してゐるが故である。其の事を他にしては、經濟學者は纔かに副的の個所に於てスミスの學說を改訂し、それを教義史上遠く古のギリシャ時代にまで溯らしめ、其の説明の例證を現在の技術上の進歩の上に適用し、而して分勞の光明の側面以外、その暗黒面をも指摘すること以外に出でなかつたのである。然しながら全體を通じて大觀し來らんか、分勞の學說に對しては、余輩が前にかの通俗化せる科學的學說に就きて概言せる事柄が妥當するのである。然り、かの分勞の學說は、經濟學說の建物の周邊が熱心に改造増築せられたりしにも拘らず、有りし昔の舊態を依然として保ちつゝある有様である。最近に至るまでなほ有名なる一經濟學者はアダム・スミス以來の國民經濟學の進展に關して批判的概觀を敘し、主張して曰く、「問題は凡べて汲み盡されてゐる。彼れに關しては他の學者が已にのべ來りし事柄を極く短かに繰返し得るに過ぎない」と。

〔一〕プロック著『アダム・スミス以降經濟學說の進歩』(Block, Le progrès de la science économique depuis Adam Smith) 一八九〇年パリ版、第一卷五三三頁。

事態已に斯くの如し。余は短刀直入、此の有名なるスコットランドの碩學の所論に余が討究のメスを加ふるの優れるに如かざるを思ふものである。されど余輩は茲に此の探究の歩武を擴大して、全範圍に及ぼさんと欲するに非ず。たゞ

次の二問題に解答せんと試みるものである。即ち一は曰く、分勞とは何ぞや、二は曰く、それが經濟に於ける役前如何。分勞とは何ぞやの問題に關しては、アダム・スミスは何處にも述ぶる所がない。彼は唯だ二三の例を掲げて、以て彼が分勞と稱する過程を説明し、而して其の例よりして直ちに世人が所謂分勞の「法則」と呼び、之れを簡約に「何れの工業にありても、勞働の生産力は分勞の延長と正比例して増加す」の句に集約せしめ得る命題を演繹してゐるのである。

〔二〕此の峻嚴なる方式は第一章にある次の文章より生じたるものである。「分勞は何れの技術を問はず、これを行ひ得る限りに於て勞働生産力の比例的増加を來さしむ」

然れども今これを巨細に觀察し來れば、彼の諸例は決して同一の經濟過程を示すものではない。

劈頭第一に來るものはかの有名なる留針製造所の記述である。スミスは此處に、此の特殊の生産部門に特に訓練され居ずして、非常に精を出すも、尙ほ且つ一日にして一本も否な精々二十本の留針さへ作り得ざる凡庸の勞働者と、多數の勞働者が勞働を分割して、同一製造品の製作に従事する工場とを比較對立させて居る。「一人は針線を引き出し、二人目はそれを伸し、三人目はそれを截り、四人目はそれを尖らせ、五人目は頭を作る爲めに上端を研ぐ。それより針の頭を完成する爲め更らに二度の特殊なる設備を要する」云々。斯くて針の出來上るまでには十八箇の異なる手段を必要とし、その各は夫々特殊の勞働者の手に委ねられてゐる。而して彼斷じて曰く、斯くの如き共働的勞働者集團にありては、其中の各自の仕事は、單獨にして全生産物の製作に従事する勞働者のそれに百倍否な千倍するものである、と。

此の例は已にうんざりする程繰返されて、分勞一般のクラシカルなる範例とまでなつて、爲めに世間の多數者は分勞といふものを唯だ斯かる姿にだけしか想像し得なくなつてゐる。即ち製造品の製作に必要な全勞働を出來得る限り多數の簡單なる作業に分割し、しかも同時に之を同一經濟の下に、異なる人々の手によつて行ふといふ工場の圖だけしか

を心頭に描き出し得なくなつてゐる。

【三】 ヘルモルト著『分勞論』(Helmolt, De laboris divisione) 一八四〇年(ワトトレット大學學位論文)三八頁以下には分勞を定義して『多數の勞働者が同時に生産に従事し、其の各人は常に同一の部分的勞働を營み、其の各が役務を完了するや、又新たに同一の勞働に着手する如き組織』と云つて居る。フーガッソンは已に勞働に關する章の標題に「技術及職業の分割について」と記してゐる。

然れどもスミスは此の例にのみ局限しては居なかつたのである。彼は一國に於て、原料の獲得より享樂の状態に達する迄に、一生産物が各種の經濟を経過しなくてはならぬこと、例へば羊毛が牧羊者、紡績者、織工、染色工の經濟を経過する如き場合をも亦、分勞であると言つてゐる。粗野なる社會状態に於ては、此等一切の事舉げて一個人の勞働であるが、漸く進歩せる國にありては、これに反して農夫は農夫たるの領域を踏み出さざるを常態とし、製造業者は何處までも製造業者に止り、完成せる製造品の製出に必要な勞働も亦、殆んど常に多數人の手に分割されてゐると説いてゐる。スミスは此の二種の分勞の間に何等の區別をも附せずして、何れにも同様の作用を認めてゐる。されど其等兩者を異れる過程として取扱ふべきであるといふ事を認めるには、何等長き思索を俟つを要しないのである。後者たる羅紗製造の場合に就いて考ふるに、一個の全生産過程は異なる幾節に分れるのであり、その生産各節は夫々獨立せる經濟組織となり、貨財が完成される爲めには、有價的占有變更の道筋によつて、原料の成立より直ちに使用に應じ得るまでには、多數の經濟を通過して行かねばならぬのである。之に反して前者たる留針製造の場合は、分割の對象を形作るものは一個の全生産過程には非ずして、個々の生産節である。蓋しその原料たる針線その物が已に可なり進んだ半成品なるが故である。分割の結果として現はれるものは多數の新しい經濟には非ずして、非獨立的なる勞働作業の一聯であり、其等の遂

行の爲めには、今日の狀態にありては、一人の企業家によつて綜合される所の賃銀勞働者の存在を必要とするのである。その生産物がその完成の狀態に到達するまでには、以前に比してヨリ多數の手を経るのではあるけれども、それは決してその所有者を變更しないのである。

斯くの如く全然相異なる二個の經濟過程に對しては、當然異なる名稱を附する要がある。茲に於てか、吾人はかの多數の經濟的に獨立せる節に全生産過程を分割することを生産分割¹⁾と稱し、簡單にしてしかもそれ自身にては獨立しむざる勞働要素に生産節を分割することを分業²⁾と呼ばんと欲するのである。

最後にアダム・スミスは、生産分割にも非ず、又分業にも非ざる第三の例を掲げてゐる。彼は三人の鍛冶屋を對立させ、その一人は普通の大物鍛冶にして、鐵槌を揮ふことは得意とするも、釘の製作には慣れるざるものとし、その第二人は釘はこれを作らんと欲せば作り得ざるに非ざるも、尙ほそれを唯一専門の仕事とするものとし、第三人は釘以外には何も作らぬといふ釘専門の鍛冶なりとする。而して今此の三人が一定の時間、釘を作るとすれば、勞働者が此の生産物の製作に専念する度が増せば増すに従つて、其の作業能力は愈々増加するものである。而して斯く個々の貨財種類を専門的な生産に制限する事その事を、スミスは分勞と云つてゐる。

吾人は遽かに此の命名法の正當なるを認める譯には行かないのである。敢て問ふ、此の際何物が果して分割されつゝありや。更らに問ふ、何處に其の部分ありや。

スミスはこの分割の對象として、舊態依然として蹄鐵、犁頭、車輪のみならず、斧、鐵匙、釘をも作りつゝある鍛冶の職業勞働全體を考へつゝあるは明らかである。而して茲に論ずる分勞の第三の場合には、斯かる廣汎な生産範圍より生産の一種類が抽出され、その生産が特殊なる勞働者即ち此の場合には釘鍛冶によつて引受けらるゝが、その殘餘の仕事

1) Produktionsteilung

2) Arbeitszerlegung

は之をなほ一般鍛冶の勞働に取り残して置くこと云ふのである。斯くして從來は皆鍛冶の一經營中にて一切作られてきた生産物が、將來は二個の異なる經營に於て生産せらるゝに至り、一の工業より二つのものが生じたのであり、しかも其の各が一個の人間に特別の生活職分即ち職業を供することとなるのである。

此の場合にありては比較的大なる生産過程を異れる節に分割するにも非ず、又生産の一節を極めて簡單なる作業要素に細分するにも非ざるは一目して瞭然たる所。これスミス自身特に注意してゐる如く、勞働の手續は釘鍛冶の方、一般鍛冶に於けるそれと比して決して簡單にして煩瑣ならずといふには非ず。何れの鍛冶も夫々鑄を吹き、火をあらけ、鐵を熔燒して、生産物を鍛へ出すのであつて、異なるはたゞ各人が此の手續を以前より僅少なる貨財種類の數に適用せしめる點にのみ存するのである。然かも斯くして作り出される貨財そのものも、仕事を分割した組織の下で、夫々が以前よりも更に多數の人の手を経てゐるはしない。吾人は分勞の此の第三種を稱して特化¹⁾又は分職²⁾と云はんと欲する。

此の分職とかの分業とが如何に區別されるかは容易にこれを知ることが出来る。即ち前者は全生産任務の異なる經濟への分配にして、後者は各個の企業内部に於てこれが行はれるものである。然るに彼の生産分割と此の分職とを區別せんことは一見ヨリ困難なるが如く然るも、生産分割は謂ふべくんば比較的長き生産過程の横斷にして、分職はこれ職業的に閉鎖せる勞働範圍の縦斷である。

簡單なる一例を示せば、革具の製作は其の初期に於ては、單一の經濟中にて行はれてゐた。シベリヤの遊牧民、南スラヴの農民は今日もなほ自家の家計にて獸皮を得、それを鞣めし、以て靴、馬具等を作つてゐる。然るに西歐の諸國にては中世初期に於て已に、鞣皮匠と革細工匠との業生じ、今や革具はその完成までに獸皮生産者、鞣皮匠、革細工匠と云ふ三箇の經濟を経ることとなつた。これが生産分割であつた。然るに時代の進歩と共に、革細工匠の大なる營業より

1) Spezialisierung

2) Berufsspaltung

靴匠、鞍匠、馬具匠、革囊匠等の如き特別手工業の分裂を見るに至つた。而して此の特別手工業の夫々は何れも革具中特別の種類を選び來り、殆んど何れも皆同様の勞働手續を以てこれが生産を爲してゐるのである。これぞ特化若くは分職なのである。

比喩を藉り來りて之を表はさんか、生産分割にありては、貨財生産の大河は絶えず堤防によつて堰き止められるものと見るべく、分職にありては、それが多數の小さい堀割や小川に分流させられてゐるものと云ひ得よう。

スミスはこれ以上には例を擧ぐる所がない。故に吾人も先づ以て此處に歩武を止めて、少しく疑問を提起して見たいと思ふ。曰く、或は生産分割といひ、或は分業と稱し、又或は分職と云ふ如き此の極めて異なる三過程を我が『經濟學の父』は如何なれば、皆一樣に分勞なる一個の名目の下に押し込むに至りしか。吾人が一見直ちにその間に横はれる踰ゆべからざる差異を指摘し得る此の三過程は何れの點に於て本質的に等しきものとなし得るであらうか？

惟ふに、かの互に相異なる分勞の三種類が共通の點として有しつゝある所は、唯だ僅かに次のことにあることは明白である。即ち『此の三者とも皆人間の意志作用によつて招來された社會的進化過程にして、從來一人にのみ任されるたる經濟上の仕事が多數人に委ねられて、爾後此等多數人の銘々が從來の綜合勞働より分化して生じたその一部をのみ營むに至る』と云ふことである。斯くの如く然り。何れの分勞も或る一定の經濟的目的の到達に必須なる勞働力の數量が増加し、同時に勞働分化が行はれる所に生ずるものである。斯くの如くにして經濟任務は單純化され、人間の制限されたる能力に堪え得べき性質のものとなし、謂はゞ個人化されるのである。かるが故に分勞は常に又、勞働組織であり、經濟主義に遵ふ勞働の機構である。而して此の結果として常に、以前には一人の力によりて到達されたりし一目的に對して各種の力の共働が出現し來るのである。

今如上の事柄を確認して、進んで経済的労働使用の全現象範圍を精査し、それが如何なる歴史的発展を閱し來り、日々如何なる進歩を経つゝありやを探究し來る時んば、吾人はアダム・スミスのかの類型的例證及び吾人がそれより演繹し來れる三種の分勞を以てしては到底分勞の全範圍を汲み盡し得べからざることを直ちに認めるのである。かくて吾人は寧ろ更に加ふるに第四、第五の分勞型式を發見するのである。而して其の一は即ち職業構成¹⁾にして、其の二は即ち労働推移²⁾と呼ばれるものである。

先づ職業構成なるものに就いては、それが本來分勞の何れの他の種類よりも最初に擧げねばならぬものであつた。其の理由他なし。それは各國民經濟的發展の先頭に立つものなるが故である。今この事柄を了解せんとせば、國民經濟の成立前に於ては、民族は一般に純然たる自己經濟の状態、即ち何れの家にも、その家族員の労働を俟つて、それが要する一切を作り出さなくてはならぬといふ状態を通過しなくてはならなかつたと云ふ事から出發しなくてはならぬ。而して其の家族員の労働は年齢、性、體力併びに家父に對する地位の如何によつて多種多様に分たれ居たりしものなりとは云へ、斯かる労働分配は決して國民經濟的分勞にては非ず。其の作用は唯だ個別經濟の上のみ局限されて、他の經濟に影響して其の組織構成の勢力となるにても非ず。又社會に作用して其の階級構成の原因となるのでも無い。従つて固より此の段階にありても、各種の農業的及び工業的技術なきに非ざるも、特殊なる生業部門としての農業なるものある無く、工業なるもの存せず、商業なるものも之を見ることが出來ない。従つて社會的職業集團としての農民、工業家、商人にも亦接することを得ないのである。

然るに此の状態は、各個々の労働が斯かる多方面の經濟より分離して、一つの職業の對象となり、特殊營利行爲の基礎となるや、變化せざるを得なかつたのである。而して此の進歩の前驅をなすものは已に第三講に於て取扱つた彼の大

1) Berufsbildung

2) Arbeitsverschiebung

規模なる奴隸經濟及び莊園經濟に於ける労働分配であつた。斯く自立的家内經濟の活動範圍より分離して、一個特別の職業に獨立した部分は、或は商業のその如き一個の全生産過程となり、或は晒布製粉のその如き生産の一節となり、或は負傷治療のその如き人的服務の一種となる。然れども此の職業構成による最も一般的なる結果として、家事經濟任務に於ける生産的部分は狭小せしめられて、幾世紀かの経過の間にそれは益々消費の範圍に幽閉され終る。此の時に當りて他の側面に於ては、各種の生産部門及び工業を生じ、夫等は特化及び生産分割によりて無際限に複雑に赴き行くのである。

〔四〕 此の場合に於ては、職業構成は生産分割と等しい。

然るに已に中世の初期に生じたる此の職業構成の過程を、今日に於ては早や其の完結を告げたるものなりと爲す者あらば、そは大なる誤解である。今日に於ても尙ほ、舊き家内經濟の部分が崩壊し行きつゝあるのであつて、地方に於ては緩慢に、都市に於ては急速にといふ差こそあれ、尙ほ今日に行はれつゝある現象である。而して何れの都市の人名録を検するも、最近世代に於て初めて、舊き家内經濟的行爲の崩壊によつて生じたる多數の獨立的工業を示すことが出來るのである。

さりながら新しき職業の成立が分職又は生産分割によるのではないものを、家計と新しき營利經濟との間に於ける労働の分割に歸しなくてはならぬと考ふることは、その誤謬たるや勿論である。自轉車工場、電気鍍金工場、電気工場、製氷工場、寫眞工場等は決して分勞によつて生じたるものには非ずして、全く新らしき貨財種類の出現よりして生起したる工業經營なのである。かるが故に此等は此處の考察には入り得ざるものたるや明かである。然れども夫等とても亦、分勞の制扼を脱し得ざるものにして、其の初めよりして已に分勞に左右される生産形式に順應し來りしものである。

此の過程と外的にだけ相類してゐるものは即ち余輩が上に**労働推移**と呼びしものである。それは新しき機械及び其他固定せる労働の補助手段の發明によつて生ずるものであつて、しかも分勞は此處では次の如き方法によつて行れるのである。

或る生産部門に新らしく發明された機械が採用せらるゝに至れば、從來の労働組織に變化を生ぜしむ。機械なるものは通常從來人の手によつて營まれてゐた個々の運動のみを引き受けるのであつて、新しい機械を使用する經營では、其の始めには、以前にあの筋肉運動を行つてゐた労働者がその機械を動かす爲めに使役され、従つて前とは違つた筋肉運動を營まされるに至るといふ事以外には、以前と何等差異ある所を見ないのである。例へばかのミシンが採用せらるゝに至りてよりは、裁縫工場の労働者は以前手のみにて働きたりしもの、今や手と足ともて働くこととなり、然かも同じ手を働かしめるにしても以前とは異なる方法を以てすることとなつたのである。

然れども一着の上衣を作り出す爲めには、以前でも已に仕立屋よりは遙かに多數の人が働いてゐた。先づ仕立屋の扱ふ原料の生産者が居る。即ち羊毛生産者、紡績者、織工、染色工等。次に仕立屋の用ゆる道具の製作人がある。即ち針製作者、鉄鍛冶及び其他多數。而して此等生産者は皆、ミシンが採用せらるゝに至りても依然として仕事を營みつゝあれども、此處に別に新たな生産者の出現を見る。それは即ち機械製造人である。然るに機械は分業の方法によつて作り出されるものなるが故に、同じ機械製造人の間にも、機械の細部鍛冶、鑄鐵師、金屬輪軸師、模型工、機械組立工、塗物工等々がある。而して今此の全生産過程を観察する時は、全労働の一部が後期の段階から前期の段階へと引き戻されて、前段に於て已に遂げられることとなつて居り、爲めにかの仕立屋の仕事は部分的には裁縫工場より機械製造工場の手に移されてゐるのである。

此の全経過は類型的なものであつて、然かも分勞の特徴を呈しゐるは疑ふべからざる所。吾人はこれを呼ぶに**労働推移**なる語を以てせんと欲すれども、此の語は場所的及び時間的意味に於て了解さるべきものである。空間的に解すれば、労働推移なるものは一生産場所より他の生産場所への労働作業の部分的轉置を意味し、時間的に觀すれば、それは豫備的労働による直接的労働の填補であり、從來使用財の製作に使用されるたる労働の部分を生産手段の製出に轉換せしめることである。さりながら其の際新らしき作業用具を職業的に製出する一個の新らしき經濟（企業）が構成されるといふことの全然必要なことは、彼のミシンの場合に於て、已に存し居たる機械製造工場がその製作に當り得る如きものである。此處に眞に重要な事柄と稱すべきは、衣服生産の新らしき方法が其の相互間に相異なる多數の労働作業を包蔵するに至り、従つて多量の労働力を要求するに至れるその事に存する。

今や吾人は、分勞の概念に入り來りて、然も今日なほ吾人の眼前に演じられつゝある國民經濟的過程の五つの相異なる種類を知ることが出來た。然れどもそれに依り、近世經濟生活に於ける其等の相對的意義に就きては述ぶる所の極めて少なかりしことは云ふまでもない。蓋し近世經濟生活は長き進化過程の結果にして、歴史研究者の眼を以て之を観察する人は、隨所に新舊の混淆錯綜に接し、舊きものは小じんまりとせる作用範圍をもち、新しきものは廣く押し出した活動の範圍を有するの現狀に接し得るのである。人類は孤立的經濟より社會的經濟への其の長き進化の道程に於て、常に新しき労働組織の方法を探究し、而して之を發見し來れるものである。然れども其の爲めに人類は舊きものを倒れた儘にはしなかつた。否、この舊きものがなほ完全にその役割を演じ了らない限り、將來とても尙ほ倒れさすこととはあるまい。何故なれば、此點に於ても亦、「何物にまれ、或る場所では利用されて効果あり得るものは決して滅亡するものに非ず」と云ふかの經濟性の大原則が儼乎として支配しつゝあるが故である。

以上の言は、直に取つて以て、分勞の各種形式に妥當せしめ得る。假令現今に於ては、分業と勞働推移とが、其の重要さに於て、特化と生産分割とに優るやも知れざれども、又職業構成なるものは分勞の一形式としては、最早、殆ど認められ得ざるに至りしとするも、さればとて此等の經濟的組織原則の何れもが消滅し去りたるものとは云ひ得ざるものであつて、夫れがその勢力を保持し得る箇所に於ては、孰れも其の作用を及ぼし続けつゝあるのである。

經濟史を按ずるに、夫等は夫々に覇權を掌握した時代があつた。職業構成は我がドイツに於ては中世の初期に表はれ、特化が最も得意の時代は都市制度の全盛期と相合し、其れと同時に生産分割が始まつたのである。然れどもこの生産分割がその全力を伸張せしめたのは、資本主義經濟に於て初めて、分業及び勞働推移の出現以後のことである。而して分業と勞働推移の兩者に至りては、何れも之を十七世紀以前に溯つて發見するを得ないのである。

余は今此處に、夫等各箇の分勞の歴史的被制約状態、夫等の發生の原因結果を詳細に敘述することを斷念せねばならぬことを甚だ遺憾とする。然も況んや余が企てたる個々の過程の峻別と云ふことが此等の點に於てはじめて完全なる立證を得、同時に全現象の從來の抽象的取扱が遂に其の鼎の輕重を問はるゝに至るといふ時、いよゝゝ其の然るを感ずるに於てをやである。然りと雖も、余は分勞の原因と其の作用に就きて二三言を費し、以て其の一般を論ぜざるを得ざるものあるを覺えずんば非ず。蓋しかの分勞の五種類の凡べてが他の經濟現象に對して、上方へも下方へも、それを惹起せしめる割合が等しいものとすれば、分勞のかの五種の區別は科學的に無意味なるものたるにあらずんば、聰明の徒らなる遊戯たるに終らざるを得ざるが故である。

アダム・スミスは一切の分勞を一個共通なる淵源に歸してゐる。即ちそは人間に生得せる交換の性嚮なりとなし、しかもそれが本能的に現はれ來ると、意識的に働く考量に基きて現はれ來るとを區別しないのである。此處に於てか、彼

は經濟行爲の犀利なる心理學的解剖を斥けて、分勞の根元を本能生活の迷宮に投ずる事を以て満足してゐるのである。

然るにその事によつて、彼はその自ら掲げ來れる例證と矛盾撞着を生じてゐる。もし百歩を譲りて、分勞なるものが古くより人間に内在せる本能より生じたるものなりとせば、そは絶対的の經濟的範疇たらざるを得ず。即ちそは人間の存する所、如何なる時を論ぜず行はれざるを得ざるものでなくてはならぬ。然るに彼が引き來れる例に就いて見るに、分勞の状態を説きては、必ず之を分割されるる勞働の状態と對立せしめ、前者を後者より生起させてゐるのである。その分勞の「分」といふ語の動的使用それ自らが、已に此の然ることを要求してゐるのである。而已ならず、吾人は事實の上よりして經濟的分勞の存せざりし状態が幾世紀を繼續し來りしを已に知つて居り、更らに分勞が生ずるに至りても、その夫々の種類が發生する時期を可なり正確に決定し得るに於てをや。乃ち知る、經濟的分勞は一般にこれ歴史的範疇にして、決して原素的經濟現象に非ざることを。

而してそれと同様の事が交換に適用される。即ち經濟的分勞の存せざりし時代ありしが如く、交換を缺ける時代もあつたのである。最初の交換行爲は分勞と同時に出現したるものには非ずして、遙にそれに先立つてゐる。そは其の他では自立的な經濟の間に偶然生じたる餘剰及び不足を相互に相殺せしめんとの目的に慚ふものである。然り、交換なるものは此處では偶然的のものにして、經濟の本質に根差すものではないのである。宜なるかな、職業構成を以て經濟的分勞の幕が切つて落されるに至つても、分勞は尙ほ長く、交換を出來得る限り排斥せんとの意圖を其處に認めしめる如き形式によつて行はれ來りしことや。往古の家婦は手づから得たる穀物を手挽臼もて之を粉にし、斯くて作れる粉を以て麵麩を焼いてゐた。やがて磨者及び麵麩焼人の營業が生ずるに至りては、穀物は磨者に與へて之を粉にし、得たる粉はこれを麵麩焼人に與へて以て麵麩を焼かしめるに至つた。されど此の新たに生じた使用財は其の原料より完成せる生

産物に至るまで決して其の所有主を變じないのである。即ち磨者及び麵麩焼人は己が勞力に對して其の生産物の一部を與へられ、之を自分の許に留め置くのであつた。斯くて此の分勞的生産の全過程に於ける交換類似の手續とし云へば、それは唯だ此の一を數へ得たるに過ぎなかつたのである。

斯くの如くそれ然り。アダム・スミスが虚構せるかの交換本能なるものはそれが單に困惑の彌縫手段たるに過ぎざることは容易に認め得る所である。近時の經濟學者は此の點に就きてイギリスの碩學の輩に倣ふを屑としざるが故に、益々以て吾人はこの點に深く頭を没することを止めても差支へないと思ふ。而して近時の經濟學者は寧ろ交換なるものを以て分勞の偶然の結果なりと爲さんとする傾向がある。吾人は分割されたる勞働に於ける交換は、生産者が同時に凡べての生産手段の所有者たる其の時よりして必要不可欠のものとなると云ふ制限を附して、此の考を肯定し得る。斯くの如き状態にして初めて交換は各の經濟の生活要素となり、殆ど分勞のどの進歩も、この時期を出發點として必然的な交換行爲の量を増加せしめるものである。さりながら斯かる發展の段階に到達する迄には、經濟的分勞の初めて成立してより更らに幾世紀かの長き星霜を経ざるべからざるを忘れてはならぬ。見よ、今日に於てすら尙ほ、例へば磨者が穀物の所有者であり、麵麩焼人が穀粉の所有者であり、従つて麵麩は三回の交換を経て初めて消費者の手に達し得るといふ如き状態が、田舎に於ては、尙ほ未だ決して一般の通則にはあらざることを。

斯くして分勞の經濟的發展過程に際しては、交換は唯だ二次的現象たるに過ぎざるものなるが故に、吾人は勞働の分割を指す人間の行爲に對しては當然此處に他の動機付けをなすの必要に自ら迫られてゐる。

此處に於てか、吾人は抑々問題の根元に溯つて、經濟の根本事實即ち人間の欲望は無際限にして、これを満足せしむる手段は制限されてゐると云ふことに直接當面させられるのである。人間の欲望は量に於ても又質に於ても、際限なく

増加し進歩しつゝあるものにして、決して休む時なく、文化發展に伴ひて内包的に將た外延的に向上しつゝあるものである。然るに翻つて人間の目的に供せらるべき物質は制限せられ、而して更らにそれに貨財の性質を賦與し其の貯へを増さしめる人間の勞働力もまた此の制扼を脱する能はず。況んや人間の數の増加すると共に、自然が供し得る經濟的功用ある原料の量と人間の總需要との關係はいよ／＼益々不都合なる状態を呈し行くものなるに於てをや。茲に於てか、總需要の生産に必要な勞働量は、一方ヨリ多數にしてヨリ良質なる貨財を生産せざるべからずと云ふこと、他方ヨリ不利益なる條件下にそれが製出されざるべからずと云ふこととの二重の原因よりして、増加するのである。斯くて結局は、經濟に參與する各人の頭に課せられる一人宛の勞働分前は遂に甚しき増大を見、もし勞働使用の經濟的施設によつてそれを減少せしめ得ざりしならんには、到底堪え得ざるに至つたであらう。

擬て各人がどの仕事に對しても天性より同等の能力を有しることは容易に解し得る所であり、肉體上並に精神上に於ける個人天賦の差異は、勞働効果に著しき差別を生ずる。而して此の事は社會的發展の著しき時代、換言すれば勞働任務のいよ／＼多方面に分岐し行く時代にありては益々其の重要な度を加へ來るものである。經濟主義は各人が各自の天賦に應じたる方法にて働くことを望むのである。何となれば、かくてのみ其の人の勞力が最高の効用を示し得るが故である。而して勞働任務の數がいよ／＼幾倍かし行くに伴れ、この『適材を適所に置く』と云ふことが益々容易に實行されるに至るのである。

勞働任務の多様化と同時に、その單純化が生じて來る。複合せる勞働は何れも、之を營む個人をして、再々運動の變更を餘儀なくせしめるものであり、斯種の變更は力の損失を生ぜしめる。これ蓋し一種の運動より他のそれに移る際には、新らしき仕事への心身の順應を要するものにして、爲めに力の浪費を生じ、これはそれ自身、何等有用なる結果を

も生ぜざるものがあるが故である。然るに之に反し、終始同様に繼續する筋肉運動をなす時は、労働の精神的要素は除去せられて、一度順應すれば其の後は直ちに、自動的にその運動は續行せられ、いよ／＼練習を重ねるに従つて疲労限界を益々遠くへ押しやつてしまふのである。同時に此の自動的に行はれ得る労働の強度は甚しき高度にまで増高し行き、其の結果として其の運動をしていよ／＼永續せしめ得るのみに止らず、各時間單位に歸する運動の量は益々増加し來り、爲めに労働の効用は激甚なる増進を見るに至るものである。

〔五〕詳細は『労働と律動』二五頁以下に。

此等一切の事は、各種の賦性を十分其の効用を發揮せしめ、一切の無用なる力の損失を避け得しめんが爲めに、労働任務を狭小ならしめることを、經濟主義の命令なりと見せしめるのである。然るに大多數の生産過程中には極めて異なる種類の労働要素が結合されてゐる。即ち手の労働と頭の労働、絶大の筋力を要する作業ありと見れば、指先の機巧、感情の微細、視力の鋭敏を必要とする作業あり、教習と練習とによつて得る技能を要する仕事ありと見れば、不熟練者にも營み得る仕事がある。斯くの如き各種の労働任務を唯だ一人の手に委ねるたる往古に於ては、精練せる労働力の大浪費をなし、人口の生産部分を何か或る技術の全班に通じ居たる者のみに制限したのである。然るに一度分勞が行はれて、性質上等しからざる労働要素を分割することによつて、最も優れたる労働力と相並んで、最も劣等なる労働力をも使用するを得、最高の特殊的労働熟練を完成するの刺激を與ふことを得せしめるのである。

斯くて所詮は、分勞なるものは全生産界の進化史に於て非常に大きな役割を演じつゝあるかの順應過程に外ならぬ。即ち人間の力の多種多様なに對する労働任務の順應であり、各種労働任務に對する労働力の順應であり、一方より他方へと繼續的に行はれる労働任務の分化である。斯くの如きの解釋に立つて、分勞てふ全過程は始めてかの本能生

活と云ふ昏迷の間より去つて、確乎した動機に因る人間行爲の照々たる光明裡に齎らされるに至るのである。

此處に尙ほ特に力説せざるべからざる一事がある。それは人類の歴史に溯り行くこといよ／＼遠ければ、分勞の中の人格的起因が愈々純粹に現はれ來るといふ事即ち之である。故に進化の初期に當りては、重要な物質的補助手段なくして果され得るそれ自身獨立してゐる職務が個人に課せらるゝが如き分勞の形式が主要なる地位を占めてゐる。然り、最も古き時代に職業となるものは、主として宗教的併びに藝術的行爲であつて、僧侶、占卜者、醫者、妖術家、歌謠者、舞踊者が特殊の天稟を有する人として、一番初めに特殊地位を占めたのである。

その一度不自由なる労働組織の生ずるに至りてや、分勞は其の第一着の發達を奴隷家族の懷の中に發見したのである。然かも此處にその出現を扶くるものは、尙ほ未だ殆んど世より注意せられずにある人格的道義的要素である。主人公は其の目指せる共力の組織を用ひ得ざる場合には、奴隷の各にそれが責任を以て果さねばならぬ夫々特別なる義務範圍を課するのである。即ち主人がその奴隷を使用せんとする時には、或る一定の労働を専ら彼に課するやうにする。故にローマ人の間には、殆んど重箱の隅をほじくるとも評すべき程に微細なる労働の特化を *Familia urbana* の間に生じて、農事の各種方面の爲めの體力と智力とによる奴隷の周到なる選抜が行はれ、更に進んで中世の家人の間にては、彼等が輸すべかりし現物年貢は全く特殊な家内仕事の生産物を以て幾度か決定されて居たのである。奴隷家計に於て主として農僕又は鍛冶匠、理髮師又は書記の任務に當り居たりし人、宮廷に主として桶、皿、小刀又は麻を供給すべき義務のあつた小作農民は、斯くして特殊なる仕事の機巧を得るに至つたのであつて、やがて彼に一度解放の時到來するや、彼等は此の仕事の機巧を携へて、職業労働者として社會に跳び出したのである。斯くて閉鎖的家内經濟時代に於ける不自由労働の經濟が其の確定を強要する個人的労働任務と、それによつて生ぜしめられたる特化との裡に、次の時代に於

ける社会的分勞の芽が萌え出でつゝあるのである。

〔六〕 一〇六頁以下参照。

〔七〕 此れに就きてはコルメテ (Columella) の書第一卷九章にある見事なる註を参照すべし。即ち『此の家内労働をして斯くの如く紛雜なるものならしめず、各人相依りてこれを營むに至らんことは、又實に余が希望である。蓋し今日の如く然るは、労働者をして彼れに屬する労働以外の顧慮せしめざるが爲めにもせよ、又は各人をして、其の努力が何等個人的利益を齎らすものなくして、たゞ一般の功用に資するものあるにすぎざるが爲め、その労働より退かんとの念を懐かしめるものあるが爲めにもせよ、何れにしても農民に何等の利益をも寄與せざるが爲めである』

〔八〕 詳細は一〇頁以下にあり。

新しき分勞の成立に際し、調整順應の人格的要因と相並んで、物的要因も亦、干渉するに至つたのは、漸く餘程後の事である。人間と同じく、物も亦分化する。即ち道具、原料、生産物が分化するのである。分勞の進歩は何れも既存の道具及び工具を己れに順應せしめんとし、又は特殊なる經濟任務に對し新しき夫等を作り出さしめんとする。試みに金屬及び木材加工の各種部門に使用されてゐる槌、鉗子、鑿に驚くべく無数の種類あるを思はゞ、思半ばに過ぐるものがある！ 人間の間に於ける分勞は、労働器具の間に於ける使用分割と好一對をなしてゐる。されど道具が單に人間の四肢の力を強めるに過ぎざる間は、分勞の過程を支配するであらうものは、人的順應であるが、その一度巧妙なる装置が生じて、之によつて自然力が人間の用役に供せられ得る時の到達するや初めて、労働器具は此處に人間の身體運動併びに其の社会的個性を支配するに至るのである。斯くて今や、分勞の軌道上の新しき一步への刺激は新たに發明されたる機械より生ずることが容易なるが如く、又特殊の人的特性の所有又は獲得よりも生じ得るのである。即ち新たに發明されし機械の多數はそれを使用する爲めに、曾てはその經營中に見るを得ざりし或る技能を有する労働者を要求する。そ

1) Gebrauchsteilung

れに關聯して、生産範圍の増大によつて生産費節減と云ふ資本主義的要因の出現を見るに至る。然れども此の生産費節減と云ふことは多分は已に長き以前より技術上にては可能となりたる大量生産を經濟的にも可能ならしめる需要の單一化とその集中との前提の下に初めて生じ來るものである。多くの労働過程(例へば染色、研磨、乾燥、郵便の信書送達を見よ)は殆んど均等なる生産費の原因となり得るものにして、其の労働過程が多數の個物に行はれると、少數のものに行れるとを問はないのである。而して更に一步を進めて、全生産手續を秩序立て、かの労働過程に投ぜらるべき原料又は半成品の量を一定の場所に集積せしむるを得るに至れば、此の一定場所へ特殊の部分労働者を設置することが有利となり、全體に於て著しき生産費節減が生ずるのである。

〔九〕 此れ以下に就きては『労働と律動』第九章を参照すべし。中世の都市經濟時代に於てさへ、なほ分勞に於て人的要素の著しき勢力を有しあたりしは、同業組合へ加盟する際の條件によりても之を解し得るのである。營業の問題より云はゞ、たゞ人的要求のみが主なるものと目されて居て(即ち自ら工業を營む能力ありや否や)物的要求は唯だ其の加入者が市民(家を所有し、武装をすることが出来る)にして、基督教徒(蜜蜂を以て入會手数料とす)なることを以て足れりとしてゐたのである。

斯かる種類の過程に於いては、労働拘束と自由競争と云ふ社會原則が如何程まで妨礙を及ぼし、又はその助力となり得るものなるかに就きては、茲に探究しては居られない。唯だ此處に戒愼せざるべからざるは、此等の事柄を、徹頭徹尾、近世的工業状態の光に依て眺めて之を判断せんとする誤に陥るなからんことである、抑々分勞なるものは物質的範圍を遙かに超越し得るものであつて、特に近時の精神労働の領野にあつては、生産技術の範圍に於ける進歩及び結果が到底比肩し得ざる程のそれを呈してゐる。否、實にかの精神労働に於ける分勞の進歩と其の結果とは、寧ろ生産技術の範圍に於ける夫等の直接原因となり、直接動機となり得ると見るも誇大には非ざるを覺ゆる。然かも此の物質的生產

の彼岸に横たはれる廣大なる全範圍に於ては、労働の物的補助手段なるものは決して重要な役割を演ずるものに非ずして、此の世界にありては、人的要素が依然、分勞の引き續いての發展に對して決定權を與ふるものなのである。斯くの如く然り、吾人は此の人的要素を以て、文化史的な大過程を支配する要素として承認せんと欲するものである。

然しながら分勞の一般的成立原因に就いても亦、余輩は此處に其の論歩を止めんと欲す。唯だ分勞の個々の種類又は形式が發生し來る特殊なる成立條件に就ては、他の箇所にて少しく述ぶる所あらんと欲する。

分勞の經濟的結果に就きても、此の點に於てこそ、各種の形式が最も甚しい分離を示してゐるのであるが、此處には唯だ簡截に觸れるに止め置かんと欲する。

「アダム・スミスは分勞のたゞ一つの作用をのみ認めてゐるにすぎぬ。即ちそれは労働生産力の増加といふことである。従つて彼は此の分勞の影響を貨財生産の範圍にのみ局限するものにして、彼の所説は此の點に於て十分に正當なるものありと云ひ得るのである。即ち分勞は或る一定の人間労働力の支出によつて、非分勞的労働に於て可能であらうよりも多量且つ良質なる貨財を生産し得、生産は廉價になり、労働のみに就いて考ふれば生産費は減少する。然れどもアダム・スミスは労働を以て交換價値の眞の尺度なりと考ふるが爲め、分勞は果して凡ての状態に於てヨリ廉價に消費者の欲望を満足せしめ得るものなりや如何と云ふ一步を進めたる問題は、之を棄て、顧みずなられたのである。」

此の解釋は一見甚だしく狹隘なるが如き觀なきに非ずと雖も、多數の近時の經濟學者が現今の全經濟組織を直接分勞より演繹し來り、現今の全經濟組織を呼ぶに「分勞的經濟」なる合言葉を以てして十分にこれを表はし得と信じて、分勞の作用に測り得られぬ程の延長を附與しつゝあるに比すれば、その確かに正當なるを信ぜずんば非ず。思ふに、近時の思想は現在の如き姿と作用方法とを取れる經濟的現象の最も重要なものは分勞によりて規定せられつゝあり、分勞

はそが生ぜしめたる豊富に發達せる職業組織によりて經濟組織を擔ふ骨格を供し、之に對して交易が其の骨格を結締する筋髓を與へ、斯くて生動せる一大身體の如き機能を營ましめるものであると云ふ意見から導き出されるのである。然かも此の交易とても分勞によつて直接に營まれるものたるに他ならずして、分勞は實に交易の原因なりと考へてゐるのである。

〔10〕 シュモラー著『經濟學原論』(Schmoller, Grundriss der allg. Volkswirtschaftslehre) 第一卷、(一九〇八年、ライプ

チヒ版) 三九〇頁以下も亦此れに屬してゐる。

此處に由々しき謬想が横はる。分勞はそれ自身未だ以て交易を作り出す作用を有するものではない。否、その反對に、比較的豊富に交易が發達せる状態にあつても、非分割的労働の状態が考へられ得るのである。

此の最後の命題を説明せんが爲めには、全體に於てなほ閉鎖的家内經濟の段階に立てる民族が、天産物分配の著しく不均衡なるか、もしくは家族員の寡少なるかゞその原因となる場合には、比較的強度に發達せる(有價的又は無價的の)貨財交換を有し得るものであると云ふ事實を指摘すべきである。此の場合、各家及び各労働力が十分なる聯力の状態に於て、其の住居地の自然的補助手段が許す一切のものを生産しつゝあるのである。而して交換は唯だ其の自己生産の缺陷を填補するのみに過ぎずして、交換の目的物は通常自立的なる經濟の餘剰たるにすぎない。而して各家族成員の數いよ／＼寡く、天候不良、家畜斃死、貯藏物腐敗、家族員の疾病等によりて或る個々の點に對する需要充足を必要とすることいよ／＼屢々なれば、他の經濟より其の過剩せるものを得、之に對して自己の經濟に過剩せるものを他に與へることの度數がいよ／＼増し來るものである。

かくして中央アフリカの黒人族は極めて多數の週市を有し、それは多くの場合、原始林の眞中で、特別な平和の保障

下に開かれてゐる。然かも彼等の間には、唯だ一個の職業的に營まれる工業すら殆んどなく、分勞の如何なる形式もない。唯だあるものは男女兩性による勞働の區分のみである。大洋洲の各地方にも亦これに類することを見る。ヨーロッパの諸國に於ても、中世の初期に當つては、勞働組織が全然未發達なりしにも拘らず、可なりに活潑なる市場取引の行はれつゝありしを推測せねばならぬやうに思はれるのである。

他面より見るに、屢々次の如きことに接する。それは同じ家内經濟の段階にありても、奴隸制度又は家人制度の存立が多人數の家族現員を生ぜしめる所にあつては、それよりして特に交換の生ずることなくして、分勞の行はれると云ふ其の事である。富裕なるローマ人の經濟及び中世の莊園經濟にては、各種の極めて異なる性質を有する勞働者あり、かの分業の原則に基いて生産に従事しつゝある者さへあつたのである。さりながら交換取引なるものありて、彼等相互間又はその生産物の消費者との間を結び付くるものありしには非ずして、彼等を結締しむたりしものは實に家長の權威であり、その手段を給するものは奴隸制度にあつては奴隸所有權であり、莊園制度に於ては土地所有權であつた。斯かる組織に立つ經濟は一個の永續的生產消費協同體にして、それが生産したるものを自らの間に消費しつゝあるのである。然り、此處に現はれ来る分勞は却つて交換を回避する爲めの完全なる手段であるやうに見えるのである。

斯種の大家計の間には、次の經濟段階の職業的分勞への準備が出来てゐたのである。而して此の分勞は一部の人間の生存をして、從來はそれを所有することによつて初めて其の生存を築き上ぐるを得たりし土地より解放せしめるのである。それは農民的生業の外に市民的生業を作り出すこととなつた。然るにやがて分職が出現し來りて、營利機會の數を増さしめ、高等なる機械的機巧を發展せしめる領域を與ふることとなる。生産分制も亦其の初めは、なほ未だそれと異つた作用を有してはゐないのである。斯くて此等三者にして相合すれば、其處に自ら所謂「分勞的經濟」を作り出す

に十分なるものありとは云へ、斯くて現れ出でたる經濟を以て、これ直ちに國民經濟なりとは爲し得ないのである。蓋しそは先づ以て財貨流通を缺き居るが故である。

此れ程までに分勞の全經過は完成されて、其の結果、賃仕事の形式にて特殊の機巧を他の家計の用役に供してゐる勞働力が土地所有者の閉鎖的家計の羈絆より脱することとなるのは、吾人の熟知する所である。彼等は成る程其の職業の利得より生活しつゝある職業勞働者なりと雖も、彼等が加工する原料はその生産物を結局自己の家事に使用せんとする人の所有にかゝる。斯くて生産物が最終に消費せらるゝ状態に到達する爲めには、かゝる多數の賃仕事人が一の生産手續に協働するを必要とする場合があるのであつて、例へば麵麩を作る時の磨者と麵麩焼人、衣服を作る際の織工、染色工及び仕立屋の如きである。今これを技術上より觀察すれば、獨立して働く此等の職業勞働者は皆、生産物によつて相互に結び付けられつゝあるのであつて、其の生産物が消費に充て得られる段階に達するまでの種々の段階を取つて、彼等の手より手に傳へられて行く。一者は常に他者の仕事を續行するのである。然るに經濟的に彼等を結合せしめるものは原料の所有者であつて、即ち普通は其の原料を手づから生産し、而して完成した生産物も亦その手に復歸し來る所の人、取りも直さず消費者即ちこれである。然るにこの消費者が各種の部分的生産物を已が用役に服せしめる手段は、彼が其の各々に支拂ふ仕事賃であるが、この仕事賃の支拂が又、斯種の分勞より生ずる唯一の取引行爲を表はしてゐる。

例へば茲に家を建てんとすれば、煉瓦屋、大工、家根屋、硝子屋、指物師、錠前師、左官を順次賃銀を出して傭ひ、彼等が用ゆる材料を供給してやる。此の際彼等の物的中心は新築と云ふことであり、其の人的中心となるものは建築を営ましめる旦那である。此の旦那は此等の職人をして謂はゞ一時的生産協同體を形成せしめるものなるが、その結合は弛くして絶えず變換しつゝあるものにして、これよりしては到底永續的なる經濟組織の發生を望み得ない。彼等は今日は

甲の旦那に仕へるかと思へば、明日は乙の許にて働く云ふ有様にして、生産者は分勞によりて相互に依存するにても非ず、又社會的に旦那に隷屬するにても非ずして、彼等は徹頭徹尾「親方」なのである。

斯くの如き状態は、自分の仕事の爲めの原料を供給することによつて、賃仕事人が手工業者の地位に高まつても、大なる變化を見ざるものにして、例へば車を作るに當りては、先づ車匠に注文し、次に鍛冶匠の許で金物を打たせ、最後に塗物屋に渡して塗り立てさせる。かくて車匠は木を供し、鍛冶匠は鐵を、塗物師は塗料を給する。而して彼等の受取る支拂はたゞその各自が供給したる材料の價と勞働給付との代價を償ふ丈けにして、其の生産を指導して行く者は、依然として、その分勞によつて作り出される生産物の消費者其の人である。

分勞の一切の古き形式に於ては、其れより生ずる取引行爲の數を絶對的必要缺くべからざるものゝみに限らんとする明らかな努力が支配してゐるといふことは皆人の知る所である。分勞によりて生じたる一切の職業部門の中心點には、抑々それ等の生じ來りたる家内經濟がその最古の漸やく解體に赴きつゝある共力と共に立ちつゝあるのである。而して都市經濟の段階にありても尙ほ、職業構成、特化及び生産分割によつて作り出された特殊の生産經營及び職業労働者は斯かる共力と、依然として強く短き綱によつて相結ばれるものあるを認め得るのである。即ち彼等職業労働者は顧客の家より注文を得來りて、その家の爲めにその仕事を營みつゝある。時によりてはその仕事に従事する期間、一時的に其の顧客の家と消費協同體を形作ることすら又珍らしないのである(即ち出職)。

國民經濟の段階に至りては、消費者は幾百年來爲し遂げ來れる機能、即ち分勞的生产を指導してこれを結合する機能からいよゝゝ遠ざかつて行く。而して今や此等の任務そのものが一個の獨立せる職業となるのであるが、此の職業は同時に生産手段(少くとも流通的の)を所有する人、即ち資本家よりしてのみ獨立に營まれることとなるのである。資本家

には従つて果すべき二重の任務(資本調達と生産指揮)あり。これを顧慮して彼等を企業家と呼ぶ。

此等企業家の手中に入りては、分勞は全然その形式を變ずるのである。分勞がなほ生産分割と云ふ形式を取つてゐる間は、部分生産者は何れも己が原料より製出したる生産物を次の部分生産者に販賣するのであり、此の生産物は部分生産者の夫々に對して營利手段となり、流動資本となる。従つて完成せる物品を各方面に交換することゝ相並んで、分勞の各種段階を結合せしめることを唯一の目的とする豫先製品又は半成品の連鎖的交換なるものを生ずるに至る。斯かる半成品の連鎖的交換は、消費者と各種異なる生産者との間の唯一必須なる交換とは全然其の性質を異にするものである。即ち後者の交換は少くとも生産物の取得者にとつては純然たる需要交換にして、それにては該生産物の取得者に對して使用財としての貨財が問題となるのであるが、前者の交換に至りては、それは其の買主及び賣主にとつて常に一個の營利行爲なのであつて、交換物の使用性は副位に立ち、その資本性及びそれによつて得らるべき利潤が主位を占めてゐる。然るに此處に勞働推移併びに分業てふ分勞の新形式が成立するや、夫等はその對立的關係によつてその資本性を固定生産資料にまでも擴充せしめるに至る。分業は必然的に、恒久的隷屬關係に立つ勞働者階級を發生せしめ、資本主義的生产方法に始めて眞の飛躍を與へ、其れが通達し得る範圍に於て、曾て職業構成と特化とが創り出せるもの、即ち小なる經濟的存在の獨立性を再び破壊して行くのである。

故に分勞の此の新分位は、如何にも從來耳にしたることなき程度にまで、取引を増高せしめるのであり、同時に商業、運搬業、信用仲介、保險業に企業家主義に基ける分勞の無数の現象を呼び起し、而してこれ等の現象は其の側で更らに多様な新取引行爲を生ぜしめる條件となつてはゐるのであるが、此の新たな取引を作り出せるもの、それは決して分勞それ自身には非ず。實に近世國民經濟に於ける刺激的併びに創造作用的要素は分勞には非ずして、寧ろ交通がその榮

養源となりつゝあるかの營利資本なのである。

かの資本が貨幣と云ふ基本形式に於て初めて其の徵集力を顯現せしめた所は即ち商業であつた。其處から資本は生産に容喙するに至つた。それは商人が消費者に代つて、生産の指導に任ずるに至つたからである。斯くの如くにして工業の範圍に於て、先づ第一着に問屋制度を發生せしめた。問屋は賃仕事人及び手工業者に對しては外面的に全然、以前家父が有するたりしと同様の關係に入り來るのであつて、賃仕事人にはその原料を前拂し、手工業者よりは彼等所有の材料にて作り上げし生産物を買ひ取りて、それを賣捌くのである。一生産過程が各種の節に分割されてゐる場合にありては、問屋は其の生産物を生産の一節より他の節へと移す指圖を爲し、以て結局はそれを完成品として市場に出させるのである。而して普通彼等が働かしめるものは單に流動資本のみにして、固定資本を繼續的に取扱ふに至るは、問屋制度より工場制度に推移するが有利となる時に漸く然りである。然るに商業資本は工業の範圍にては、斯く單に在來のもの形式を變化せしめる作用を有するのみであつたけれども、運搬業及び保險業の範圍に於ては、自己創造的な作用を有してゐるのである。然れども此等の職業範圍とても、分勞の側面より觀察し來れば、本來はたゞ商業の一分派たるに過ぎざるものである。

斯くて吾人は資本を以て近世國民經濟に於ける機關構成的勢力なりと認め、分勞を目して其の手段と爲さざるを得ないものと思ふ。資本の負擔者及び代表者は企業家である。而して此等企业家は分勞の手段を使用して、曾て家父が獲たりしそれとは全然異なる結果を贏ち得ることを心得てゐた事は、殆乎として明かなる事實である。今日に於ては吾人が飲み食ひするもの、新聞で讀む事、芝居で見るもの、住み着る方法を規定するものは實に企業家である。而して一切が驚事である。貨財消費の大部分に對して吾人は自決權を奪ひ去られて仕舞つてゐる。而して企業家にとつては同種類の

大量生産が最も有利なるが故に、其の當然の歸結として消費の範圍に於て、畫一化が絶えず増して行く傾向を示すのである。

それと對立して勞働の範圍に於ては、いよゝ分化行はれ、各個人の勞働分野は益々縮小して行くのである。勞働の機巧が技術上其の元子に分解される時にのみ、それは企業家の事業の爲めの可塑性の材料を提供し得るのである。而して何れの企業も分勞によつて生じたる種々異なる行爲の斷片を一個の有機統體に結合するものにして、即ち經濟上にも又技術上にも非獨立的なる勞働者を打して一個の永續的生產協同體と云ふ一丸たらしめるものである。然れども斯くて生じたる生產協同體たるや、それは最早同時に消費協同體には非ずして、其の構成員は一切の生産的任務より脱離したる各自特殊の家計に屬するものであつて、此の各家計は相互の間にも、又企業家の家計との間にも、何等の交渉を有せざるものである。

斯かる生產協同體を構成せんとするに當りては、企業家は彼がその資本を投せんとする範圍に已に分勞の古き形式が存しるるや否やによつて、夫々異なる途をとるのである。

即ち分勞の古き形式が已に存しるる場合には、企業家は今後生産せんとする生産物と從來關係のあつたそして此れ迄經濟上獨立してゐた一切の職業部門を己が經濟中に吸收し、此處に其の勞働者を特化し、以て彼等をして其の經營が要求する部分的勞働のみを引き續き併立的に營ましめるに至る。例を取つて云へば、家具工場の如き即ち之にして、指物師、轆轤師、木彫師、坐褥工、硝子屋、ペンキ工、漆塗師相合して、其處に共同的生産に組成されてゐるのである。

又分勞の古き形式の既存せざる場合にありては、企業家は先づ以て勞働を分業によりて適當なる生産部門に區分し、大規模なる機械装置を以て其の經營を裝備するのである。

然り而して此の何れの場合にありても、完成を告げたる經營にありては、企業家の外には、唯だ隷屬的にして技術上よりいふも非獨立的なる部分労働者の存するのみとなる。たゞ第一の場合にありては此の部分労働者は獨立せる手工業者より發生するのであつて、此の際企業家の任務は夫等を一個の經營單位に結合せしめることに存すれども、第二の場合に於ては其の經營單位已に存して居り、其の成分を後から探し出さねばならぬこととなつてゐる。然れども此の二通りの起因を有する労働者とても、間もなく最早其の間に何物の差別をも附し得ざるに至るものである。

古き手工業經營は、假令、徒弟、職人、親方と其の完成の程度に差ありしとは云へ、同種の訓練を受けた少數の力が併立的に働くと云ふ點に其の根據を有してゐたのであつて、一緒になつて共に働きつゝある集團は手工業毎に全然異なる性質のものである。故に一つの職業種類より他種のそれに移り變ることとは到底不可能なることにして、鍛冶匠は車匠と成ることを得ない。國法も彼等の間に嚴重なる限界線を劃して、此の事實を承認してゐるのである。

然るに近代的工業經營は異なる教育を受けて相互に相等しからざる勞働力を企業に於て共働せしめる爲めに夫等を結合する。而して經營の爲めに夫等を聚群せしめることは、何れの生産部門に於ても皆、同一の組織原則に準據するものにして、多數の工業の間に何等明瞭なる限界線を認め得ぬのである。職業の差別なるものは企業家の間に於ては殆んど之を認めるに由なきものにして、労働者の間にのみ之を見る。即ち企業家の機能にとつては、彼が街鐵を經營すると、鐵工場を營むと、機械場を經營するとは殆んどどうでもよいのである。之に反して労働者の間には、分業の絶えず採用せられるや、多數の専門家を生じ、極めて相異なる生産部門に使用され行くに至る。金具工、旋盤工、鑄工、鉋工、削截工は非常に發達せる金屬工業の各部門に、機械製造の各科に、鐵道工場等に居り、火夫及び機關師はそれが綿紗を製作すると繪入新聞を作るとを問はず、何れの大經營にも使役され、指物師、葉鐵匠、轆轤師、桶匠は非常に多種の企業

に編入され附屬されてゐる。番頭、意匠家、技師また同じく多方面なる使ひ途がある。更らに加ふるに大經營が嚆下する不精練労働の大量を以てす。斯くて多數企業家の任務とし云はゞ、此等の労働要素を適當なる割合に結合し、それが統一ある一個の機關の如く共働するやうに組織する其の事に存するのである。

以上の如き忽卒なる概観によつて乃ち知る、分勞なるものは夫々の經濟段階を支配する組織原則に準じて、時代の異なるに從ひ、各民族の經濟と各個人の生存とに極めて異なる作用を及ぼし來りしものなりと云ふことを。

彼の閉鎖的的家内經濟の段階にありては、家父及び主婦の掌裡にありし聯力が優勢であつたり、奴隸制度又は莊園制度に基く分勞が完成されたりしてゐた。而して其の何れの場合にありても、家族が永續的なる生産及び消費の協同體を示してゐる。其處には「我と働を共にする者また我と食を共にせざるべからず」といふ原則が適用される。

都市經濟の段階に於ては、その時代を支配するものは特化と生産分割とである。部分生産者は人的には自由なりと雖も、彼等が生産の方法と時間とは主に彼等の製作物の消費者が之を決定するのである。しかも此の消費者は適當な場合には此等の部分生産者を結合して、一時的生産協同體を作らせもするのである。而して此の時には、その消費者が彼等部分生産者に食料を給與せしことも亦珍らしくないのである。

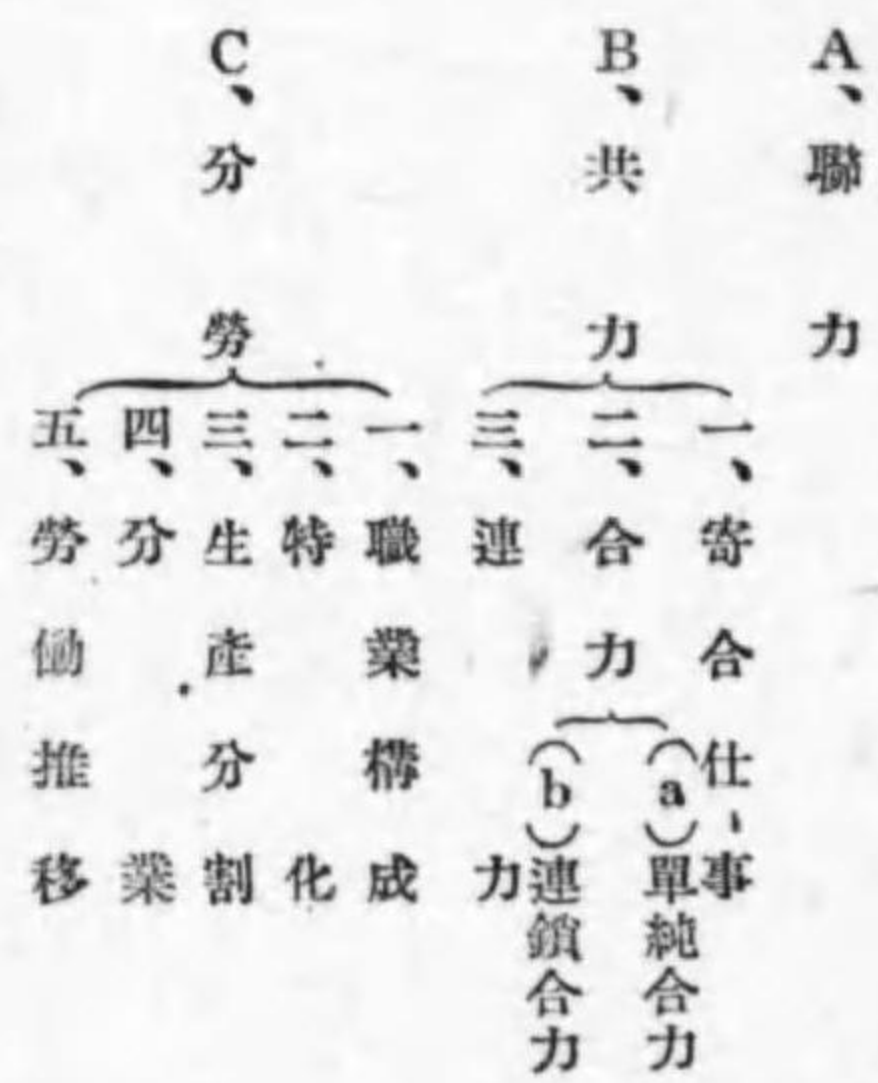
進んで國民經濟の完成せる段階に至りては、分勞的貨財生産を支配するものは實に企業家である。部分生産者は人的には自由なる労働者にして、企業家によりて繼續的なる生産協同體に結合されるのである。而して其れ以外一切の生活協同體は滅び去つて、もし例へば創業記念祝賀會の機會に際して、企業家がその労働者と共に祝典を擧げるやうな事があれば、新聞紙は彼が労働者と卓を共にして飲み且つ食つたといふ事を事珍らしげに特筆して、遜讓の徳と稱ふるを惜まざる有様である。

其等は踰ゆべからざる深き罅隙によつて分けられてゐる相異れる經濟世界である。原始的の家内に行はれる職力の上には、否な一部は舊き時代の分勞の上にさへも、道義的な生活共同の暖かき微風が渡りつゝあるの時、一方、近代的分勞の天地には計算、契約主義、利益主義の寒き壁くが如き嵐が吹き荒んでゐる。舊き分勞は經濟的獨立を擔ふ所の菩薩であつたが、近代の分勞はいよゝゝ大多數の大衆を隷屬の淵へ突き墮す夜叉である。人間は資本の壓迫の下に、其の營利機能に於ては益々其の性質を異にして行くと共に、消費者としては漸く齊一に赴いて行く。舊き時代に於ては、各個人の貨財調達はその手、彼の頭に成る個人的形相を供へし作品として、謂はゞ彼れ自らを體現せしめたる彼が本體の一片であつた。然るに今日吾人を取捲きつゝある使用財は、多數の手、多數の頭の產物である。其の創成者は吾人に對して心調の相響くものある無く、吾人が市價を投じて以前の所有者より得たる彼等の作品また多くはそれと選ぶ所がない。人の心は狭き職業生活の中に狭まり行きて、遂に全く鈍磨してゐることも珍しくない。嗚呼、斯くの如くにして吾人は吾人が活動の範圍に於ける潑刺たる生命と創作の歡びとを失つた代りに、かの幾千の手が吾人の爲めに動き、幾百の頭が吾人の爲めに考へる事によつて可能となる消費の豊富によつて十分に償はれてゐるであらうか？ 或は人生は分勞によつて徒らに享樂に富めるものとはなつたが、歡喜に乏しきものとなつたのではなからうか？

九 勞働組織と社會階級構成

労働組織の經濟的過程は即ち順應過程である。それ等は普通には聯力の範疇に屬するにせよ、共力のそれに従ふにせよ、又は分勞のそれに歸するにせよ、それ等は凡べて其の時々の労働任務と個人的労働能力との間に成立し得る不均衡を撤廢し、兩者をして相融和せしめんとする努力より生ずるものである。其の爲めに其等は個人の上に反作用を及ぼして、個人をして精神的にも肉體的にも一定の労働任務に適應せしめ、それに馴致するを強要するのである。而して其の際には最初は必ず人間天性の或る反抗を克服せねばならぬのであるが、その一度打ち勝たれるや、引續いての習練によつて、此の消極的要素の代りに一個積極的なる要素の出現し來るを普通とするのである。斯くて個人は己が労働の特殊の種類に對する了解を得るに至り、それに對する獨得の熟練が作り上げられる。而して絶えず同一目的に向けられてゐる彼の精神力は遂には一定の方向を取つて發達する。略言すれば、その労働に對する性嚮が彼の本性の一部となるに至るものにして、これによつて彼は他の個人より區別せられるのである。

〔一〕 本講及び前二講を了解する便に資せんとて、労働組織の各種及びその亞目を表記すれば、



九 労働組織と社會階級構成

斯くて各個人の従事する労働の種類が人間に於ける個人的なもの、特殊の特徴を生ぜしめる性質ありとすれば、此處に自ら一箇の問題が生ぜざるを得ない。問題とは即ち、斯くの如き労働より生じたる個人的特徴なるものは幾何の程度まで種族の社會生活に反作用を及ぼすものなりやと云ふことである。これを更に峻厳に云へば、問題は「一定の労働組織には一定の社會組織も亦、相應するものなりや。労働組織が社會組織に及ぼす作用は如何なる姿を取るべきか」と云ふ事になるであらう。

此の問題は一見極めて單純なるが如くにして實際は然らず。例へば印度の階級制度を職業が世襲的になりることに歸し、從つて分勞に其の淵源を求めることが、これ程簡單なものに他に無いと思はれるが、下層階級は上流階級とは異なる血統に屬するものであるといふ事を吾人は確かに知つて居り、且つ多數の例證は居住地及び所有物も亦かの相續的社會階級を發生せしむるに與つて力ありしことを語つてゐる。斯くて遂に此の階級なるもの、本質は血液と交際との純潔の中に發見されたといふことを見るのである。階級の差は殊に食事を共にするを許さざれども、仕事の同等なることを妨げなかつた様である。此等の事柄は皆、職業による區別なるものは寧ろ種族差別より生じたる階級分割の結果にして、其の原因に非ずとの假定を非常に正しいものと思はせるのである。而して此れに類せる進化過程は中世の階級中にも尙ほ之を認めることが出来る。

〔二〕種族工業に就いての上の六〇頁以下に敘べたる事柄は悉く事柄の真相を捉へしめるものがあると思ふ。

總じて經濟と社會との關係に於て決して忘るべからざる事柄は、その關係が相互的にして、其の際に何れが作用なるか、何れが反作用なるかを確認すること容易に非ずと云ふ事である。労働組織の或る特殊の種類が個人の一生涯を把握する時ば、それは社會に向つて特種な分化をした人間を供給するものであるが、それと同じく、社會は更に其の階級

及び個人を藉りて労働組織が取つて以て利用し得べき可型的材料を供給すべきものなのである。社會の或る成層は共力又は分勞の或る形式に有利なるかと思はれば、他の成層はそれに對して有害なることがある。例へば奴隸制度は連鎖合力に有利にして、多數の無産賃銀労働者層の存在は分業を促進せしむるものである。然れどもかの社會的要素のみが此等の作用を喚起し得るものには非ずして、其處にはそれ以外、技術的併びに一般文化的性質を有する豫件が存在せざるを得ざること、例へば分業に於て、その發生には多方面に發達せる生産機關の存在を前提條件となすが如きこれである。

斯くの如くに此等一切の關係は非常に複雑せるものであつて、それに對しては絶大の注意の支拂はれんことを要せざるを得ない。多くの場合に吾人が讒かに言明し得るは、何が經濟的併びに社會的範圍に於て併立してゐるか云ふこととそれのみであり、夫等が如何に相互に規定し合ひつゝあるかは到底定むるに由なきを奈何せん。かるが故にもし吾人にしてそれに應じて各種の労働組織形態の社會的關係を明らかにせんと試みるならば、それは取りも直さず吾人をして殆んど前人未踏と稱すべき境域に赴くことを意味するものにして、一步は一步より正蹊を脱して、拓き難き荆棘の裡に没入せざるを得ないであらう。

先づ第一に彼の労働組織の最も古き體系なる聯力なるものは、社會に對しては何等の意義をも有するものに見えらる。其の抑々最古の發生に溯れば、各個人が其の生存に必要な一切の労働を營まざるべからずと云ふ經濟未生の時代にまでも及ぶものにして夫れより閉鎖的家内經濟の最も舊き段階に於て、極めて廣く行はれてゐるのである。道具は簡單にして其の數少く、その各は極めて異なる種類の目的に供せられ、各人は其の取扱方を心得て居なくてはならない。而して社會の分化、社會的隸屬關係の構成には、斯種の労働が何物の刺激をも與へ得ざりしことは明白なる事實である。社會は何等の差別なき個別家計の聚群より成立しむるなりしものなるべく、土地の總括所有權が支配してゐる限り、

「社會は事實上斯かる状態を脱し得ないのである。之に反して個別家計の内部に於ては、男子の労働と女子のそれとの分離を認め得はするが、これが社會に翻案されはしなかつた。各家計は此の點に於て他の家計の克明な反復たるにすぎないのである。然るにそれにも拘らず、其處になほ社會的差別なるもの存するものありとせば、その原因はこれを他の事情に求めざるを得ないのである。」

漸やく文化の進める段階、否な最高の發展に到達せる時代に至りても、聯力は如上の性質を脱し得ない。今日に於ては、夫れは殆んど主に經濟生活の低級なる地方、社會下層の間に行はれつゝあるものにして、その多くの場合、微力といふ感情より生じ、「小民」の支柱であり、其の保護と慰藉とである。否、それは此處では、餘りに行き過ぎたる分勞の反動としてさへ出現し得るのである。然りと雖も、若し夫れのみが單獨に一國民の經濟に作用しるとせんか、その向上の努力を排除することに依つて、致死的なる單調の社會を將來せしめることにあるであらう。

〔三〕 國家學辭書 (Handwörterbuch d. Staatsw.) 第四卷、三七七頁にある余の注意参照。

然るに共力に於ては事態は一變する。固より其の中に於て最も弛緩せる形式を有する寄合仕事は常に唯だ一時的にして同種類のもの、間に行はれ、社會の組織には殆ど何等の影響をも及ぼし得ざるもの、假令及ぼし得たりとするも、それは僅に或る一抹の反映を社會に與へ得るのが精々であらう。之に反し合力の二形式は社會の集團構成の手段となるものにして、社會的隷屬關係を作り出し之を維持するのであり、よしそれ程には非ずとするも尙ほ、他の原因より其の隷屬關係の生じたりし場合にはなほ其の存立を助けるものである。而してよし同一の確實さを以て之を斷ずる能はずとはいへ、がの連力の多數形式に就きても同様の言を爲し得るのである。合力にせよ、又連力にせよ、多數者が共働すること、要するに道具の不完全なるに對して労働任務の大なることに基いてゐる。而して其の労働任務が恒久的性質のもの

なるか、それ程まで、なくも一經濟範圍に(例へば農業に於けるが如く)再々反復せらるゝ如きものなるときは、夫れを確實に維持せんが爲め、茲に或る統治權力によつて確保せられる恒久的な社會的集團構成を促がすに至るものである。

奴隸制度及び體僕制度が長く繼續したりしも、大部分は其の爲めであつた、假令、共力の必然性が斯かる制度を元々作り出したるものなりとは言ひ得るものではないけれども。然し人間所有權及び労働人口の相傳的隷屬關係が存立して居た處では到る處に、次の現象を認める。即ち其の初期に於ては、主と僕とは大なる差別を有せず、隷屬階級の數も支配者階級に比してあまりに多からざるのみか、却つて少數なることが珍らしくないと云ふ事である。然るに時いよゝゝ進みて事態漸く變じ、人口の從屬的部分の數は益々増加して行く。こは自然的内的人口増殖によると云はんよりは、寧ろ征服、人間略奪、奴隸賣買、弱き自由民に對する權力の濫用による人爲的的增加によると云ふべきである。斯くて夫れと同時に、富裕なる自由民階級は益々隷屬民の階級より峻別の度を加へ、労働は前者の眼には恥辱となり、後者に對してはいよゝゝ厭はしくなり行く重荷の形を取つて行くのである。而して深きゝ溝渠は社會を劃して、強制定役の状態より脱する以外には、この溝渠を打ち踰ゆべき手段を求めることが出来ない。否、此の強制定役の關係より脱すると云ふ此の唯一の手段すら、尙ほ十分の効果を收め得ざりしこと決して珍しからず。例へばローマ人の間にありては、自由民と解放者との間には、なほ峻平たる區別が劃されたりしが如き、即ち之である。

斯かる階段が存せざるを得ざる理由は、實に共力の進歩せる諸形式がその制約を蒙つてゐる技術的要素に存するのである。道具が不完全なる事の結果として、一層大なる労働効果を所期せんとならば、それは唯だ大量に人力を提供することによつてのみ達し得られるといふ事になるのである。従つて個別經濟の進歩とし云へば、それが強制定役者の數が増加するといふ前提條件に結び付いてゐる。支配階級の福祉の増進とし云へば、吾人の感じより云はゞ戰慄すべき程の

人間材料の浪費を意味してゐるのである。此處に最も効果ある労働使用を爲さんが爲め、人間材料を組織し訓練せざるべからざる必要が生じて來るのである。

〔四〕 Zschr. f. Sozial- und Wirtschaftsgeschichte 誌、第四卷、六八頁以下。ロリア所論「近世アメリカ及び歐洲古代に於ける奴隷經濟」(A. Loria, Die Sklavenwirtschaft im modernen Amerika und im europäischen Altertum)を参照せよ。

不自由民は之を軍隊的に使用せねばならぬと云ふ必要は、古來常に彼等が不信用にして懶惰なるが爲めに、労働の嚴重なる監督を必要となすことに基くものにして、實に斯かる特徴は不自由民には恒久的な制度として到る所に固着してゐる所のものである。然れどもこれ決して不自由民にのみ限るものに非ずして、寧ろ半文化一般の必然的隨伴現象と見るべく、自由民の間にもなほ之を認め得るのである。而已ならず奴隷所有者は各個の奴隷に或る一定の義務範圍を指定して、夫等が責任を以てそれが遂行に任じ得る如き場合には、共力の組織以外に分勞の組織をも採用しつゝあるのである。然しながら生産の範圍に於ては個々の奴隷に特殊の仕事を分與することは、多くの場合不可能であるか、又は假令爲し得たりとするもなほ不利益を免れ得ざりしが故に、此の時代において共力が最も弘く行はれ、それが不自由労働に對する遙かに優勢な組織原則となつてゐるのに接するのである。

〔五〕 この盛んに應用されたりしは家事向の仕事及び人的服務の方面であつた。前の一〇五頁以下、三二九頁以下参照。

ダヴィッド・ヒューム¹⁾既に曰く、「奴隷制度は嚴格なる軍隊的訓練を強ゆるものなり」と。然れども吾人をして言はしむれば、斯る軍隊的訓練は又規則的に、かの労働組織と結合しつゝあるものである。

〔六〕 「論文集」(Essays) 二五二頁。

古代エジプト人の間に於ては、『大なる管理の何れもが専屬の手工業者及び労働者を所有し、軍隊式に區分されてゐた。』

1) David Hume

古代國家の貴族の領地にては已に斯かる一隊に接するのであつて、旗手の指揮の下に領主の面前にて分列式を行ふのに會するのである。大きな船となれば、何れの船の漕奴等も集まつて夫々一隊を編成してゐる。彼等の神話中の、かの烏羽玉の夜を冥府の國翔けて太陽を載せたる舟を曳くといふ魔神の一群にさへ、此の名が冠されてゐる。寺や聖域に働く手工業者も亦、同じ様な組を作つてゐる。エジプトの役人は下層人民を唯だ群集としてだけ考へることが出来、一人一人の労働者は、我々の國に於て一人の兵士が其の上將に對すると同じく何等存在の値も認められてゐない。：：此等自由又は半自由なる労働者が已に常に隊伍を作して働きつゝあるものなるが故に、寺及び聖域専屬の體僕又は領地の農奴は形式上軍隊的に編成せられ、正に軍隊の一部とさへ見られてゐる。

〔七〕 エルマン著『古代エジプト人と其の生活』(Erman, Ägypten und ägyptisches Leben im Altertum) 一八〇—一八六頁。

大なるローマの奴隷經濟に於ても亦、夫れと類似の事柄を見る。地方の采有に於ては不自由労働者は其の仕事に應じて部隊に分たれ、各部隊は更に十人未満の小隊に分たれて、夫々「驅使者」¹⁾の下に屬し、全隊は采有管理長の指揮の下に立つてゐる。彼等の畫間の仕事は軍隊的秩序の下に行はれ、夜は舍營をなす。最も富裕なる家の中で、都會の家族は又、かゝる相貌を示すのであつて、帝室にては奴隷の各部隊は集團又は團體と呼ばれてゐたのである。

〔八〕 マルクアルト著『ローマ人の私的生活』(Margardt, Privatleben der Römer) 一四四頁以下、一五四頁参照。

共力の必然性が、遂に不自由民の間に永續的組織を作り出さしめるに至りし有様を此處に見るのであるが、ローマ末期の貸地制、中世の莊園制度及び近世の領地隸屬制に於て、同じくかゝるものに接するのである。即ち依て以て農業的大經營に必要な労働力を土地所有權と結合せしめて、其處に閉鎖的な團體を作り上げ、以て播種收穫に方りて交々生ずる労働の需要に對する準備を十分に爲すことが出来たのである。かるが故に家人制度、農奴制度、體僕制度なるも

1) Treiber 2) Villiens 3) Kollegium 4) Körperschaft

のは共力の必然性に其の支持點を有するものであり、其等の制度は此の共力の助けを藉りて、以て廣き分布と長き繼續とを得たのである。

三五二

依て知る、共力が社會階級組織に及ぼせる反作用は何等疑の挟むべき餘地の存せざることを。實に共力は常に社會の組織の中に獨得なる社會法上の特徴を作り出したるのみに停まらず、拘束される労働者の精神的傾向にも根底的なる影響を及ぼしたのである。十八世紀に於けるドイツの農業状態の最も慧眼なる觀察者の一人は農民の性格に於ける最も著しき特徴を論じ、『彼等は甚しく相互に相寄り相扶けてゐて、都會の一般市民よりは遙に社會的に生活しつゝあるのである。彼等は毎日何れの農圃の仕事に於ても、夏、野に働き、冬、穀倉、紡績室に仕事を爲す時にありても、互ひに相扶けるのである。彼等は兵卒の如く一隊を形作り、團體精神をも有してゐる』と述べてゐる。實に不自由民の凡べての状態に就きてはそれと類したることを云ひ得るのであつて、労働の同種と訓練とは、彼等を打して家畜の群の如き一團を作り出すに至るものであり、此の一團は彼等の境遇の希望なき程度がいよいよ甚しくなり行くに伴れ、益々魯鈍にして且つ懶惰なるものと化して行くのである。

〔九〕 クリステイアン・ガルツェ著『農民の性格及びそれが領主併びに政府に對する關係に就て』(Christian Garve, Über den Charakter der Bauern und ihr Verhältnis gegen die Gutsherren und gegen die Regierung) 一七八六年、プレスラッ版 一四頁以下。

此處に同時に又、彼等の労働の収益性が貧弱なりと云ふ原因が潰たはり、此の事は更らに彼等の取扱を無情冷酷なるものたらしめ、働く人々を獸類の段階に壓下する理由が生ずる。而して一代より次の世代へと、同じ様な労働に伴はれて同じ様な考へ方と、その壓迫者に對する同じ様な感情や感覚が彼等の間に受け繼がれて行く。斯くて今や支配階級は

精神的にも、肉體的にも、被壓者階級とは目に立つ程に區別されて、かの亭々として聳ゆる森の樹が、曲り拗りたるいたいけなる木と類を異にするに相等しき状態を呈するに至るのである。さりながら原因と結果とは、此の進化の過程に於ては宛として紛糾せる亂麻の如きものあり、經濟的要素と社會的要素との作用及び反作用の入り亂れたる迷路を見る觀がある。斯くの如くにして何處へ赴くも、研究者の眼を確實に導く絲を發見し得ないのである。要するに、經濟と社會といふ二つの範圍の間には極めて密接なる關係が存する。しかもそれが我々が確信を以て斷言し能ふ事の一切なのである。これと比すれば、労働組織の第三の主形式、即ち分勞に於ては、吾人の問題はこれを決定するに遙かに容易なるものがある様である。而已ならずそれには吾人に取りて一層深き興味を喚起するもの、結び付き居るを以てす。これ蓋し今日の世界に住む何人も、親しく夫れに觸れるが故である。人苟くも人類社會の發潰したるを肩とせざる限り、人何れも特種の労働任務に當らざるを得ざるものにして、各人にそれがいよく完全に行はれ行くに従つて、人間はその行動及び思索に於てさへ益々別箇に相分れ行くのである。

一九〇七年の獨逸職業統計は全體に於て一萬三千六百六十八の職業別を示してゐる。今其の中の多數職業に對しては全國各地方によりて異なる名稱を附しるものありて、其の爲め二重の計算をなしたるもの無きに非ざるべく、爲めに此の數字より當然減じ去るの要あるを顧慮すべきではあるが、同時に又他面より考ふれば、殊に公務併びに自由業中には、全然異りる職業種類にてありながら、なほ同一名稱の下に呼び做されるものあり。更に個々の大經營内部には分業の結果發生して、後より後へと特殊労働者の手に委ねられて來た許多の特殊労働ありて、夫等は統計の上には極めて不完全に計上されるといふ事實も見遁がすべからざることである。かるが故に上掲の數字は過多なりと云はんよりは寧ろ過少なりと云ふの適當なるを信ぜずんば非ず。斯くて人間行爲の種類は約一萬三千五百を算すと云ひ得るであらう。

而して其の各が近世社會に於て人生の任務となり、全人格を捧げしむるを得るものなのである。

しかもなほ此れのみならずして、新らしき特殊職業の陸續として構成され来るものあり。何れの新らしき生産手續も、何れの技術及び科學の進歩も一般的なる分勞の下に屬せしめられて、思索し感傷する人間を驅つて、極めて小なる又最も瑣末なる職業の利害關係の狭き範圍に押し込めて仕舞ふ。斯くて曾てファーガッソンが思索といふことも遂には専門の一業務となるべき時代の到來する期あるべしと豫言した其時は已に、到來して仕舞つたのである。然り而して數限りなき生活の範圍に伴ふ特殊利害分化し、生存競争のいよゝ激烈になり行く度に相應じて、一般人間のなるもの領域は益々狭められて行くのである。

〔一〇〕 一八八二年より一九〇七年に至る獨逸職業統計にては、職業別の數が七千四百六十九を増した。即ち

職業種類	一八八二年	職業調査 一八九五年	一九〇七年
A 農業、園藝、牧畜、林業、漁業	三五二	四六五	八五一
B 採鑛冶金工業及建築業	二、六六一	五、四〇六	七、六一六
C 商業及交通業	一、二一五	二、二六六	二、五九二
D 家事服務及代的貨物服務、銀勞、軍務、官廷服務、公民及社會服務、自由業	七五	八二	一二五
E 教育	一、八七六	二、〇七九	二、四八四
計	六、一七九	一〇、二九八	一三、六六八

斯かる數の増加はどれ程まで實際の職業増加を語りつゝあるものなるか、又統計上の數字に如何程まで信を置き得るかば明言し

1) Ferguson

得ざる所なりと雖、此の差の一部は分勞がいよゝ進み行けるに起因せるものなるは否むべからざる所である。

〔一一〕 多數人が其の思想を、ある新聞工場より仕入れつゝある政治論の範圍に於ては、これが最も明らかに現はれてゐるのである。されど夫れに劣らざるものは學問の範圍にして、何時にても新らしきものが勝を制してゐる。例へば或る本の評論家とか拔萃者などいふものが、その原本の著者よりも却つて世に持て囃される現狀はこれを語りつゝあるものではあるまいか。

人間の自然的及び文化的差異が斯かる極めて異なる生活方向への分岐を助けてゐることは到底疑ふべからざる點なりと雖も、それは世の中一般に考へられてゐるよりは遙かに程度の低いものと思はれる。各人其の職業に秀でんとすれば、調馬師は輕子人足より分れ、麥酒釀造者は裁縫師と離れ、舞姫は歌妓と袂を分ち、詩人は商人と別の道を歩まねばならぬものであるといふことは何人も心得てゐる。然りと雖も、如何なる天賦が第一人者をして旋毛蟲の検査員たらしめ、第二人者をして製本屋たらしめ、第三人者をして鶏眼の切開醫や靴下類製造人や、煙草商人たらしめる前世の因縁を示しつゝあるかを解せんとするは、或る一個人に對して或る自由業に於ける結果が豫定し得ざるが如く、極めて困難なことではなくてはならぬ。

かるが故に、假令職業種類中には或る特殊の天賦をして十分なる發展を爲さしめ得るもの無きに非ざれども、多數の他の職業に於ては、かゝる天賦の存在が何等認め得べき意味のないものがあるであらう。然しながら凡て職業は絶えずこれを練磨し習練して行くことによつて、これに従事する人に或る分化を生ぜしめるに至るのである。即ち或る器官はこれを使用せざれば萎縮するに反し、他の器官はこれを絶えず使用することによつて、完全の域にまで發達する。之と同じく個人も亦、其の勞働任務に應じて、肉體的にも精神的にも又道義的にも、或る一定の調子に調整されるのであつて、職業によつて個人に一種特別にして時には外面にまで著しく目立つ特徴が刻印されることを珍しとしないのであ

る。吾人一度未知の人に會せんか、其の時は知らず識らず心の裡祕かにその人を職業の型式によつて分類してゐるのであつて、これによつても上述の眞なるを承認してゐる譯である。

然れども其の經濟的組織は此の人的分化を更らに社會にまでも及ぼすものである。同等の生活任務と人生觀、相等しき經濟的地位と慣習とが、其處に新しき社會的集團構成に導くのであり、茲に職業階級を作り出す。而して極めて纖細なる分枝にまでも及んで此の職業階級を支配する利益協同の念は甚だ強盛であつて、遂には血統上の身分といふ傳來的差別を蔽ひ隠し、もしくはそれを無意義なものにまで押し下げて仕舞ふ。然り而して一時は、此の新しき社會的大量關係が政治的限界を乗り踰えるかに見え、職業組織に基く社會的利害關係と共同感情とは血の等しきことに根據を有する國民的のそれを蔽ひ隠してしまつた様に見え得たのである。

斯くの如き状態の下に於ては、「職業の自由選擇の行はれる社會にありては、分勞によつて生じたる人的差別は、かの世襲階級制度又は血統階級制度に於て斯かる特性が相傳されたるが如く、人々の間に遺傳せらるゝものなりや否や。又遺傳せらるゝとするも、それは幾何の程度まで可能なりや」といふ已に近時の生物學によつて説明されてゐる問題が提起され得たのである。而して此の際問題とすべきは、遺傳の可能が無雜作に認められてゐる―尤もこれだとて最早さうには行かないが―職業上効用ある自然的賦性をだけではないのであつて、或る職業に對する心身の全性嚮が問題とされ、一つの局限された勞働任務に適應することによつて獲たる機巧が問題となり、これによつて制約される精神的水準が問題に上り、職業上の地位によつて作り出された人生觀や意志方向が問題となるのである。

此の最後の問題に就いては、詩に於てはシェクスピアの「冬譚」¹⁾以來幾度か取扱はれて居り、通例は兩親の性格及び生活狀態と相反する教育の感化を有效であるといふやうにしてゐる。而してその結果に就ての見解は十九世紀中に幾變

1) Shakespeares Wintermärchen

遷を経て來たのであるが、詩作が時代精神及び詩人の生活地位に依存してゐることを此の教育問題及び遺傳問題に就いて精細に探究するとすれば、それは文學史家に取つて確かに報償多き問題であつたであらう。かのリンダウ¹⁾「伯爵夫人レア」は高利貸の娘を其の父親の僕に反して高德の粹とならせてゐるかと思れば、アルセーヌ・ウッセーの小説「三公妃」²⁾では、生後直ちに取替へられた三人の子供の行末を敘べて、本來百姓息子なりしものが皇子として教育されしも、其の悟性心情より云へば依然として百姓たるを免れず、輕薄なる女優の娘は遂に娼婦に墮し、公爵夫人の娘は賤しき境涯に住みながら尚ほ生れながらの崇高な心操を示してゐる。

それ等よりも更に眞面目な文學の中にも、幾度か此の問題に觸れてゐるものがある。リールは其の『文明史的性格者』³⁾の中にギムナジウムを優等の好成绩にて卒業する「凡庸な百姓の子」と「教養ある兩親を有する伶俐なる息子」とを相對立せしめ、彼等の間には階級毎に打ち越え難き障壁の存することを述べてゐる。前者は大學へ行くとすれば中位の學生となり、もし教養ある兩親を有する教育ある息子が大學へ進むものとせば、直ちに此等の爲めに追ひ越されるに至るべく、遂には彼はたゞ「極めて凡庸にして依然として官僚的なるお役人」と成るにすぎざるべしと云つてゐる。然かも一方、かの「多種の教養の興味が已に其の兩親の家に飛び集まつてゐる」教育ある兩親の息子が將來如何なるものとなるべきかに關しては遺憾ながら些の述ぶる所がないのである。

嚴格なる科學的取扱ひの要求を以て⁴⁾尤も此處には其のやうな要求は掲げられてはゐないのだが、初めて此の問題を討究したのはシュモラーであるが、確然として斷じて曰く「各種の異なる行爲への個人の順應は、幾千幾百年を通じて遺傳的に昇進せしめられて、いよ／＼個人的なる益々異種の間人を作り出したのである。一切の高等なる社會組織は分勞によつて生ずる不斷の分化に其の根據を有するものにして、『階級制度といひ、僧侶・軍人・富豪の貴族政治といひ、

1) Lindau, Gräfin Lea. 2) Arsène Houssaye, Les trois Duchesses
3) W. H. Riehl, Kulturgeschichtliche Charakterköpfe 4) G. Schmoller

同業組合制度といひ、又今日の全労働制度といひ、要するに分勞及び社會分化が刻印した時間的に異なる形式たるに過ぎずして、各個人は唯だ其の個人的運命によつてのみ己れに固有なる機能に到達したるものには非ずして、それと共に遺傳的素質に基く其の人の心身の構造、神經及び筋力により幾多世代の因果の連鎖を通して規定されるものである。而して社會的地位、所有、名譽及び收入の差別は、社會分化の二次的結果たるに過ぎざるものである』と。

〔一〕 シュモラーは *Jahrbuch für Gesetzge. Verw. und Volksw.* 第一七卷(一八九三年)三〇三頁以下に余が著作の批評をしてゐるが、其の中に斯かる言ひ方は不穩當にして、彼れの解釋は單に『歴史の哲學的研究の一種』たるに過ぎざるものなりと言はれて欲しいと述べてゐる。然れども余は斯かる命名も、實は余が此處に用ゐたる名稱と決して背反するものにあらずと信するのみならず、シュモラーの該論說の後段の説明に就きても余が彼れの眞意を誤解してゐる何等の證左なきを思ふものである。余が故に余が本書第一版に用ゐたる所を其のまゝ、以下に印刷させ、そしてシュモラーの上述の箇所の註を讀者に注意せしめることを以て最も當を得たるものであると信する。

〔一三〕 彼の年報、第一三卷、一〇三—一〇七頁、第一四卷、四五—一〇五頁に於ける分勞に關するシュモラーの論說、及びプロイセン年報第六九卷、四六四頁に於ける簡單なる事實の蒐集を参照せよ。

世人は多分、此の驚歎すべき命題の證明は、生物學的方法によつて行ふことが企てられたこと、期待するであらうが、然し實際は生物學的比喻に軽く接觸するといふ事を除いては、斯かる軌道は回避されるのである。さりながら此の軌道を更らに追及することが確かに得策であつたらうと思ふ。蓋し此の軌道は、遺傳の概念が定義され、模倣及び教育の範圍に對してその範圍が限定されるべき一つの點に確實に導くに相違なかつたであらうが故である。

〔一四〕 此の種の試みは、勿論貧弱なるを免れ難きも、フェリックス著『財産發達史』(Felix, *Entwicklungsgeschichte des Eigentums*) 第一卷、一三〇頁以下に行はれてゐる。——最近の生物學者の間には遺傳問題の中此處に關係してゐる點に就ては最早別段に爭論が無い様である。即ちワイスマン『萌芽原形質』(Weismann, *Das Keimplasma*) 一八九二年、イェナ版)は後

天性の遺傳に斷然反對してゐる。其他 *Journal of the Anthropological Institute* 誌、第五卷、三二九頁以下のガルトン筆『遺傳說』(Galton, *A Theory of Heredity*)、ホーヌ著『心理學原理』(James, *The Principles of Psychology*)、第一卷、六七八頁を見よ。ワラス著『科學的社會的研究』(Alfr. Kussel Wallace, *Studies scientific and social*) 第一卷、五一—二頁には極めて興味ある例を擧げ居るを見る。即ち其れによれば「習練によりて生じたる特殊の機巧は假令幾世代を繼續するも決して遺傳するものに非ず、又何等の性嚮の生ずるものあるを見ず」と結論せんと欲するが如くである

かるが故に、吾人も亦此の道程を避けなくてはならぬのであり、シュモラーが己が主張の爲めに採用したる歴史的及び人種學的の大きな材料の吟味に突入しなくてはならないであらう。

然るに斯かる歴史的證明法には夫れに特有なる點を有する。即ち既往を回顧する人の眼には、事物が轉移されて映じ、原因と結果とが時間上彼には極めて接近して見えるのである。これ恰かも遠方を眺むる人が、實際は人家の群の遙か後方に聳えてゐる塔を直接最も前方にある人家の間に抽んでゐるが如くに考へると相似たる状態にあるのである。

斯くて余は惧る、シュモラーも亦彼れが浩瀚なる研究の最も樞要なる點に於て、史的過程の因果關係を實際とは全く顛倒せる順序に眺めたるものにては非ざりしかと。世襲階級、僧侶階級及び古代貴族の發生といふが如き、研究がその史的過程に及び得ざる時代に溯らざる限り、シュモラーのあの顯著なる結論も、當然之を顛倒せしめて、『財産及び所得の相違は分勞の結果に非ずして、其の主要原因なり』と云ひ得べしと余は信じ度いのである。

此の事は、吾人に明かに知られてゐる限りの過去に對しては、十分確かに表はされてゐるのである。土地所有權の不平等なる大さと所有方法とが、古代ギリシヤ及びローマの人々の間に、又ゲルマン民族及びラテン民族の間にも中世初期以來階級組織の基礎となつてゐる。貴族といひ、農民階級といひ、家人の階級といひ、不自由民の階級といふ、これ等

皆その初めに於ては單なる占有階級に過ぎざりしもの、時を経て漸く一種の職業階級となつたのである。中世に於て手工業者階級出現し、此處にそれに固有なる職業構成が入り来るや、それは更らに占有分配から出發してゐる。莊園の奴僕、土地を所有せざる家人にして工業的技術を學びたる者は自己の手一つにて彼等の機巧を利用せんとし始めるのであるが、其の工業の經營法は彼等の貧困に相應しいものたらざるを得ないのであつて、該經營法は純粹なる賃仕事であり、其の工業經營者は原料を其の註文主より受取つてゐるのである。而して農夫と手工業者との間に、本來の生産分割の行はれるに至つたのは、極めて後世のことであつて、此處に至つて手工業者は自家經營資本を所有することゝなるのである。されど此の經營資本なるものが尙ほ極めて少額にすぎざりしは、手工業者が通常、個數註文にてのみ仕事を營み、一原料産物が経過した工業的全變形過程が、普通に一人の手に於て行はれてゐたことによつて最もよく明らかになつたのである。工業經營は當時、徹頭徹尾、小經營であつた。もし或る手工業が其の生産範圍の廣濶なるが爲め、比較的大なる資本を要した場合に於ては、分業の形式をとる大經營に訴へずして、特化といふ形式を採つた。即ち此の特化によれば、資本の要求額は制限され、經營は小規模に維持されたるが故である。

〔一五〕「役貴族」(Dienstadel)といふものがあるけれども、それは此の解釋を覆す證據となるものに非ずして、却つてそれを證するものなりと云ひ得るのである。何となれば、もし「領地貴族」(Grundadel)なるものがそれに先立つて存しざりしとせば、それは到底考へ得べからざるものであつたからである。

中世の分業が工業の方面に於て爲せる何れの歩みも皆、財産所有に依存してゐるといふことは、これ皆人の知れる所である。而して商業に於ける亦これに異らない。中世の商人階級は、家屋賃借、土地定期金賣買の實行によつて、動産資本の所有者となつた都市の土地所有者の階級より生じたのである。十七世紀以降に至つては、此の土地家屋賃借人及

び商人の階級よりして製造業者階級が生まれ出づるに至つた。而して此の製造業者が自己の資本を用ひて其の工業經營の効果を擧げるといふことに依つて、其處に二個の新らしき分業形式が成立するのであつて、之れ即ち分業と労働推移とである。而してかの生産分割も此の時に至りて初めて、十分なる作用を發揮し得るに至る。斯くて今や初めて、半成品は大量に仕事場より仕事場へと移動し、何れの經營に於てもそれが資本となり、何處に於ても其れによつて利得が得られることとなり、生産各節毎に新らしき利子と費用とが附加せらるゝこととなつた。然り而して分業は無資産賃銀労働者階級の前提條件となるものにして、分業の資本主義的組織によつて職業を失ひたる手工業者階級の一部及び土地を有せざる農民人口よりして斯かる階級が生ずるのである。

分業が斯くの如くに財産に依存しつゝあるといふ關係の特に著しきは、工業に於て見得るのである。中世に於ては工業的分業の進歩は何れも、都市の『生業』の數を増加せしめた。これ其の爲めに經營資本の額を低下せしむるに至つたからである。然るに現代に於ては、分業の進歩は却つて獨立業者の數を減少せしめてゐる。これ其の爲めに固定資本及び經營資本が増大せしめられたからである。中世に於ては出來得るだけ澤山の労働を生産物中に體現せしめんが爲め、何れの工業生産物をも出來得るだけ長く一經營中に留置せんと努めたるに反して、現代に於ては支出せる利子と得べき資本利潤との關係をして一層有利に形成せしめんが爲め、經營資本を分業によつて出來得る丈早く個々の生産節を通過せしめんとしてゐる。中世に於ては資本の貧弱なりしが爲め職業分割を生ずるを餘儀なからしめたのに、現代に於ては資本の豊富なるが爲め分業及び労働推移を促し出してゐるのである。

斯くの如く今日の社會的職業組織の大なる特徴は財産分配の相異より歴史的に發達し來りしものにして、我々の從來の經濟組織によつて益々鞏固ならしめられた此の基礎の上に引續き其の存立を繼續し行くものである。此の最後の事柄

は實に次の二つの事情よりして極めて簡単に解釋し得られる所にして、即ち(一)何れの職業も此の經濟組織の下に於て所得を生じはするけれども、この一般的勞働組織の中にあつて所得獲得の優秀なる地位を占め得るものは唯だ有産者のみにして、之に反して無産者は不利なる地位に甘んじ居ざるべからざること、(二)財産そのものは其の資本主義的性質によつて、其の所有者をして少しも働かずして尙ほ所得を得せしめ、更らに此の能力を所有者の子孫に相續せしめ得ること、即ち之である。而して現在の財産階級なるものが同時に社會的職業階級でもある限りは、其の然る所以のもの、實に職業が財産を作り出す爲めによるに非ずして、寧ろ財産が職業選擇の條件となり、通例職業の産み出す所得は職業の基礎となりたる財産と同じ様な風に段階を取り得るによるものであると云はなくてはならぬのである。

〔一六〕 ロトマル著『職業選擇の自由』(Jotmar, Die Freiheit der Berufswahl) 一八九八年、ライプチヒ版、二七頁参照。

余が斯く述ぶる事柄は、これ決して事新しきことには非ず。我々の中のどの一人でもが日常の經驗が彼に與へる此の解釋に従つて行動するのであり、科學的な經濟學者も亦常に承認し來つた事柄である。而して貨銀の全學説は勞働者の子は到底勞働者たらざるを得ず。而してこれは彼が貧窮なるが故に然るものにして、決して其の職業的順應が遺傳しるるよりしての結果には非ずとの假定を其の出發點としるものに非ずして何ぞ。然も尙ほそれに着手し經營し行く爲めには資本を必要とし、もしくは其れを習得するには多額の費用を要する如き種類の職業は無資産者には禁止されあると何等選ぶ所がないといふことを、今更めかしく實例を指摘して證明すべき要があるであらうか。斯くてかの持て囃されつゝある『職業選擇の自由』といふ事は極めて狭き域内のみ行はれてゐるに過ぎぬものである。而して此の境界を打ち越ゆることは極く稀有なる例外の場合であつて、通例兩親の家の財産裝備によつて各人に指定されるものは特殊の職業には非ずして、彼が屬すべき社會的職業階級(一七)なのである。況んや人間を估價するに際して、各職業階級に附せられて

ゐる「社會等級」なるものも、もしそれに相應せる財産裝備の伴ふなくんば、到底維持せられ得ざるものなるに於てをや。……此等のことは社會等級なるものも、畢竟するに『社會的(分勞)に基ける(分化)二次的結果』にはあらずして、財産と職業との理性結婚の所産見なりと見るべき證左ではあるまいか。

〔一七〕 余が此處に財産と職業との相互的制約關係を明らかにせんとしたる概念に就いては、拙著『パーセル・シュエツト州の人口』(Bevölkerung des Kantons Basel-Stadt) 七〇頁を参照せよ。

世の中は非常に多くの社會的職業階級に分れるかも知れないが、其の夫々の間には更らに極めて多數の職業部門ありて、此等職業部門の間には絶えず勞働力の交換が行はれるであらう。斯かる勞働力の交換は職業種類が略ぼ同等なる財産裝備を要求し、従つて同等の「社會等級」に立ちゐるものゝ範圍に於て行はれるものにして、換言すれば、人々が相互に婚姻を結び又は常に交際をなされる範圍に於て、或は同等の教育水準にある範圍に於て行はれつゝあると爲し得るのである。此等の事物は皆相互に交互關係に立つてゐる。故に高級の官吏が己が息子を、後になつて采有を賣はんが爲めに農業をするやうに指定し、大地主や製造業者の息子が大學へ入つて學者となり、坊さんの子が技師となり、技師の子が醫者に、醫者の子が商人に、商人の子が法律家や建築家となるが如きことあるも、それは日常茶飯の現象にして別に訝かしとなすに足らぬのである。其れと同じく、百姓より學校教師や麥酒釀造者に變り、麵麴焼より時計製造人に轉じ、鍛冶匠より製本屋に移り、鍛夫より工場勞働者に變じ、田舎の日傭取より線路監督や辻馬車の馭者になるには何等の面倒もなく屢々行はれてゐる所である。大臣と農業者、製造業者と大學教授、商人と建築家等々の如くしかく甚しく懸け離れるものは、分勞によつて『分化』された人はその他にあり得ないにしても、斯かる推移を以て吾人は、勞働技術には非常な差異あるにも拘らず、社會的には全く合適のことにして、經濟的には少しも疑惑を挾むべき事柄に非ずと思

惟するのである。而して製造家の息子が又製造家となり、百姓の子が又百姓となるとしても、それは多くの場合に於て其の職業に一度順應したる財産状態が職業を課したといふまでであつて、此の強制されたる役目が其の當人に取つて適當のものなりや否やは少しも問題と成つてはゐないといふ事を知るのである。

斯くの如く實際生活を觀察し來れば、分勞によつて生じたる人的分化が遺傳すといふシュモラーの學説は、これを餘りに狹義に解釋するを許さぬのである。即ち靴屋の息子は其の遺傳的順應によつて、額縁を作るよりも靴を作るを得意とすべく、僧侶の息子は、假令生れた其の日に父親が死したりとしても、凡べての職業の中にて矢張り僧侶の階級に對し最大の天質を有するならんといふが如きは、彼の學説は到底それを立證しやうなぞ考へ得られない。此の後者の場合にありて、其の僧侶の先祖が二世紀此方、僧職を受け継ぎ來りしものとすれば、生物學的遺傳概念を堅持せば、職業的順應は一代々其の程度を高めて行いて、いよいよ完全なる職業能率が現はれ來るべきものと見ねばならぬであらう。されど今述べたるが如き状態にあるドイツ新教に屬する無数の僧侶の家族が今日に於て十七世紀に於けるよりも更らに優れた説教者や、一層衆生を感動せしめる高僧を世に出してゐると、果してよく何人が眞面目に主張せんと欲するものがあるであらうか。

我がドイツの都市の同業組合的手工業の範圍に於ては、十六世紀より十八世紀に至るまでは、各工業が狭量なる門戸閉鎖を行ひ居たりしが爲めに、親方の地位は極く少數の除外例を別として、事實上父より子へと相續されてゐたのである。然るに其の技術の推移如何と見れば、それは常に完成の域へと進み得ざしりのみならず、慘ましくも退歩し墮落するに至りしことはシュモラー自身さへ已にその古き著書に指摘してゐる所である。その息子等は其の父祖の機巧を一層増し行くを得ざりしはおろか、父祖が到達し得たりし職業的順應の程度をすら到底支持し行くを得なかつたのである。

〔一八〕『十九世紀ドイツ小工業史』(Zur Geschichte der deutschen Kleinindustrie in 19. Jahrhundert) 一四頁、六六七頁以下。

かるが故に、もし此の新學説を害はざらんと欲せば、これを社會的職業階級の所屬者の間には肉體的併ひに精神的性質の遺傳するものなりといふ事に關係させなくてはならぬのである。然るに此の職業階級なるものは通例、財産階級併ひに所得階級でもあり、此の財産及び所得によつて(物質的併ひに精神的)生活標準の高さが制扼されつゝあるものなるが故に、吾人はかの學説の創設者に對して、財産によつて夫々の職業階級に可能となつた榮養と教育との方法の結果であるものと、遺傳的職業順應の作用に歸すべきものとを區別せんことを要求せざるを得ぬこととなるであらう。然るに尙ほ斯かる有り得べく且つ多分らしく思はれる諸原因の分割行はれず、且つ財産分配に歸することが遙かに確實なりと思料され得る事柄を、何等調査する所なく漫然之を分勞に基けるものとなす如きことあらば、此の全學説は所謂『歴史的證明法』に伴ふ否むべからざる弱點の爲め、畸形なる進化論的比論として、證明を待たずして立てられたる措定として取扱はれることを甘受せねばならぬであらう。

一の全社會的職業階級内部に於て、一代代より次の世代へ「肉體的組織と精神的組織」即ち「神經と筋肉」とが遷移するものなりとすることに就きては、如何にも未だ何人も疑はざりし所であつた。而して世人は之を稱して尙ほ且つ遺傳と呼ぶかも知れない。されど此の際觀過するを許さざる事柄は、どの新しい世代も教養と教育とによつて其の兩親の精神的併ひに道義的水準線にまで引き上げられねばならぬと云ふ其の事である。然り而して教育要素がリールの穿ちたる言ひ方の如く、彼等に「飛んで來る」ものであるとするならば、彼等の環境の例證が彼等をしてそれに模倣せしむる刺激を與ふるならば、他の境遇の下にて生長したる者が努力によつて初めて學び得なくてはならぬ多くの事柄を、其の

人は何等の骨折なしに體得してゐるとすれば、此處に問題となり來ることは、常に後天的の事柄にして、決して先天的のそれにては非ざることである。加之、その事は或る程度まで、肉體組織に當て嵌るのであり、肉體組織が榮養併びに教育の方法に其の根據を有するといふ限りは、「神經と筋肉」に當て嵌まり得る事柄なのである。

〔一九〕シュモラー著『社會團體の構造及び生活』(Schäfte, Bau und Leben des sozialen Körpers) 第二卷、二〇一頁には教育學の生理的側面を述べて曰く、『新らしき國民の生理的教育及び兩親又は祖先の肉體的完成へ訓練すると云ふことは生殖作用の有力なる仕事として加へらるべきことである。……此の第二の行爲によりて、其の兩親には存せざりし肉體的順應が得らるゝのである』と。

職業的順應の諸要素は、上に敍べし「飛んで來る」といふこと及び模倣といふ方法により、他の教育要素と同様によく遷移され得るものではあるけれども、此の經過は生物學的意味の遺傳とは根底的に異つてゐるのである。此の生物學的意味に於いて遺傳さるべきものは、其の子孫が生誕の瞬間より其の兩親の影響を全然受けずゐる時に於ても亦出現すべきものである。

〔二〇〕シュモラーにとつては此の事が問題であるいふ事は、彼がプロイセン年報、六九卷、四六四頁に言明してゐる通りである。シュモラーが前掲書、第二卷二〇八頁以下に立てた遺傳の社會學的概念は、シュモラーの説明がそれに多く關係して居るにも拘らず、彼には問題となつてはゐない。

今日我々の間に存する六乃至八個の社會職業階級の文化水準を形作りつゝある肉體的併びに精神的特性を、其の中のどの階級に屬する子孫にあつても、假令他の階級の間にて育て上げられしとするも、尙ほその特性が現はるべきものであるといふ意味にて、遺傳的なりと考へる人々があるかどうかを余は知らない。實際生活に於て斯かる種類の場合を示してゐるのは極めて稀有であり、未だ曾て何人も此等の事例を蒐集せんと試みたものが無かつた。されど其の中にあつ

て最も多く問題となるものはと云へば、下層階級の子孫にして上流の職業階級の家族によつて育てられ、又は正式に養子とされたものである。然るに斯く人爲的に上流の社會集團に加へられた人が後になつて職業的才能に乏しく、文化の程度卑しといふことによつて、生れながら此の集團に屬する人から區別されるものであると主張する勇敢な人はあるまいと思ふ。

尙ほ此れに屬する觀察は更らに進んで或る職業階級の子孫が自力を以て高き職業階級に昇進する場合を示してゐる。今日の資本主義的生産方法の時代に於ては、斯かる試みに對しては幾何の困難があり、幾度かの失敗が脅かしつゝあるかは何人も周知してゐる所にして、又假令職業的技術的有能を凡べて身に着けても、その新らしき職業階級の精神的道義的水準に到達するを得ざる『成上り者』の有様を何人も容易に顔前に髣髴たらしめることが出来るであらう。此の事は已に、分勞によつて提供された職業への順應——それが有効なる職業行使の主要件なのであるが——は各人により銘々に又左迄困難なく完成されるのであるが、之に反して職業階級の文化水準によつて要求される道義的並に一般精神的順應なるものは唯だ徐々にのみ、適當なる環境の間に成熟し行くものにして、二三世代を経て漸く完成の域に到達し得るものなりといふ事實が包藏されてゐるのではあるまいか。

シュモラーの遺傳説に反對する嚴然たる證明の爲し得ざるは、それに賛成するその爲し得ざるが如く然りである。此の問題を正確に取扱はんとすれば、例へば人は一國民の有する偉人の兩親の職業を探索して、其の中何人が卑賤の職業階級より身を起したるかを確定しなくてはならないであらう。其れと同時に、各職業階級に對して其の階級に屬する人々が其の高き才能を發揮せしめ得る優秀の地位に到達する蓋然性の度を決定せねばならないであらう。而して最後に各職業階級より前頭角を表はすに至りし偉人の實際の割合と、確率計算によつて得たる割合との關係を比較せねば

ならないであらう。然るに斯種の研究に對しては、一切の前提條件が缺けてゐることは今更ら説くを要しない所である。さりながらなほ此のシュモラーの新學説は多くの世代の觀察に基ける近代文化民族の解釋とは背反してゐるものであるといふことは此處に主張し得るのである。

試みに思へ、極めて多數の天才者が外的境遇の逆勢の下に萎縮し行くことの幾度か呷られたりしことを！ 然かもなほ此の命題に對して、眞箇の天才者は必ず其の行くべき道を自ら切り拓くものなりと云ふ異なる命題を對立させたとすれば、それは或は僥倖なる努力者の自己感情に阿ね得べけんも、實際に於ては到底何等の證明をも贏ち得べからざるものである。

フランス革命以後の我々の全社會法的發展は、何れの自由職業及び我々に取りてなほ職業組織の最高點なりと思考されてゐる一切の官職に何人もが就くを得るといふ前提の下に立つてゐるのである。然るに此の「職業の自由選擇」なる原則、それが承認されるまでには非常なる惡戰苦闘を経たのであるが、その原則も、もし財産分配の不平等の外に、職業的順應の遺傳も尙ほ行はれて其の實行を阻礙するものありとせば、それは大迷誤たるを免れず。それを實現せんとする努力は徒勞と化して仕舞はねばならぬであらう。

此のシュモラーの學説の見地に立てば、我國の最古の大學の設備の多數も亦錯誤なりと思はれざるを得なくなるであらう。準備に多額の費用を要するといふことが、どれ程高い程度に、職業に於ける優秀の地位に進まんとする道を狭めてゐるかは何人も熟知する所にして、此の點に官吏及び學者階級の能率に對して大なる危險の存することも餘程早くより認められるて、貸費、食費免除、給費及びそれに類する學費缺乏者に研究を可能ならしむべき設備を以て此の危險を除去せんと企てられたのである。而して此等の設備が實際上收め得たる效果については異議があり得るであらう。

然しながら此等の事柄を批評せんとするに當つては、優秀なる職業種類に於て出世することは常に其の當人の技能にのみよるに非ずして、各個人の社會的教育の如何、自己の力量を發揮せしむべき其の人の資格如何によるものなること、此の不完全なる世界に住みては、眞に才能ある者が謹ましく差控へ居れば、凡庸なる力量者の鐵面皮に横行するに對して後れを取り易きものなること、社會階級を一番のどん底より攀ち登らんと企てる人は其の一番の天邊に達する爲めには、其の出發點を中位の高さに有する人と比して遙かに多くの困難の存せざるを得ないことなどを觀過するを許さぬのである。職業經歷に於て卓越することに對してドイツ語は適切な表現を有して居り、それで其の結果に對する個人の參與の分前を甚だ巧みに特徴づけてゐるが、そのドイツ語は *sich hervorlun* (自己を顯はす) といふのである。今かの前に述べたるリールの所謂「學問ある百姓息子」も亦、其の後の職業生活に於て特に華々しき進出を見るを得なかつた所以は、これ彼等が目覺ましき事業を爲す能力を有せざりしが爲めによるに非ずして、却つて其の大多數は正當の地位に於て「自己を顯はす」ことを得ず、自己の人格を發揮せしめる術を心得てゐなかつた爲めによるのである。

職業が協力する各社會的集團形成に於ては、各階級内部に協同感情を生ずるを常とし、これが侵入者に對して本能的に反抗し、彼が如何に才能を有すとも、彼をして其の才を揮ふに由なからしめる場合に乏しからざるに、他方に於ては如何に暗弱なるものも其の階級に生まれ付ける者はこれを保護し支持し行かんとするものである。斯くて純粹なる職業階級なる極印が最も鮮かに捺されてゐるかの官吏階級にありてさへ、尙ほ且つ其の昇進には財産狀態と相併んで、個人的關係と家族關係とが決定的な役割を演じてゐるのであり、此等の關係が縁者偏愛主義の口實となる場合には、それ等が人物の昇進に閥族の特徴をすら帯びしめるに至るものである。其等の關係が勢力を及ぼし得ざる職業的に組織されてゐる勞働の廣い範圍にありては、傳來の經濟組織にして存續する限り、財産なるものがいよ／＼以て社會階級構成の根

本原因に止まりあることであらう。而して分勞は、丁度不自由勞働の時代に於ける共力と同じく、唯だ副的意義を有するに過ぎざるに至るであらう。又職業が遺傳するとするも、それは職業的順應が遺傳したといふことによつて生ずるものに非ずして、職業所屬の條件となりたる財産が相續されることよりして生ずるものなのである。

仍て知る、かのシユモラーの遺傳説は——惟ふに其の創唱者は無意識ならんも——『富者萬能』¹⁾の社會哲學の忌むべき形相を示しつゝあるを。そは職業生活の高き地位を充たし得べき力量ありと自信しつゝある下層に生れし人に向つて將に斯く叫ばうとする。曰く、『あらゆる希望を消え失せしめよ。汝の肉體的併びに精神的組織、汝の神經、汝の筋肉、即ち幾世代よりの因果の鎖は汝を固く地面に緊縛しつゝあるを知れ。汝の祖先は幾百年來奴隸なりき。汝の親父、汝の祖父は日傭取りなりき。汝の職業もそれと似たるものと初めより定まりゐるものぞ』と。然り而して斯かる新學説の結果が我々の道義的意識に對し、我々の社會的公正の理想に對して如何に甚しき侮辱を加ふるものなるかは此處に贅言するの要はあるまい。

余の考ふる所を以てすれば、此の學説は今日あるが如きなほ立證されざる命題といふ状態に於て已に早く、文化の零點より近代文化の最高點への全過程、分勞の最低段階より最高段階への全過程、社會的階梯の最下段より其の頂點への凡べての道が一世代の間に踏まれ、もしくは其の逆の場合も一世代内に行はれるといふ左して珍らしと云ひ得ざる觀察によつて覆されるものである。さはさりながら、その精神界の偉人の中に、他の多數の者は暫く措いて論ぜずとするも坑夫の息子なりしルッテル、鞍匠の息子なりしカント、村の貧しき亞麻機織の子なりしフィヒテ、靴直しの子なりしウインケルマン、園丁の子なりしガウスを數へてゐる國民の間に、斯くの如き譎怪なる學説の生まれ出でんとは、いかで驚かずして止み得やうか。

〔一一〕 ヴァレリウス・マキシムス (Valerius Maximus) は已に、『卑賤に生れて榮達せる人に就きて』といふ一章を書けるが、其の冒頭に曰く『或は卑賤に起つて高位に進み、或は名家の出にして其名を辱かしめ手にせる光明を高所より深淵に投ずる例乏しからず』と。……シユモラーは最近に於て彼の學説の調子を甚しく下げ居れども（『原論』四三〇頁以下）、其の中に『才能ある人、偉大なる人物のあらゆる階級より輩出して社會の上流に活躍しつゝあるの』事實を『變化性の獨得なる影響』に歸してゐる。然れども其れにては何等の説明にもなりあざるものではあるまいか。

今次の世界大戰中に、有能者¹⁾向上の要求が標語のやうに出現し、官廳の發表や方針の中にさへも反響を示したのである。その事は、社會が己れ自らの事を思念して、從來は職業生活の高き地位が碌々たる人物に占められてゐたに反し、多數の達識者が社會の間に埋もれて其の驥足を伸ばし得なかつた事實を認識して痛痕した一表徴と見ることが出來たのである。

〔一二〕 此の標語の創始者は、自分の言葉がこれまで有能者の完成を妨害してゐた障礙を撤去すべきだといふ以外には了解され度くないものと思つてゐた。然しその有能者は勉強しなくてはならなかつたのだといふ事が自然の前提となつてゐた。所が後になつて二三の人が此の言葉を解釋して、何物をも學びもせず従つて何物をも忘れもしなかつたやうな人物が國家の最高位を要求することが出來たのだといふ風にして仕舞つた爲めに、どうしても「神が役を授ける人には智能をも與へ給ふ」といふ謬を當にしなければならなくなつてゐる。

此の最後の思ひ出は、父祖を高めて世に顯はした徳行は通例、孫や曾孫には相傳するものには非ず、假令職業は繼承されるとするも、それを遂行すべき能力は消滅するものなりといふことを、幾世代かの觀察が確證したものを、長くかゝつた討究よりも遙かに巧みに敍べ得たものではあるまいか。何れの貴族制にせよ、それが財産貴族制になると、職業貴族制になると論なく、時代の經るに伴れて漸く墮落して行くものなることは、餘りに肥沃なる土地に生ずる植物が退化し

1) beati possidentes